

博士学位論文（東京外国語大学）  
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	清水 祐美子
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 171 号
学位授与の日付	2013 年 9 月 11 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	19 世紀フランスにおける民謡収集と地域意識の形成 ― 地域と国家との間で

Name	Shimizu, Yumiko
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 171
Date	September 11, 2013
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	The Collection of the Popular Traditional Songs in the Nineteenth Century France and the Formation of the Local Consciousness : Between the Local and the National

博士論文

19世紀フランスにおける民謡収集と地域意識の形成

—地域と国家との間で

清水 祐美子

# 目次

はじめに .....	1
1 19世紀フランスにおける文化遺産保存政策 .....	1
2 民謡収集と国民国家形成との関係をめぐって—フランスの場合 .....	4
3 19世紀フランスの民謡収集に関する研究 .....	6
4 フォルトゥール調査に関する研究 .....	8
5 19世紀フランスにおける地域と国家の関係についての研究 —文化政策を中心に .....	10
5-1. 地域と国家—対立的構図からの脱却へ .....	10
5-2. 地方在住の研究者による地域的固有性の《発見》と フランスへの帰属意識 .....	14
6 研究史批判と問題の所在 .....	17
7 本稿の構成と史料 .....	19
<b>第1章 揺らぐ「民謡」概念—文化政策としての全国民謡収集の意図 .....</b>	<b>25</b>
第1節 「民謡」をめぐる解釈の揺れ .....	25
第2節 「民謡」概念の統一の試み—『手引』における民謡像 .....	29
第3節 新たな関心の出現 .....	36
<b>第2章 公教育省歴史研究委員会と未刊行史料集成事業 —「地方」と「中央」の関係に着目して .....</b>	<b>40</b>
第1節 未刊行史料集成の背景と歴史研究委員会の構造 .....	40
第2節 史料収集における地方委員・通信委員の役割 .....	44
第3節 歴史研究委員会の展開 .....	45
<b>第3章 民謡収集とアイデンティティの形成 —フランス・フランドル地方の研究者達に見る .....</b>	<b>52</b>
第1節 フランス・フランドル地方の概観 .....	52
(1)フランス・フランドル地方の歴史的概観 .....	52
(2)19世紀中葉における「フラマン語圏」の言語状況 .....	53
第2節 フラマン語圏におけるフォルトゥール調査 .....	55
(1)ノール県、パ＝ド＝カレ県でのフォルトゥール調査への協力者達 .....	55
(2)エドモン・ド・クスマケル .....	57
(3)ルイ・ド・ベッケル .....	58

第3節 民族起源としての地域言語・地域文化	
—クスマケル、ベッケルの共通認識 .....	59
(1) 地方言語とフランスとの関係 .....	59
(2) フラマン語の民謡とフランスとの関係 .....	62
第4章 国境を越えて—ベッケルの民謡収集 .....	63
(1) 国境を越えた連帯を求めて—「オランダ語」圏の一体性 .....	63
(2) パリへの意識 .....	67
第5節 フランドルの中の「フランス」として—クスマケルの民謡収集 .....	69
(1) 旋律の採譜への情熱—歌われたままに、正確に .....	69
(2) 旋律に宿る、フランス・フランドル地方の固有性 .....	71
 第4章 農村民衆の習俗と地域的固有性	
—フランス語圏の諸地域での民謡収集 .....	77
第1節 「フランス語圏」におけるフォルトゥール調査の実施状況 .....	77
(1) 「フランス語圏」の定義 .....	77
(2) フォルトゥール調査の実施状況—フランス語圏の特徴 .....	78
第2節 民衆の歴史の史料としての民謡—フランス語圏の場合 .....	81
(1) シャンパーニュ地方の研究者、プロスペル・タルベ .....	81
(2) フランス語圏における、民謡の起源に対する関心の低さ .....	84
第3節 フランス語圏での地域意識のあり方 .....	87
(1) 「文明」と「伝統」—フランス語圏の民謡収集を貫く対立軸 .....	87
(2) フランス語圏で収集された民謡の傾向 .....	90
(3) 地域的固有性—農村民衆の習俗の中に .....	94
 むすびに .....	99
 資料 .....	106
 参考文献 .....	114

## はじめに

### 1 19世紀フランスにおける文化遺産保存政策

19世紀フランスにおける文化遺産の保存は、政府の主導のもとで推進されたということに最大の特徴がある。歴史的建造物の調査や保存を全国各地で行なうために、七月王政以来、歴代のフランス政府は次々に担当機関を設立した。歴史的建造物総監督官（1830年創設）<sup>1</sup>、内務省歴史的建造物委員会（1837年創設）などが続々と設置され、建築物の調査、修復、そして必要に応じた取用という一連の保存行為を行なう権限を、総監督官を頂点とする政府機関へと集約させる仕組みが作られていく。フランスの歴史的建造物保存体制の特徴は、こういった行政組織や法の整備が他の欧州諸国よりも早期に進み、19世紀末には国家による文化遺産保存の範と目されるまでになった点にあると指摘されてきた<sup>2</sup>。

歴史的建造物保存体制の構築と並行して、七月王政政府は、建造物以外の文化遺産の保存政策にも着手した。碑文・証書等の文字史料、自然科学分野の研究成果、民謡といった多岐にわたる分野で史料収集を行い、「未刊行史料集成 Collection des documents / monuments inédits」として刊行する事業である。この事業を担当する組織として、1834年、公教育大臣ギゾーは「歴史研究委員会 Comité des travaux historiques」を発足させた。歴史研究委員会は七月王政崩壊以後も存続し、数度の改組を経て現在の「歴史・科学研究委員会 (CTHS : Comité des Travaux Historiques et Scientifiques)」へ至る。本稿で取り上げ

---

<sup>1</sup> André FERMIGIER, « Mérimée et l'Inspection des monuments historiques », in Pierre NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. II : La Nation*, vol. 2, Paris, Gallimard, 1986, pp. 593-612.

<sup>2</sup> とは言え、七月王政期に歴史的建造物保存のための行政機構が初めて設置されて以来、法的根拠の未整備な状態が長く続いた。歴史的建造物委員会による歴史的建造物への指定が法的効力を持つに至るには、1887年3月30日法の制定を待たねばならない。Philippe TANCHOUX, « Heurs et malheurs de l'administration chargée de la protection des monuments historiques en France ; 1830-1848 », *Culture et gouvernance locale* (Laurentian University, Sudbury, Ontario, Canada), vol. 1, n° 1, 2008, pp. 28-46 (esp. p. 46). 19世紀フランスの文化遺産の保存に関わる行政に関する法整備の過程を詳細に跡づけた研究は、現在までに同論文以外には見当たらない。事実誤認が数カ所あるものの（本稿第2章で詳述する、公教育省歴史研究委員会の組織改編に関する点など）、同論文は、それを補ってあまりある貴重な知見をもたらしている。

る、未刊行史料集成の一環として行なわれた全国民謡調査を担当したのも、この歴史研究委員会である<sup>3</sup>。

monument historiqueという表現には「歴史的建造物」の訳を当てることが多いが、19世紀の法令等の公式文書の用法を見ると、この表現や「記念物 monument」といった語彙は、建造物にも、未刊行史料集成のようなそれ以外の文化遺産にも、区別なく用いられている<sup>4</sup>。すなわち、19世紀当時には史料収集も「記念物」収集と称され、文化遺産保存の一領域を占めていたのである。それにも関わらず、文化遺産保存に関する歴史学的考察は、芸術作品や歴史的建造物の保存を主たる対象として進められてきた<sup>5</sup>。19世紀フランス政府が手がけてきた一連の文化遺産保存政策の中でも、史料収集という側面は、考慮の埒外に置かれてきたのである。これまでの研究史で看過されてきた、政府による史料収集の実態が明らかになれば、フランス政府がいかなる要素を重視して国の文化遺産として収集・保存したのかという点に関し、新たな知見を得ることができるのではないか。

未刊行史料集成は数十年間に500点以上もの書物を生み出した壮大な事業であるため、全容の把握は大きな仕事となる。そこで本稿では、数ある未刊行史料集成事業の中から、第二帝政期に実施された全国民謡調査の事例に的を絞る。この事業は、指揮を執った公教

---

<sup>3</sup> 歴史研究委員会は、全国民謡調査の開始を命じた1852年9月13日の大統領令において「フランスの言語・歴史・芸術委員会 Comité de la langue, de l'histoire et des arts de la France」へと改称・再編され、フォルトゥール公教育大臣の在任中（1852-1856年）は、この名称が用いられた。だが本稿では、同委員会の組織的構造は改称前後の時代と本質的に不変で連続性があると考え、「フランスの言語・歴史・芸術委員会」よりも広く知られている「歴史研究委員会」の名称を用いる。ジェルソンやパルシス＝バリユベの先行研究（註39および註43で後述）でも、同様の措置が取られている。

<sup>4</sup> 「記念物」の概念史については、Dominique POULOT, « Naissance du monument historique », *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, n°3, 1985, pp. 418-450.

<sup>5</sup> 例えば、André CHASTEL, « La notion de patrimoine », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire: t. II, La Nation*, vol. 2, 1986, pp. 405-450. プーロの一連の研究も参照。前註の論文の他、例えば、POULOT, *Musée, nation, patrimoine 1789-1815*, Paris, Gallimard, 1997 ; Id., *Une histoire du patrimoine en Occident, XVIII<sup>e</sup>-XXI<sup>e</sup> siècle : Du monument aux valeurs*, Paris, PUF, coll. « Le nœud gordien », 2006.

育大臣フォルトゥール (1811-1856)<sup>6</sup>の名に因んで、フォルトゥール調査 l'enquête Fortoul (1852-1857) と呼ばれる。1852年9月、フォルトゥール大臣の進言を受けた形で大統領ルイ＝ナポレオン（後の皇帝ナポレオン三世）が大統領令を発し、これを以て全国での民謡収集が始まった。ルイ＝ナポレオンの立てた計画は、全国各地で集めた民謡を公教育大臣付の組織が審査して、『フランス民衆詩歌集成』と題する書物を編纂するというものだった。フォルトゥール大臣は、この事業を担当する機関である歴史研究委員会の本部を構成する正委員 *membre titulaire* のポストに、アカデミー・フランセーズに所属する研究者等、国内第一線の知識人の英知を結集させた。一方、全国各地では、小規模な村落にも調査が行き届くよう配慮がなされつつ、民謡調査網が編成された。その調査網には、地方学術団体に所属して研究活動にいそしむ地方の研究者達（貴族、聖職者、自由業者、古文書管理官、図書館員等）や、小学校教師・初等視学官・大学区長（アカデミー管区長）といった学校関係者ら、数百名が動員された。民謡収集への貢献が認められた者にはメダルが授与されるほか、一連の必要経費が公教育省の予算から捻出されることに決まった<sup>7</sup>。このように政府の全面的な後援を得て始動したフォルトゥール調査は、歴史研究委員会の正委員達が開く1857年5月の例会で調査終了が決議されるまでの、足掛け5年に渡って続けられた<sup>8</sup>。莫大な歌が集まったため、編纂作業には20年弱の時間を要した。『フランス民衆詩歌集成』が500～600頁の二つ折版全6巻の形を成して、国立図書館手稿部に収蔵されたの

<sup>6</sup> フォルトゥールはフランス南東部の都市、ディーニュの公証人の家に生まれた。批評家や記者として20代前半を過ごした後、文学・美学を修め、大学で教鞭を執る。1848年末に地元バス＝ザルプ県の立法議会代表補欠選挙で初当選し、政界入りする。ルイ＝ナポレオンのクーデター後の内閣で公教育大臣に就任し、1856年7月に急逝するまで同職を務めた。Paul RAPHAËL et Maurice GONTARD, *Hippolyte Fortoul, 1851-1856 : Un ministre de l'instruction publique sous l'Empire autoritaire*, Paris, PUF, 1975. 野村啓介氏は、フォルトゥールがルイ＝ナポレオンの信頼を得て重用された大臣のうちの一人だと指摘している（野村啓介『フランス第二帝制の構造』九州大学出版会、2002年、89-98頁）。国立古文書館 (Archives Nationales de France、以下AN) では、フォルトゥール家に関わる18世紀以降の書類を所蔵している (AN, 246AP/1-45)。イポリットの子孫が1960年頃に国立古文書館に寄贈した史料群である。この中には、イポリット・フォルトゥールの公教育大臣としての職務関連のメモ類や書類 (246AP/16, 17, 19)、皇帝や家族や友人等との私的な書簡 (246AP/ 27, 28, 36)、研究者時代に記した読書記録や著作の草稿 (246AP/31, 33) が含まれている。一部書類はフォルトゥール自身が整理して、管理を家族に託したものである。また、AN, 246AP/31に保管されている公教育大臣在職中のフォルトゥールの日記は活字化され、刊行されている。Hippolyte FORTOUL, *Journal d'Hippolyte Fortoul, ministre de l'instruction publique et des cultes (1811-1856), 1<sup>er</sup> janvier 1855-4 juillet 1856*, publié par Geneviève MASSA-GILLE, Genève, Librairie Droz, 1979-1989, 2 vols.

<sup>7</sup> 1852年9月13日の大統領令（全6条）。J. B. DUVERGIER (éd.), *Collection complète des lois, décrets, ordonnances, réglemens et avis du Conseil d'État : Année 1852*, Directeur de l'administration, 1852 ; reprint, Bad Feilnbach, Schmidt Periodicals, 1995, pp. 655-656.

<sup>8</sup> *Bulletin du Comité de la langue, de l'histoire, et des arts de la France*, t. 4 : 1857, Paris, Imprimerie impériale, 1860, pp. 141, 164.



は、ようやく1876年のことである<sup>9</sup>。ナポレオン三世の治世がついてから、すでに6年が過ぎていた。

未刊行史料集成事業の中からフォルトゥール調査という事例を選択した理由や狙いについては、以下、研究史を検討しながら説明していくこととしたい。まず、19世紀における民衆の伝承の収集について、国民国家形成との関係についての見解に注意しながら、先行研究を整理することから始める。次に、フランスの民謡に関する研究、および民謡収集の歴史に言及している研究の状況を見ていく。最後に、19世紀フランスにおける地域と国家とのあり方に関わる研究史を整理する。こうした研究史への批判を踏まえた上で、本稿の問題の所在を明確にしていく。

## 2 民謡収集と国民国家形成との関係をめぐって—フランスの場合

19世紀における民謡等の収集について、国民国家形成との関係で論じられてきたことは周知の通りである。神話や叙事詩の類をはじめとする民謡を収集する行為が民族運動において大きな役割を果たしてきたということが、複数の研究で指摘されてきた<sup>10</sup>。ただ、こうした研究は東欧諸国等を主たるフィールドとしている。そのような中でフランスは、19世紀に民族運動を経て国民国家形成に至った国々とは異なる、例外的な存在と位置づけられてきた。例えば、フランスの民族学者ブロンベルジェが1996年に発表した論文では、スコットランドやドイツ等の欧州他地域と比較すると、19世紀のフランスでは民謡等の収集に対する関心が乏しかったと説明されている<sup>11</sup>。また、フランスでは、ドイツで言うところのグリム兄弟にあたるような民衆の口承の収集に功績のあった人物が、パンテオンに入るなどして顕彰の対象とされたことが一度もないこと、そしてフランスで民族学的博物館が開館したのが北欧諸国より数十年遅れた1870年代だったということなどを根拠として、

---

<sup>9</sup> *Poésies populaires de la France*, Bibliothèque nationale de France, dép. manuscrit, fond français, nouvelle acquisition, n°s 3338-3343. 当初の計画と異なり、集成は刊行されるに至らなかった。

<sup>10</sup> 例えば以下の著作。Miroslav HROCH, *Social Preconditions of National Revival in Europe*, translated by Ben FOWKES, New York, Colombia University Press, 1985 ; 2000 ; アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』加藤節訳、岩波書店、2000年（原著1983年）；アントニー・D・スミス『ナショナリズムの生命力』高柳先男訳、晶文社、1998年（原著1991年）；同『ネイションとエスニシティ—歴史社会学的考察』巢山靖司・高城和義他訳、名古屋大学出版会、1999年（原著1986年）；エリック・J・ホブズボーム『ナショナリズムの歴史と現在』浜林正夫・嶋田耕也・庄司信訳、大月書店、2001年（原著1990年）。

<sup>11</sup> Christian BROMBERGER, « Ethnologie, patrimoine, identités : Y a-t-il une spécificité de la situation française? » in Daniel FABRE (dir.), *Europe entre cultures et nations : Actes du colloque de Tours, Décembre 1993*, Paris, MSH, 1996, pp. 9-23.



ブロンベルジェは、フランスの《エリート》達が伝統的に民衆の習俗や口承に対して無関心だったとして論じている。この見解には批判の余地がある。と言うのも、フランスでは中世以来、民衆の諺や風習が収集され続けており<sup>12</sup>、フランスの昔話は《エリートの》文学との混交を特徴とすると論じられてきたこと<sup>13</sup>、そして、18世紀後半頃にはディドロらが外国の民謡に高い関心を示し、いち早く翻訳してフランスに紹介していたことなど<sup>14</sup>、少し考えただけでも反証を挙げられるからである。実際、ティエスの1999年の著書『国民的アイデンティティの創造』は、ブロンベルジェのような認識を改めるべく、フランスでもすでに19世紀前半には、周辺諸地域の取組みに触発されて、民衆の習俗に関する調査や民謡収集等が実施されていたと、具体的な事例を挙げて指摘している<sup>15</sup>。ティエスは、民衆文化の「文化遺産化 patrimonialisation」がフランスでは少なかったとする論調の背景として、欧州各地での民謡収集等の取組みが「フランス文化の普遍的帝国化への闘争として始まったと見なされた」ことから、「普遍」の発信地たるフランスではそうした「闘争」が起こりえないと、理論的に考えられてきたことがあると説明している。だがティエスは、19世紀初頭以来フランスで民謡収集等の「民衆文化への参照」の試みが行なわれてきたことを踏まえた上で、それでもなお、結果的にはフランスの国民意識の醸成に貢献しなかったという結論を出している<sup>16</sup>。こうした見解が通説となっている。

本稿は、こうした見解に懐疑的な立場をとる。ここまでに言及したいずれの研究も、フランスと他国とを比較し、フランスにおける民衆文化への関心のあり方には他国と異なる側面があったと指摘している。この指摘自体には確かに意味がある。だが、東欧諸国等の民族運動の分析で得られたパターンをフランスに当てはめる形で立論されており、フラン

---

<sup>12</sup> ナタリー・ゼーモン・デーヴィス『愚者の王国 異端の都市—近代初期フランスの民衆文化』第8章「諺と迷信」成瀬駒男・宮下志朗・高橋由美子訳、平凡社、1987年（原著1975年）。Daniel FABRE, « Proverbes, contes, et chansons », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. III : Les France*, vol. 2, 1992, pp.613-639.

<sup>13</sup> 昔話と《エリート》文学との関係については、ポール・ドラリュ「フランスの民話について」新倉朗子編訳『フランス民話集』所収、岩波書店、1993年、313-390頁（原文はPaul DELARUE, « Introduction », *Le conte populaire français : catalogue raisonné des versions de France*, t. I, Paris, Maisonneuve et Larose, 1976 ; rééd., 2002）。ロバート・ダーントン「農民は民話をとおして告げ口する」海保真夫、鷺見洋一訳『猫の大虐殺』所収、岩波書店、1986年；2007年。

<sup>14</sup> François HEURTEMATTE, « Introduction : Heurs et malheurs d'Ossian », in HEURTEMATTE (éd.), *Ossian / Macpherson, Fragments de poésie ancienne : traduction de Diderot, Turgot, Suard...*, Paris, José Corti, 1990, pp. 7-65.

<sup>15</sup> Anne-Marie THIESSE, *La création des identités nationales : Europe XVIII<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Éd. du Seuil, 1999 ; rééd. « points histoire », 2001. 欧州全域における民謡等の収集の試みを比較・検討した著作。小規模な国々や地域の事例にも詳細に目配りしている点に、同書の大きな特徴がある。

<sup>16</sup> THIESSE, « La construction de la culture populaire comme patrimoine national, XVIII<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècles », in Dominique POULOT (dir.), *Patrimoine et modernité*, Paris, L'Harmattan, 1998, pp. 267-278 (esp. pp. 271-272).

スの例外性を指摘した時点で考察を止めてしまっている。つまり、民謡などの民衆の口承を収集し保存するという取組みが、19世紀フランスの人々にとってどのような意味を持ったかを具体的に明らかにすることには、関心が向けられていないのである。この問いに答えるためには、民謡収集等の個々の取組みについて、どのような人物がどのような機会に、どのような意図で、何をいかに集めたのかといった詳細な情報を、正確に把握することからまずは始めなくてはならない。また、フランス国内が文化的多様性に満ちていることを踏まえ、地域ごとの状況を勘案しながら分析する必要もある。

### 3 19世紀フランスの民謡収集に関する研究

19世紀フランスにおける民謡収集に関する先行研究は、歴史学的アプローチをとる研究と、音楽学的（民族音楽学的）アプローチをとるものとに分かれる。前者の多くは、1970年代の地域主義的主張の高まりを背景としている。特にブルターニュ地方を中心として、19世紀以降の民謡収集が現代の研究者の注目を集めてきた。中でも、ブルターニュ地方出身のラ・ヴィルマルケが1839年に著した民謡集『バルザズ・ブレイズ』は、ブルターニュ地方のみならずフランス全体にとっても、民謡収集史上、格別の存在感を持つ書物だとして語られてきた<sup>17</sup>。と言うのも、この民謡集がパリの文壇で絶賛されたことが呼び水となって、フランス各地で民謡収集が盛んになったほか、20世紀初頭のブルターニュの地域ナショナリズム運動において『バルザズ・ブレイズ』は、地域ナショナリズムを支える役割を果たしたと見なされてきたからである<sup>18</sup>。またブルターニュ地方では、民族運動における文芸復興と似た構図を指摘するような研究だけでなく、民謡収集の詳細の解明を志向する研究も進められてきた。民謡を聞き書きする際のノート類を綿密に分析した労作が、ブルターニュ地方だけでも複数出ている。『バルザズ・ブレイズ』に関するロランの研究のほかにも<sup>19</sup>、本稿で扱うフォルトゥール調査に協力したアルマン・ゲロー (1824-1861) の

<sup>17</sup> 『バルザズ・ブレイズ』およびラ・ヴィルマルケについての研究は、例えばDonatien LAURENT, *Aux sources du Barzaz-Breiz : La mémoire d'un peuple*, Douarnenez, ArMen, 1989 ; Jean-Yves GUIOMAR, « Le Barzaz-Breiz de Théodore Hersart de La Villemarqué », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. III : Les France*, vol. 2, pp. 526-565 ; 梁川英俊「ブルターニュにおけるナショナリズムの誕生—『バルザズ・ブレイズ』以前のラヴィルマルケ（一）～（四）」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』、第54-57号、2001-2003年；ラ・ヴィルマルケは、本稿で扱うフォルトゥール調査を実施した公教育省歴史研究委員会（本稿第2章で詳述）の正委員として、地方から集まる民謡の記録を精査する任にあたった。

<sup>18</sup> 原聖『〈民族起源〉の精神史—ブルターニュとフランス近代』岩波書店、2003年。

<sup>19</sup> LAURENT, *op. cit.*

民謡収集について、生前には未刊行に終わった民謡集の原稿がナント市古文書館所蔵史料等をもとに復元され、解題が加えられた上で刊行されている<sup>20</sup>。また2010年には、フォルトゥール調査で収集されたブルターニュ地方の民謡に関する手稿史料を全て網羅して、活字化した文献も刊行されている<sup>21</sup>。他方、ブルターニュ地方以外の地域では、民謡収集の実態解明がブルターニュ地方ほどには進んでいない。地方言語圏以外の地域で19世紀に行なわれた民謡収集に関しては、実態がほとんど論じられてこなかった。だがここ数年、19世紀の民謡集の再刊が続いている<sup>22</sup>。19世紀の地方学術団体の活動への注目が近年高まっている影響かと推察されるが、再刊の趣旨を説明する解説類が一切付されていないため、推測の域を出ない。

このように、19世紀フランスの民謡収集は、地域別の枠組の中に収まって研究されてきた。フランス国内の諸地方同士の民謡収集の比較・検討や、全国的な傾向の把握など、フランス全体を単位として民謡収集の歴史の特徴を論じる研究には未だ着手されていない状況である。言語面の問題を考えると、これは共同研究で取り組むべき課題であろう。だが、一つの見取図を提供してくれる可能性のあるケースとして、本稿で扱うフォルトゥール調査の事例が挙げられるのである。

---

<sup>20</sup> Armand GUÉRAUD, *En Bretagne et Poitou : chants populaires du comté nantais et du Bas-Poitou, recueillis entre 1856 et 1861 par Armand Guéraud*, Saint-Jouin-de-Milly, FAMDT, 1995, 2 vols. 同書は、Le Floc'h氏の1983年の博士号申請論文を底本とする。ゲローは歴史研究委員会の通信委員（後述）で、1857年2月22日付で、収集した民謡の報告を公教育大臣に提出している。AN, F17/3246.

<sup>21</sup> Laurence BERTHOU-BÉCAM et Didier BÉCAM, *L'enquête Fortoul (1852-1876) : chansons populaires de Haute et Basse-Bretagne*, Paris, CTHS / Rennes, Dastum, 2010, 2 vols.

<sup>22</sup> 19世紀の民謡集の再刊は、古くは Damase ARBAUD (recueillis et annotés par), *Chants populaires de la Provence*, Aix, Makaire, 1862-1864 ; rééd., Nyons, Chantemerle, 1972, 2 vols. 同書は歴史研究委員会通信委員を務めたアルボー（マノスク市長、医師）が、フォルトゥール調査で集めた民謡を公刊したものである。アルボーは自らの民謡収集の成果を出版するにあたり、フォルトゥール調査の折に自分が公教育大臣へ提出した民謡報告に目を通したいので、該当する書類を一時的に返還してほしいと、公教育大臣に願い出ている（1861年6月29日、公教育大臣への書簡、AN, F17/2837）。大臣はこの要望に応えたが、アルボーの報告した歌の内『フランス民衆詩歌集成』に収録されることが決まっている歌に関しては、歴史研究委員会秘書らが『フランス民衆詩歌集成』の編纂作業に用いている最中であるため、閲覧の許可はできないとの回答だった（1861年9月26日、公教育大臣からアルボーへの書簡の写し、AN, F17/2837）。近年再刊された民謡集の例としては、Anacharsis COMBES, *Chants populaires du pays castrais (1862)*, Kessinger Legacy Reprints, 2010 ; François FERTIAULT, *Histoire d'un chant populaire bourguignon (1900 ; 2<sup>e</sup> éd.)*, Kessinger Legacy Reprints, 2010. コンプ（歴史研究委員会通信委員）もフェルティオーも、フォルトゥール調査に協力して民謡収集を行っていた。他にも、フランス国立図書館が運営するオンライン上の図書館Gallica (<http://gallica.bnf.fr/>) で、19世紀の民謡集が続々と公開されている。

#### 4 フォルトゥール調査に関する研究

フォルトゥール調査は、さきに概略を述べた通り、フランス政府の文化遺産保存政策の一環で組織的に実施された全国民謡調査である。民謡収集と国民国家形成との関係についての先述の研究史を想起すれば、フォルトゥール調査は研究者達の興味をかきたてる可能性のあるテーマかと想像されるのだが、歴史学的考察の中でこの事例が主たる分析の対象に取り上げられたことは、これまでにほぼなかった。前述のティエスの『国民的アイデンティティの創造』でフォルトゥール調査への言及があるものの、ティエス自らがフォルトゥール調査関係の史料を渉猟した訳ではなく、民族音楽学者達の研究成果のみに依拠して論じた記述となっている。また、民族学の歴史についての入門書的な性格のヴァリエールの著書でも、フォルトゥール調査関連の記述は全て、先行研究から引用された情報に基づいている<sup>23</sup>。フォルトゥール調査に関する一次文献に直接当たった上で歴史学的な考察を行なっている研究は、管見の限りでは2点存在するのみである<sup>24</sup>。フォルトゥール調査の基礎的な研究は音楽学・民族音楽学の分野で始まり、現在でもこの分野の研究者達が中心的な役割を担っている。

フォルトゥール調査が実施された1850年代は、学問的水準を満たさない民謡収集しか行われなかった時代だと、長らく見なされてきた。ヴァン＝ジュネップは、フォルトゥール調査で歌を記録した者の多くが民謡収集に関しては《素人》であり、中には民謡風に創作した歌も混入しているなど、全体的に真正さを欠く調査成果となっている傾向にあるため、過去の口承の実態を知る上での資料として参照するにあたっては慎重であるべきだとし、これを推奨していない<sup>25</sup>。こうした論調を脱却した研究が現れるのは、おおむね

---

<sup>23</sup> Michel VALIÈRE, *Ethnographie de la France : Histoire et enjeux contemporains des approches du patrimoine ethnologique*, Paris, Armand Colin, 2002.

<sup>24</sup> 1点目は註12で挙げたFABRE, « Proverbes, ... »で、中世以降のフランスにおける民衆の口承の収集の歴史を論じている。ファールブルは、フォルトゥール調査の成果をまとめたフランス国立図書館収蔵の手稿本（註9参照）を参照している。2点目は、Bärbel PLÖTNER-LE LAY, « Redécouverte et valorisation », in Hélène MILLOT, Nathalie VINVENT-MUNNIA, Marie-Claude SCHAPIRA, et Michèle FONTANA (dir.), *La poésie populaire en France au XIX<sup>e</sup> siècle : Théories, pratiques et réception*, Tusson (Charente), Du Lérot, 2005, pp. 25-66. ファールブルと同じく、フランス国立図書館所蔵の手稿本を引用している。本稿で主に用いる、フランス国立古文書館所蔵の公教育省歴史研究委員会の書簡類を参照してフォルトゥール調査を論じた研究はこれまでに出ていない。

<sup>25</sup> Arnold VAN GENNEP, *Le folklore français*, t. 4 : Bibliographies, « Musique et chansons populaires », Robert Laffont, 1999, p. 610. 本書は*Manuel de folklore français contemporain* (Picard, 1937-1958) の改題・改訂版（全4巻）。こうした批判のルーツは、民謡の記述の真正さをめぐって1870年代に展開された論争にある。梁川英俊「ラヴィルマルケとリュウゼル—いわゆる『バルザブ・ブレイズ論争』について（一）～（八）」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』57-70号、2003-2009年。



1980年頃になったのことである<sup>26</sup>。民族音楽学の歴史を論じたシェロノーの研究をはじめとして、民族音楽学者らは、フォルトゥール調査が旋律の収集をフランスで初めて積極的に奨励した事例であることから、これをフランス民族音楽学の曙と位置づけた<sup>27</sup>。

だがこうした研究はまだ、一面に光を当てたに過ぎない。筆者がフォルトゥール調査の関係史料を渉猟したところ、フランス民族音楽学の原点という切り口だけでは、この調査で交わされた議論の全体像を理解することはできず、むしろそのインパクトを矮小化してしまうと考えるに至った。というのも、フォルトゥール調査で最大の争点となったのは、旋律に関係する事柄ではなく、民謡とはいかなる歌の謂いなのか、それを集めることの意義とは何か、といった根本的な問いだったからである（本稿第1章参照）。フランス政府の文化遺産保存政策の文脈におけるフォルトゥール調査の位置付けについては、音楽学者達の問題関心から逸脱するらしく、フォルトゥール調査で民謡収集の指揮を執った組織がそもそもいかなる経緯で創設されたのか、それはいかなる性質の組織だったのかといった点が問われてこなかった。また、フォルトゥール調査で民謡を集めたのはどのような人々だったのか、民謡に関して具体的にはどのような記述が集まったのか、いかなる言説が見られたのかといった調査の詳細な事項も、先行研究では曖昧なままにされてきた。本稿はこうした点を詳らかにするとともに、フォルトゥール調査を分析することを通じて、民謡

---

<sup>26</sup> 例外として、フォルトゥール調査で収集されたノルマンディー地方の民謡の記録を検討したデュビュックの1952年発表の論文がある。同論文でデュビュックは、ヴァン＝ジュネップがフォルトゥール調査の成果を民謡研究の典拠とすることに批判的な意見を述べたことに触れた上で、「われわれの地域に関しては、私の感情は〔ヴァン＝ジュネップと〕異なっている」と語り、少なくともノルマンディー地方に関する限りは、フォルトゥール調査で収集された民謡の記録は正確で、信頼に値するとの見解を明らかにしている。André DUBUC, « L'enquête de 1853 sur la chanson populaire en Normandie », *Annales de Normandie*, n°2, 1952, pp. 151-157.

<sup>27</sup> Claudie MARCEL-DUBOIS and Denis LABORDE, « France, § II. Traditional Music », in Stanley SADIE (ed.), *The New Grove Dictionary of Music and Musicians Second Edition*, vol. 9, London, Macmillan, 2001, pp. 159-165. シェロノーは、歴史研究委員会の月例会の議事録を主たる史料として、委員会メンバー達が交わした旋律に関する議論の内容を論じている。Jacques CHEYRONNAUD, *Mémoires en recueils : Jalons pour une histoire des collectes musicales en terrain français*, Montpellier, Office Départemental d'Action Culturelle, 1986. シェロノーはまた、その議事録の一部を復刻して刊行している。CHEYRONNAUD (édité et introduit par), *Instructions pour un Recueil général des poésies populaires de la France (1852-1857)*, Paris, CTHS, 1997. 他方、カナダの音楽学者ラフォルトは、フォルトゥール調査の影響がカナダのケベック州へ波及していく過程を明らかにした。Conrad LAFORTE, *La chanson de tradition orale : Une découverte des écrivains du XIX<sup>e</sup> siècle (en France et au Québec)*, Montréal, Triptyque, 1995. 彼らに先駆けて、アメリカの音楽学者ジェーン・ファルシャーが、1830年代から1850年代にかけてのフランスで見られた、民謡に関する諸々の言説を整理した論文の中で、フォルトゥール調査に言及している。Jane FULCHER, « The Popular Chanson of the Second Empire : 'Music of the Peasants' in France », *Acta Musicologica*, n°52, 1980, pp. 27-37. 我が国では唯一、井上さつき『パリ万博音楽案内』（音楽之友社、1998年）が、ファルシャー論文に主に依拠しながらフォルトゥール調査を紹介している。

収集に協力した人々の地域意識の形成において民謡収集という行為が果たした役割について考察していきたい。その際に考慮すべきは、19世紀フランスにおける地域と国家との関係である。そこで次に、文化政策の局面を中心に、地方と政府との関係についての研究史を整理する。

## 5 19世紀フランスにおける地域と国家の関係についての研究—文化政策を中心に

### 5-1. 地域と国家—対立的構図からの脱却へ

第三共和政下の初等・中等教育では、郷土という「小さな祖国」への愛着を媒介に、「大きな祖国」フランスへの愛着を養い、同時に共和思想の涵養を図る方針がとられた<sup>28</sup>。一方、フランス革命から第二帝政にかけての時期には、第三共和政下の教育で見られるような明確な国策がない。第三共和政以前の19世紀フランスにおける地域と国家との関係のあり方を捉えるために、これまでにさまざまな角度からの考察が試行されてきた。

1970年代、地域主義的主張の高まりに伴って地方言語の復興運動が起こる中<sup>29</sup>、従来、単一にして不可分なるフランス像を前提に歴史が語られてきたことに対する批判が起こり始める。1975年にセルトーらがフランス革命下の言語調査を扱った研究を発表したのと前後して<sup>30</sup>、1974年には、フランス語の浸透と地方言語の衰退との連関を指摘する、アルマングーのシンポジウム報告が行われた。これを受けて1979年にヴィジエが著した論文は、19世紀フランスにおける地方言語の「抵抗」に着眼する必要性を鋭く突いている<sup>31</sup>。1970年代後半にはこのように、地方言語とフランス語との関係を通して、地域と国家との関係

---

<sup>28</sup> Jean-François CHANET, *L'École républicaine et les petites patries*, Paris, Aubier, 1996 ; THIESSE, *Ils apprenaient la France : L'exaltation des régions dans le discours patriotique*, Paris, MSH, 1997 ; 工藤光一「国民国家と『伝統』の創出—1870-1914年、フランスの事例から」樺山紘一ほか編『岩波講座世界歴史第18巻工業化と国民形成』岩波書店、1998年所収、187-216頁。

<sup>29</sup> アンリ・ジオルダン編『虐げられた言語の復権—フランスにおける少数言語の教育運動』原聖訳、批評社、1987年。

<sup>30</sup> Michel de CERTEAU, Dominique JULIA et Jacques REVEL, *Une politique de la langue : La Révolution et les patois*, Paris, Gallimard, 1975.

<sup>31</sup> Philippe VIGIER, « Diffusion d'une langue nationale et résistance des patois, en France, au XIX<sup>e</sup> siècle : Quelques réflexions sur l'état présent de la recherche historique à ce propos », *Romantisme*, n°25-26, 1979, pp. 191-208.



について考察する研究が発表され始めた。地方言語を中心的に取り上げて地域意識や国民意識のあり方を論じようとする問題関心は、現代の研究者にも受け継がれている<sup>32</sup>。

一方、1980年代には、19世紀における地域イメージの形成をテーマとした、新たな着眼点を持つ研究が現れる。こうしたテーマを開拓したのは、1980年にブルデュー主宰の雑誌『アクト』紙上でベルトが発表した、ブルターニュに関する典型的表象の構築過程を述べた論文である<sup>33</sup>。また1980年代には、ケルト・アカデミーという民間の団体が行なった全国の民衆の習俗等についての調査や、内務省で第一帝政期に実施された各地の地勢、産業、住民の習俗等を包括的に把握するための全国「統計」調査を扱った研究が、相次いで発表された<sup>34</sup>。

1990年頃には、新たなテーマとして地方学術団体が加わる。従前、地方学術団体の歴史は、各団体が自らの来歴を振り返る目的で記していた。全国の地方学術団体の傾向や、全国的推移に目を向けた包括的視点を持つ研究が出始めたのは、1990年前後のことである。ガニエが『記憶の場』に寄せた論文（1992年）は、「地域的なもの」概念の構築について論じる際、博物館、民俗学と並んで地方学術団体を題材に選び、大きく取り上げた<sup>35</sup>。同じく『記憶の場』に収録されたフランソワーズ・ベルセの論文（1986年）は、ノルマンディーの貴族でフランス初の地方学術団体の創建に携わったコーモンという人物を主に扱いながら、地域間のネットワークの構築を志向する地方学術団体勢力と、全国の地方学術

---

<sup>32</sup> 最近の研究の例として、Jean-Paul PELLEGRINETTI, « Langue et identité : l'exemple du corse durant la troisième république », *Cahiers de la Méditerranée* [en ligne], vol. 66, 2003, mis en ligne le 21 juillet 2005, URL : <http://cdlm.revues.org/index116.html> (DOI : en cours de distribution).

<sup>33</sup> Catherine BERTHO, « L'invention de la Bretagne. Genèse sociale d'un stéréotype », *Actes de la recherche en sciences sociales*, n°35, 1980, pp. 45-62.

<sup>34</sup> ケルト・アカデミーについては、Nicole BELMONT, *Paroles païennes : Mythe et folklore*, Paris, Imago, 1986 ; Mona OZOUF, « L'invention de l'ethnographie française : Le questionnaire de l'Académie celtique », *Annales ESC*, n°2, 1981, pp. 210-230 (Id., *L'école de la France : Essais sur la Révolution, l'utopie et l'enseignement*, Paris, Gallimard, 1984, pp. 349-379 に再録)。内務省の「統計」については、Marie-Noëlle BOURGUET, *Déchiffrer la France : La statistique départementale à l'époque napoléonienne*, Paris, Éd. des archives contemporaines, 1988 ; 1989. 日本語で読める文献の中で、内務省の国勢調査に言及しているのは以下の2点。いずれもブルゲの研究に主に依拠している。阪上孝『近代の統治の誕生—人口・世論・家族』岩波書店、1999年、44-49頁。福井憲彦『ヨーロッパ近代の社会史—工業化と国民形成』岩波書店、2005年、119-121頁。

<sup>35</sup> Thierry GASNIER, « Le local : une et divisible », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. III : Les France*, vol. 2, pp. 463-525. ガニエは、全国の地方学術団体の動向を包括的に論じる研究がまだ存在しないことを問題視し、こうしたテーマに着手する必要性を説いている。ガニエは同論文で、公教育省の統計などの一次史料を基に、全国の地方学術団体の分布状況を分析した。後述（註37）のシャリーンの研究はガニエが試みたのと同様の分析をさらに多角的に積み上げており、まさにガニエが待望したような視野を備えた成果となっている。

団体の頂点に立つて中央集権的に諸団体の掌握を試みる公教育省との関係を対立的な構図で描いた<sup>36</sup>。具体的には、公教育省歴史研究委員会と地方学術団体との関係を論じている。歴史研究委員会は第三共和政期以降、全国の地方学術団体の中核としての役割を担ったことから、地域と国家との関係が、地方学術団体と歴史研究委員会との関係に代表させて論じられているのである。ベルセは、地方学術団体と歴史研究委員会との関係を次のように語る。コーモンは、地方学術団体相互の交流網を構築すべく、1839年に地方学士院という団体を創設した。だが政府はこの団体にわずかな助成金しか与えずコーモンの動きを妨害し、全国の団体を司るための主導権を篡奪した、と。1995年にシャリーンが出版した著書では<sup>37</sup>、地方学術団体会員の職業・出身地・年齢等の分布や、年代別・地域別に見た諸団体の推移、そして諸団体の研究内容の傾向等を分析しており、19世紀から20世紀初頭にかけての地方学術団体の全体像を包括的に捉えた初めての研究である。シャリーンは、政府と地方学術団体との関係史を論じている第8章で、ベルセの提示した構図を踏襲して、地方学術団体同士のネットワークと中央集権的な政府とを対立的関係にあるものとして論じた。

シャリーンやベルセの研究で示されている歴史研究委員会像の基調となっているのは、第三共和政下に著された書物である。それは、歴史研究委員会委員のグザヴィエ・シャルムが歴史研究委員会の創設50周年を機にまとめた『歴史・科学委員会（歴史と史料）』（1886年）という書物で、歴史研究委員会の歴史を初めて語った研究書である<sup>38</sup>。歴史研究委員会の歩みを時系列的に論述した225頁に及ぶ序文と、1759年から1884年の間に出された委員会関係の省令等の、主要な刊行史料を収録した本文との二部構成で、古典的作品として今日でもきわめて重要な文献である。シャリーンは、シャルムの序文で論じられている歴史研究委員会史のみにほぼ依拠している。ベルセの方はギゾーやコーモンらの回想録を参照しているが、主たる典拠としているのはやはりシャルムの記述である。シャルムは、第三共和政下の委員会が地方学術団体と協力的関係にあるとして第三共和政期の文化政策を賛美する一方、第二帝政下の委員会は全国の地方学術団体の活動を監視する為の機関として存在し、不毛な研究成果しか生まなかったとしている。こうした歴史像を生んだ

<sup>36</sup> Françoise BERCÉ, « Archisse de Caumont et les sociétés savantes », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. II : La Nation*, vol. 2, pp. 532-567.

<sup>37</sup> Jean-Pierre CHALINE, *Sociabilité et érudition : Les sociétés savantes en France*, Paris, CTHS, 1995 ; 1998.

<sup>38</sup> Xavier CHARMES, *Le Comité des travaux historiques et scientifiques (histoire et documents)*, Paris, Imprimerie nationale, 1886, 3 tomes.

時代背景を考慮することは、史料批判の手続きとして不可欠と思われるが、ベルセやシャリーンの研究ではそうした検討の作業が行なわれることなく、シャルムの歴史像をほぼ踏襲して論述している。

こうした見解は、2000年代以降、批判を受けるようになる。2000年頃からは、1980年代以来の先行研究で扱われてきた諸事例を、新たな問題意識で読み直すことに力点を置いた研究が増加する。例えば、ベルギー出身でアメリカを拠点に活動しているジェルソンの一連の研究では、第三共和政以前の「市民社会」のあり方に問題関心を据え、ローカルなレベルで「市民社会」を体現する地方学術団体と政府との関係を再考した<sup>39</sup>。その中で彼は、七月王政から第二帝政にかけての時期には、政府が地方に対して必ずしも中央集権的に強権を揮えたとは限らないと指摘し、ベルセやシャリーンの19世紀フランス政府を「ジャコバンの」・中央集権的に全国を支配する存在と捉えたのとは一線を画す見解を示した。同様の見解は、歴史的建造物保存行政の整備過程を法制史的に跡づけた、タンシュの2008年の論文にも見られる<sup>40</sup>。彼らの仕事は、19世紀のフランスでは政府の中央集権的支配が貫徹していたとする通説を自明視せずに、第三共和政以前の文化政策のあり方を捉え直そうとする問題意識が共通している。

フランス革命後から第二帝政期までの時代における、地域と国家との関係に関する研究史をここで一旦まとめておく。1970年代に地方言語の「抵抗」が指摘された後、1980年代に研究者達は地域についての表象の構築過程へと関心を向け始め、多様な事例の掘り起こしを進めた。第三共和政以前のフランス社会における地域と国家との関係を明らかにするために、フィールドを開拓する試みが次々に繰り返されてきたのである。近年ではこうした先行研究の成果を継承しつつ、地方学術団体に注目が集まっている。1990年代以降、地方学術団体と政府（公教育省歴史研究委員会）との関係が、常に論点となってきた。2000年代に発表されている研究は、文化政策における政府の役割が中央集権的・強権的なイメージで語られてきたことに対して、批判的検討を行なうようになってきている。

---

<sup>39</sup> Stéphane GERSON, *The Pride of Place : Local Memories and Political Culture in Nineteenth-Century France*, Ithaca and London, Cornell University Press, 2003 ; Id., « L'État français et le culte malaisé des souvenirs locaux, 1830-1870 », *Revue d'histoire du XIX<sup>e</sup> siècle*, n°29, 2004, pp. 13-29.

<sup>40</sup> TANCHOUX, « Heurs et malheurs... ».

## 5-2. 地方在住の研究者による地域的固有性の《発見》とフランスへの帰属意識

2000年代以降の地方学術団体をテーマとする諸研究の動向は、第三共和政以前のフランス社会における地域と国家との関係を追究することと並んで、地方在住の研究者らの地域意識のあり方や国民意識のあり方に迫るための手がかりとして、地方学術団体に注目している点でも特徴的である。こうした研究は、地方学術団体等で行なわれた研究や諸々の活動の内容の分析に主眼を置いている。1990年代までの地方学術団体研究が、諸団体の全国規模の分布の推移や参加者の職種等の傾向に着目して、全国の諸団体の活動形態（言わばハード面）の解明に傾注していたのに比べると、2000年代以降の研究は、地方学術団体で実施された活動や研究の内容という、言わばソフト面の解明や分析に関心が移ってきている。こうした近年の研究動向の成果を、もう少し詳しく整理しておこう。

まず、ノルマンディー地方の地方学術団体を舞台に、ノルマンディーに関する表象の構築過程について考察したギエの研究から見ていく<sup>41</sup>。ギエは、フランス国内で最も早期に地方学術団体の隆盛を迎えた点がノルマンディーの最大の特徴だと指摘する。だからこそ、地方学術団体で行なわれた郷土研究が、ノルマンディーに固有な諸々の要素を発見する契機として大きな役割を果たしたのだと強調している。そしてギエは、地方学術団体の活動を主に担った貴族、大土地所有者、自由業者といった「教養ある名望家 *notables*」が、歴史的建造物の保存や農業新興のための研究などを行うことによって、「地域アイデンティティ」を構築していったと論じている。そして、ノルマンディーの「教養ある名望家」達は、フランス国民としてのアイデンティティと衝突するような性質の地域意識を持たない一方で、中央集権化を拒絶する傾向があると指摘している。また、ギエは全国各地の団体同士の連係に着目した。各地の「名望家」達は、地方学術団体の活動を通して、フランスという国家に各地域が包摂されているという意識を育んでいったとギエは述べる。また、旅行記や観光ガイドブック等の媒体を介して、地方学術団体の研究成果が広く流布していた実態を、ギエは明らかにしている。地方学術団体で生産された知が、他地域の同僚達に受容されるにとどまらず、より広い社会に影響を及ぼした可能性を示唆しており、重要な指摘である。

<sup>41</sup> François GUILLET, « Naissance de la Normandie (1750-1850) », *Terrain* [en ligne], n° 33, 1999, mis en ligne le 09 mars 2007, URL : <http://terrain.revues.org/index2712.html> (DOI : en cours de distribution) ; Id., « Entre stratégie sociale et quête érudite : les notables normands et la fabrication de la Normandie au XIX<sup>e</sup> siècle », *Le Mouvement Social* [en ligne], n° 203, 2003/2, pp. 89-111, DOI : 10.3917/lms.203.0089.



他方、先述のジェルソンの著作（2003年）は<sup>42</sup>、全国を視野に（北仏中心に）地方学術団体の諸活動および関連する諸言説を分析し、そうした活動が地域的記憶 local memories の「発掘」の営みとして機能したと読み解いている。こうした活動を通じて、地方学術団体に参加する「地方エリート」達が、市民としての責任感を持つようになっていったとジェルソンは論じる。例えば、1830年代から1840年代にかけて、市庁舎の装飾等に郷土出身の偉人伝が見られる事例（第3章、第5章）や、歴史祭もしくは歴史ページェントを地元市当局と地方学術団体とが共催し、言わば民衆教化の機会とした事例が分析されている。19世紀前半以来、各地の地方学術団体で行なわれた「地域的記憶の崇拜」が、第三共和政下に地域「小さな祖国」とフランスという「大きな祖国」とを結びつけるロジックを成立させる土台となったと、ジェルソンは論じる。第三共和政下の「小さな／大きな祖国」の背景には、普仏戦争の敗戦およびドイツの「ハイマート」の影響があったという通説的な説明を否定している訳ではないが、ジェルソンは、1830年代以降の地方学術団体の活動との連続性の方を重視している。

最後に、2011年に出版されたパルシス＝バリュベの著作は、1980年代の先行研究で扱われてきた内務省の「統計」など、19世紀初頭の諸事例を振り返った上で、フランス各地の地方学術団体で行なわれた郷土研究の中でも考古学的・歴史学的な分野の事例に焦点を絞り、地域意識の形成との連関について考察している<sup>43</sup>。ギエやジェルソンと共通する観点を持ちながらも、地方在住の研究者達が地元地域への帰属意識を強める過程において、遺跡発掘や歴史的建造物の調査等の考古学的な調査・研究が果たした役割に主たる焦点を当てて詳述している点に、パルシス＝バリュベの研究の特徴がある。その中でも第10章では史料収集を扱い、史料収集が19世紀的「考古学」の一分野として、政府と地方学術団体との相互関係の中で進展していった過程を明らかにしている。歴史研究委員会の未刊行史料集成事業の例のように、政府が地方学術団体のメンバー達に対して、様々な調査をたびたび要請し、これに回答する形で地域史の記述が蓄積されていったため、「県」単位からコミューン単位にまで地域史が細分化したという結果を生んだと、パルシス＝バリュベは述べている。こうした地域史の特徴と並んで、1830年代の時点で地方在住の研究者達は、コミューン、《くに pays》、県、地方、フランス、いずれをも「祖国」として、並列関係にあるものとして表象していたとパルシス＝バリュベは指摘する。この指摘は重要である。

<sup>42</sup> GERSON, *The Pride of Place*....

<sup>43</sup> Odile PARSIS-BARUBÉ, *La province antiquaire : L'invention de l'histoire locale en France (1800-1870)*, Paris, CTHS, 2011.

というのも、上記「祖国」の規模の大小が必ずしも帰属の上位・下位に対応していなかったという点で、第三共和政的なロジックとの相違点の一端がここに示されている可能性があるからである。こうした考察を経て、パルシス＝バリュベは、1980年代から1990年代にかけての地方学術団体研究の基調を成していた、地域と国家とを対立的に捉える構図を、修正するような見解を示している。すなわち、「地域的なもの le local」は、国家による中央集権的支配への対抗として地域側が構築した言説だったのではなく、むしろ地域内部から自立的に形成された言説だと論じているのである。

なお比較のために、前出の第三共和政期の教育史の先行研究で、「小さな祖国」に関して子どもたちに何が教えられたと指摘されているかを簡単に振り返っておく。シャネの1996年発表の研究は、言語教育にとりわけ注目している。1880年代以降（特に1910年代以降）、フランス語が国内どこでも使用される状況となるよう、言わば言語的《統一》への機運が高まる。シャネの主たる関心は言語等の教育法の推移を明らかにすることであり、地域的固有性に関する言説の内容にはほとんど言及していない。これに対し、1997年に刊行されたティエスの著書は、第三共和政期の教科書を主な史料として、「小さな祖国」教育の内容に踏み込んだ分析を行なっている。まずティエスは、「小さな祖国」の枠組として、フランス革命下に制定された「県」という単位が、第三共和政期になってようやく《くに pays》の枠組として定着したと論証し、「県」のいかなる特徴を称揚して子どもたちに教育したのか、実例を挙げている。例えば、県内に生息する動植物、地形、自然（特に川）の美しさ、景勝地、土壌、農作業、農作物である。教科書では、18世紀の気候決定論に似た論法がとられ、気候が住民達の気質や性格の形成に影響するため、郷土出身の偉人はワインと同じような地元地域の誇りだと記されていた。ティエスはこうした例を積み重ね、第三共和政の教育では、地理・歴史を主たる媒介として、子どもたちにとって身近な地域である「小さな祖国」に固有な特徴について教えていたことを明らかにした。

以上のように、地方学術団体に所属して研究活動を行なう地方在住の研究者 (érudits / savants / élites locaux) が、地域的固有性に関する言説の構築に果たした役割の大きさに、特に注目が集まっている。地方在住の研究者が行なった郷土研究等の活動を分析することで、彼らの地域意識のあり方や国民意識のあり方に迫ろうというのが、現在の最新の研究動向である。地方学術団体における地域的固有性に関する言説の構築過程を、ギエはノルマンディー地方を対象に論じ、ジェルソンやパルシス＝バリュベは特定の地域に限定せずに、公教育省歴史研究委員会と地方学術団体との関係にも着目するなど全国的視野を持ち



つつ論じた。第三共和政前後を比較して、ジェルソンは1830年代から1870年代の地方学術団体での郷土研究が、第三共和政下の「小さな／大きな祖国」を準備したとして共通点を強調したのに対し、パルシス＝バリュベは「祖国」概念のあり方が、19世紀前半と第三共和政下とで相違する点に留意しており、第三共和政前後の連続面・断絶面がそれぞれに指摘される状況となっている。

## 6 研究史批判と問題の所在

本稿の問題の所在を明らかにするために、以上の内容を改めて振り返っておこう。フランスの民謡収集に関する研究史、および、19世紀フランスにおける地域と国家との関係に関する研究史と研究動向とを順に検討してきた。まず、ナショナリズム研究など比較史的観点の研究成果への批判としては、フランス国内の文化的多様性を考慮しながら、民謡収集の実態を具体的に押さえる必要性をすでに指摘した。民謡収集の実態解明は、ブルターニュ地方では精力的に進められてきたが、それ以外の地域ではすべき事がまだ多く残されている。他方、地方学術団体の活動を手がかりに、第三共和政以前の時代を対象として、地方在住の研究者の活動を取り上げる研究が盛んになってきたところである。文化政策における政府の役割が中央集権的・強権的なイメージで語られてきたことに対し、批判的検討が近年なされている。本稿もこうした問題意識を共有して、地方在住の研究者に着目する。地方在住の研究者達が地方学術団体で行なっていた活動を分析した近年の先行研究で明らかにされた点は、次の二点に整理できる。第一は、地域的固有性に関する言説の形成過程の構造である。地方学術団体で郷土研究を行なう、地元在住の研究者達が「発掘」した地域的固有性なるものが<sup>44</sup>、地方学術団体と地方当局との共催で実施されたコモレイシヨンの活動や教科書といった媒体を介して、民衆にも普及していったという構造が指摘されてきた。第二には地方在住の研究者達の言うところの、地域的固有性を構成する内容である。地方在住の研究者達は、歴史的建造物等をめぐる歴史学的・考古学的アプローチでの郷土研究の成果を根拠として地域的固有性の言説を構築していた。

このように、地方在住の研究者らが地域意識を形成していく上で、歴史学や考古学、さらに史料収集（未刊行史料集成）が果たした役割が強調されてきた。だがそのような中、民衆の口承の収集が果たした役割に関しては、ほとんど問われてこなかった。試みに、上

---

<sup>44</sup> ジェルソンは、主に地域史に関する知を指して「地域的記憶」と呼んでいるが、本稿では歴史的な事項に限定せず、言語的固有性—地方言語、土地の固有のことば（方言）—も含めて考えている。

掲の先行研究の中から、民謡等の収集に関する記述を拾ってみよう。まずギエの研究では、ノルマンディーにおける民衆の口承の収集や研究の原点として、第一帝政下に内務省で実施した「統計 statistique」を挙げている。この国勢調査の項目の中には言語（地方言語、方言）の調査が含まれ、聖書の「放蕩息子」の逸話を土地のことばで収集することが命じられた。ギエはまた、1825年に出版されたプリュケの昔話・諺の集成に言及し、地名や舞踏や歌の研究が1850年代前後にノルマンディーで隆盛し始めたということに触れているが、詳細な内容には立ち入っていない。ギエと同じく2000年代に地方学術団体の活動内容に関する研究を発表しているジェルソンやパルシス＝バリュベは、歴史学や考古学に主たる興味を向けており、19世紀の地方学術団体で行なわれた口承研究の類には言及していない。第三共和政の教育に関する先行研究に目を転じると、シャネが、1890年代以降に初等教育で唱歌教育が導入された際に、民謡が一部で使用されたことに言及している程度である。このように民謡収集については、取り上げられるにしてもわずかに言及される程度で、中心的に論じられることはこれまでになかった。

地方在住の研究者達が地元の民衆の口承にいかにして関心を寄せ、自分達の研究の中でいかように扱っていたかということが、先行研究では問われておらず、必ずしも詳らかになっていない。だが19世紀のフランスで、民謡の収集や方言の研究が行なわれなかった訳では全くない。民謡収集というテーマは、先行研究で取り上げてきた歴史学や考古学の分野での郷土研究の場合と比べ、《民衆》の位置付けが直接的に問題となる。19世紀フランスの地方在住の研究者達の研究・活動内容と、地域意識や国民意識の形成過程との関係のあり方について考察する上で、民謡収集は、《民衆》がそこにいかに位置づけられていたかという新たな側面に光を当てる可能性を秘めたテーマである。こうした本稿の問題関心にとって、政府主導の民謡収集というフォルトゥール調査の特徴が、重要な意味を持つてくる。ゆくゆくはフランス民謡の集成に収められるものと想定しつつ、地元の民謡を集めて公教育大臣に報告するという経験は、民謡収集への協力者達に、地元地域と国家との関係を考えさせる契機となったのではないか。また、地方在住の研究者ら民謡収集に協力した者達と全国の民謡収集を指揮する政府側との間での、民謡収集に関する意識の相違点を明らかにする上でも、フォルトゥール調査のような政府主導型の事例は示唆に富むであろう。

以上のような仮説に基づき、本稿では次のような問いを立てる。政府が文化遺産保存政策の一環で民謡収集を実施した狙いとは何か。その政府主導の民謡収集に協力した地方在住

の研究者等の地域意識の形成過程において、民謡収集はいかなる役割を果たしたか。民謡収集を通じて、彼らの地域意識と国民意識との関係はいかように見えてくるか、あるいは見えてこないのか。つまり、政府にとって、また、地方在住の研究者等にとって、民謡収集という行為がどのような意味を持ったかを論じていく。公教育大臣、公教育省歴史研究委員会、全国民謡収集に協力した地方在住の研究者や学校関係者といった、フォルトゥール調査に携わった三者それぞれの視点から、これらの問いについて考察していく。

## 7 本稿の構成と史料

本稿の構成は次の通りである。

第1章は、未刊行史料集成の一環として民謡収集を実施した、政府側の意図について考察する。第1節・第2節で、歴史研究委員会が民謡収集の方針を具体化していった過程を追う。歴史研究委員会の議事録と、同委員会が全国の調査協力者向けに作成した民謡収集マニュアルを史料とする。歴史研究委員会の内部で交わされた議論を追いながら、19世紀中葉の当時、「民謡」という語の指し示す内容が必ずしも明白だった訳ではなく、むしろ「民謡」概念は大きな揺らぎを伴うものであったということを確認する。そして、歴史研究委員会が行なった「民謡」の定義を具体的に把握する。最後に第3節では、その「民謡」の特徴を論じた上で、国策として全国民謡収集を行なう狙いについて、フォルトゥール大臣の残した記述を参照しながら考察する。

第2章では、未刊行史料集成事業のために整備された史料収集体制に的を絞り、国土全体を網羅する調査網の構築過程を明らかにする。七月王政期以来、フランス政府は文化遺産保存体制を継続的に構築していった。そうした体制は、主に内務省が管轄する歴史的建造物保存行政と、公教育省の管轄する史料収集体制との二本柱で支えられていたのだが、この両者には大きな相違点があった。すなわち、歴史的建造物保存体制は、地方学術団体の影響力を排して政府の直轄で進める方向へ制度が変化したのに対し、未刊行史料集成体制の方は、県知事や大学区長や地方学術団体との連携を強化する方向で進行したという相違である。こうした相違点を示しながら、フォルトゥール調査の民謡調査網の特徴を指摘すると共に、第三共和政以前の文化政策における、政府の役割について考察する。研究史批判の箇所でも述べた通り、本稿もジェルソンやタンシュの問題意識を共有して、フランス政府が地域に対して「ジャコバン的」に強権を揮うことができたとする歴史像への批判

を念頭に論じていく。主に、歴史研究委員会のパリの本部と、地方に居住する委員会メンバー（地方学術団体会員から選出される）との関係を論じていく。第1節では歴史研究委員会発足時の綱領、および委員会の組織的特徴を把握する。第2節では、未刊行史料集成事業における全国規模の史料収集の運営方法と、地方に居住する委員達の活動実態を検討する。最後の第3節では、委員会組織の諸改革とその背景について考察する。ベルセやシャリーンの研究では、歴史研究委員会は全国の地方学術団体を管理するための政府機関として描写されたが、本稿ではこうした認識を修正したい。歴史研究委員会の制度的変遷を追うと、委員会と全国の地方学術団体との関係は決して終始一定していた訳ではなく、19世紀中葉に変化が生じ始めることが分かる。1850年代頃までは、中央（公教育大臣や歴史研究委員会の正委員達）が地方の委員達に対して指示は出しても、強権を発動することはなかった。また地方の委員達も、必ずしも中央からの指示に諾々と従うとは限らなかった。歴史研究委員会の擁するネットワークは、委員を務める地方在住の研究者達の自主性をある程度認めながら、全国の地方学術団体に依存する形で展開していったのである。こうした点を明らかにして、文化政策における19世紀フランスの国家と社会との関係について考察したい。

以上の第1章と第2章とは、主に政府側の観点に着目して論述する。フランスの文化遺産保存政策の中で民謡収集（フォルトゥール調査）の位置する文脈を明らかにし、未刊行史料集成事業およびフォルトゥール調査の性格について考察するためである。それと共に、フォルトゥール調査に協力した全国各地の研究者らが、歴史研究委員会と取り結んでいた関係についても明らかにしていく。

第3章と第4章では、地方在住の研究者や学校関係者ら、地方で民謡収集を行なった人々の残した記述を分析する。もとより、本稿の問題意識は、フランス全国の各地域を対象とした分析を必要とする。第3章ではまず、国境地域に着目していく。カタルーニャ地方、バスク地方、アルザス地方、フランドル地方といった国境地域では、国境を隔てた地域と言語や文化を共有している。このような国境地域に住む研究者達は、いわゆる標準フランス語圏の研究者達と比べて、地域と国家との関係について鋭い問題意識を持っていたのではないかと。そうした地域の中でも、本稿は、ゲルマン語派に属するフラマン語（フラ



ンドル語／フランデレン語）圏を含む<sup>45</sup>、フランス・フランドル地方Flandre de France を取り上げる。フランス北端に位置するこの地方はベルギーと国境を接し、ベルギーのほぼ北半分の地域およびオランダと同一の言語圏に属する。フラマン語圏の民謡収集関係の史料を見ると、地域と国家との間での地元地域のアイデンティティのあり方に関する論点が、他の国境地域と比べて最も鮮明に呈示されているため、本稿の問題設定に応じた戦略として、フランス・フランドル地方を取り上げることは大きいと判断した。フランス・フランドル地方を含むノール県は、フランス国内でも地方学術団体数が多い地域の一つで、ジェルソンの2003年の著作でもノール県の事例を取り上げている。だが彼は、フラマン語圏が国境に跨がっているという点を考慮に入れておらず、フランス・フランドル地方の研究者達が国境の外の地域との連関をどのように捉えていたかを問うことはない。本章では、こうした点を視野に入れてフラマン語圏の民謡収集を分析することで、地方在住の研究者が描き出した地域の固有性の特徴について、新たな側面を明らかにしている。

フラマン語圏の研究者達は、きわめて熱心にフォルトゥール調査に協力したため、史料が非常に充実している。フランス・フランドル地方でフォルトゥール調査に協力した研究者の中でも、比較可能な例として、ベッケル Louis de Baecker (1814-1896) とクスマケル Edmond de Coussemaker (1805-1876) という二名に注目する<sup>46</sup>。彼らは地方学術団体を共同設立するなど近しい関係にあり、経歴も似通っている。同じ地域で活動していた彼らの所説を比較して共通点と相違点とを明らかにし、彼らがフランス・フランドル地方のアイデンティティを構築する上で参照軸とした事柄について考察していく。第3章ではこのように、フラマン語圏でのフォルトゥール調査の実施状況を、ベッケルとクスマケルとを中心に検討して、以下の問いについて考察していく。第一に、彼らはどのような意図をもって

---

<sup>45</sup> 現代では、フラマン（フランドル／フランデレン）語の発音・語彙等はいわゆる「標準オランダ語」と大差がなく、フランドル語の書きことばには「標準オランダ語」が用いられる。こうした点から河崎靖氏は、フランドル語は言語学的に見るとオランダ語と同一の言語であり、独立した言語として扱うことは「誤解」と指摘する（河崎靖『ゲルマン語学への招待—ヨーロッパ言語文化史入門』現代書館、2006年、37-38頁）。なお第3章で詳述する通り、言語学的にオランダ語とフラマン語とが同質という現代の見解は、19世紀に関しては必ずしも合致しない。またフラマン Flamandとは「フランドルの～」を意味するフランス語の形容詞である。地名でなく形容詞を言語名に冠して訳語とすることは本来不自然だが、本稿では、通称として浸透している「フラマン語」という訳語を用いる。

<sup>46</sup> Baecker, Coussemaker のカタカナ表記はフランス語式発音に従った。今日の標準オランダ語の発音では語尾のerが微かに発音されるが、フランス語の発音と微妙に異なり、あえてカタカナで記すと「ベッケア」「クスマケア」に近くなると思われる。なおフラマン語に近い言語の一つであるドイツ語式の発音では「ベッカー」「クスマケー」となる。岩本和子氏は「クスメイカー」として、英語式の表記を採用している（岩本和子『周縁の文学—ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷』松籟社、2007年）。

フォルトゥール調査に臨んだか。第二に、彼らは地元地域とフランスとの関係をいかように認識していたか、また国境をどのように意識化していたか。第三に、民謡収集という行為は、地方在住の研究者が地域的アイデンティティを構築する上でいかなる役割を果たしたか。

史料としては、フランス国立古文書館 (AN) に所蔵されているフォルトゥール調査の関係史料の他<sup>47</sup>、ベッケルやクスマケルが、公教育大臣や公教育省歴史研究委員会のパリの本部（正委員）と交わした書簡類（AN所蔵）も使用する。また、彼らがそれぞれに著した民謡集等の著作も参照する。以下、第一に19世紀中葉のフランス・フランドル地方の言語的状况を把握する。第二に、フォルトゥール調査の概要を押さえた上で、フラマン語圏を含む地域における同調査への協力者達について述べる。第三に、ベッケルとクスマケルとが共に展開していた主張を分析し、彼らの国家観、およびフランスと地元地域との関係についての彼らの認識を明らかにする。第4節・第5節では、ベッケル、クスマケルの民謡収集を、相違点に焦点を当てながら比較する。

第4章は、第3章の問いを共有しながら、フランス語圏の地方在住の研究者や学校関係者の行なった民謡収集を取り上げる。フランス語圏の地方在住の研究者にとって、民謡収集と地域意識の形成とはいかなる関係にあったか。第3章と比較しながら論じていく。史料としては、フランス国立古文書館およびフランス国立図書館手稿部で所蔵する、フランス語圏のフォルトゥール調査関係の記録（民謡報告、書簡、等）や、フランス語圏でフォルトゥール調査前後に出版された民謡集を用いる。以下の点に留意しながら読解していく。第一に、フランス語圏の民謡収集の具体像を明らかにする。誰が、いかなる民謡を集め、いかに民謡報告を記したかといった、フォルトゥール調査での協力状況を押さえる所から始める。第二に、フォルトゥール調査およびその前後の時代のフランス語圏で、民謡等の民衆の口承について地方在住の研究者らが語っている事柄を押さえていく。いかなる要素を地域的固有性として語っているか、あるいはその他の語りもあるのかに留意する。

---

<sup>47</sup> AN, F17/3245, F17/3246.



最後に、史料について述べておく。すでに触れてきた通り本稿で主に用いるのは、フランス国立古文書館所蔵の公教育省歴史研究委員会関係の史料群である<sup>48</sup>。未刊行史料集成の諸事業関連の史料の中から主としてフォルトゥール調査に関する史料群（書簡、民謡報告などを含む）を選んで分析するとともに、歴史研究委員会の委員達の個人別に整理された書類（民謡報告以外の書簡など）を参照した。1876年に国立図書館手稿部に収められたフォルトゥール調査の成果である民謡集『フランス民衆詩歌集成』は<sup>49</sup>、複数の先行研究で参照されている。だが、フォルトゥール調査で収集された民謡そのものを分析することは、本稿の関心からは逸れる。本稿ではむしろ、民謡というテキストを分析する上での前提として不可欠な作業を行なう。つまり、19世紀末より長年にわたって「非学問的」で正確さに欠けるとして、19世紀中葉の民謡収集は一蹴されてきたが（8頁を参照）、そのように民謡の記録の正確性を重んじる見方を離れて、19世紀中葉の民謡収集に特有のロジックに本稿は注目してこれを明らかにし、さらにそうしたロジックがいかなる時代の要請から生まれたものであったのかを論じていく。従って本稿の問題関心にとっては、民謡集の形に整えられた国立図書館所蔵の民謡集よりも、歴史研究委員会のパリの本部と地方委員・通信委員、あるいは大学区長・初等視学官・小学校教師とのやりとりの様子を伝えてくれる国立古文書館所蔵の書簡類の方が有益であったため、こちらを主たる史料としたのである。

19世紀のフランスで行なわれた民謡収集の詳細を把握するにあたっては、先行研究でこれまでに扱われてこなかったような民謡収集の試みについても、把握する必要がある。そのために非常に有益な手段は、民謡研究で用いられている参考文献リストを参照すること

---

<sup>48</sup> 使用した史料目録は、Marie-Elisabeth ANTOINE et Suzanne OLIVIER, *Inventaire des papiers de la division des sciences et lettres du Ministère de l'instruction publique et des services qui en sont issus (sous-série F17)*, Paris, Archives Nationales, 2 tomes, 1975-1981. この目録は、歴史研究委員会関係の史料が国立文書館に移管されたのを機に作成された。他に、国立古文書館の史料分類概況を調べるためにまず参照すべき、*État général des fonds des Archives nationales (Paris). Mise à jour 2009*. « F/17 Instruction publique », [http://www.archivesnationales.culture.gouv.fr/chan/chan/fonds/F17\\_2009.pdf](http://www.archivesnationales.culture.gouv.fr/chan/chan/fonds/F17_2009.pdf). ならびに、公教育省関連文書の分類状況を記した、*État sommaire des versements faits aux Archives nationales par les ministères et les administrations qui en dépendent (version de 1962)*, « F<sup>17</sup>. Instruction publique », [http://www.archivesnationales.culture.gouv.fr/chan/chan/series/pdf/ESV\\_F17.pdf](http://www.archivesnationales.culture.gouv.fr/chan/chan/series/pdf/ESV_F17.pdf) も参照した。インターネット上で公開されているこれら2つの目録は、国立古文書館で閲覧できる書物と同じ内容である。公教育省による研究助成（第4章で詳述）関連の文書の所在についてまとめた、次の目録も参照した。Armelle LE GOFF, *Ministère de l'Instruction publique : Service des Missions : Missions scientifiques et littéraires, F/17/2935-3014, F/17/17225-17294 : Index nominatif des voyageurs et index géographique des destinations de leurs missions*, Paris, Centre historique des Archives Nationales, 2005.

<sup>49</sup> *Poésies populaires de la France*, Bibliothèque nationale de France, dép. manuscrit, fond français, nouvelle acquisition, n°s 3338-3343.

である。フランス民謡研究の第一人者であるコワロー (1875-1959) は、フランス全国の民謡の目録 (話型やモチーフのカタログ。国際比較を容易にする) 化に取り組んだ。コワローの没後、遺品となった作業カードを基にした民謡リストを増補した目録が、1996年から2006年にかけて刊行された<sup>50</sup>。他に、大著『現代フランス民俗通覧』の著者ヴァン＝ジュネップの文献リストも得るところが大きい<sup>51</sup>。コワローやヴァン＝ジュネップの文献リストは、民謡に関わる記述が少しでも含まれている文献ならば、アンシアン・レジームの手稿でも19世紀の印刷物でも、網羅的に掲載されている。地方学術団体の紀要など、比較的マイナーな媒体に掲載された短い記事にも目配りされているので、19世紀に実施された民謡収集の全容を把握しようと試みる現代の研究者にとっては、きわめて有用性に富むツールである。ただ、コワローらのリストからも漏れて、言わば埋もれてしまった文献も存在する。こうした文献については、フランス国立図書館の文献目録を用いて一つ一つ探し当てて参照した。

---

<sup>50</sup> Patrice COIRAULT, *Répertoire des chansons françaises de tradition orale*, ouvrage révisé et complété par Georges DELARUE, Marlène BELLY et Simone WALLON, Paris, Bibliothèque nationale de France, 1996-2006, 3 tomes.

<sup>51</sup> VAN GENNEP, « Musique ... ».

## 第1章

### 揺らぐ「民謡」概念—文化政策としての全国民謡収集の意図

フォルトゥール調査が開始された当時、フランスでは、農村民衆が古くから歌い継いできた歌を文字で記録することに、必ずしも多くの研究者や文学者らが関心を持っていた訳ではなかった。こうした状況下、全国で一斉に民謡収集を実施するにあたって政府側（公教育大臣や公教育省歴史研究委員会）は、乗り越えなければならない壁に直面した。肝心の「民謡」という概念が何を指し示すのかという点に関して、フォルトゥール調査以前の段階では、共通理解が確立されていなかったのである。そのため、歴史研究委員会は「民謡」に明確な定義を与える作業を行ないながら、全国民謡調査の舵を取っていく必要があった。本章第1節では、公教育省歴史研究委員会文献学部門（民謡収集を主に担当した部門）の議事録を紐解き、歴史研究委員会内部で「民謡」概念の定義をめぐる論争が交わされた様子を明らかにする。第2節と第3節では、そうした論争を踏まえて、歴史研究委員会が全国各地で民謡収集に協力する者達に向けて、どのような指示を出したかを見ていく。フォルトゥール調査の構想とその具体化の過程の分析を通じて、フォルトゥール調査における「民謡」概念が、多様な要素を包含していたということを明らかにする。こうした考察を経た上で、政府側は「民謡」のいかなる要素を、フランスという国家の文化遺産にふさわしいと考えていたのかを論じる。

#### 第1節 「民謡」をめぐる解釈の揺れ

民謡収集を担当することになった「フランスの言語・歴史・芸術委員会」の文献学部門は、1852年11月15日に初会合を開いた。この会で主要な議題となったのは、目指すべき民謡集の方向性であった。議事録では発言者の氏名が伏せられているが、委員達からは二つの提案が上がった。一つは、次のような4巻構成とする案である。

第一巻 ジラール・ド・ルシヨン〔9世紀、パリ伯〕の武勲詩

第二卷 トウルバドール〔南仏の吟遊詩人〕およびトウルヴェール〔北仏の吟遊詩人〕の詩

第三卷 歴史語り歌と風刺詩

第四卷 輪舞曲や物語詩、他

このように、現代の我々の感覚ではおよそ民謡とは認識しがたいような、中世の諸作品が並んでいる。だが、19世紀文学の専門家であるベニシュによれば、フォルトゥール調査の時代には、民衆の歌と中世の歌とを同一視する傾向が強固に存在した。フランス国民の歌の原初の形態が、中世の歌の中に潜んでいると信じられていたためである<sup>1</sup>。

そもそも歴史研究委員会のパリの本部（正委員：歴史研究委員会の編成については第2章で詳述する）の委員達の大半は、古代・中世の文学や哲学、そして歴史学を専門とする研究者だった。彼ら歴史研究委員会の正委員達は、民謡収集以外にも「クレティアン・ド・トロワ〔12世紀、ブルターニュ地方の聖職者〕作品集」「原典版トウルバドール詩集新選」等、中世文学に関する未刊行史料集成事業の審査や編纂という案件を複数抱え、民謡収集と同時進行的に、こうした分野の研究振興にも尽力していた。つまりフォルトゥール調査は、中世研究を基調とする知的土壌で生まれたのである。

初会合での議論に戻ろう。前述の提案には、直ちに反論が出される。二つ目の案として別の委員が、これまで知られてこなかった口承の収集にこそ重点を置くべきで、叙事詩等の中世の作品は別の企画で扱えばよいと主張したのである<sup>2</sup>。中世文学か、口承か——「民謡」の比重はいずれにあるのか。初会合の場で結論は出ず、議論は続く。

3ヶ月後の1853年2月14日の歴史研究委員会文献学部門月例会の議事録を見よう。この日の議題は「民謡集を歌だけで構成するのか、それとも歌われた詩や語られた詩も含むべきか」である。語られた詩とは、口承が絶えて写本の記述でのみ残る歌を指した表現である。「ある委員」（議事録では氏名が伏せられている）は、そのような詩も含めると何でも収録することになりかねず、民謡集という本来の性格を失ってしまうと危惧を表明した。この意見に対しては、大統領令に「歴史語り物を民謡集に入れる」と明記

<sup>1</sup> Paul BÉNICHOU, *Nerval et la chanson folklorique*, Paris, José Corti, 1970, p. 171.

<sup>2</sup> *Bulletin du Comité de la langue, de l'histoire, et des arts de la France*, t. 1, Paris, Imprimerie impériale, pp. 25-26.

されているので、語られた詩も含むべきとの応答がある。それでもやはり、現在口承されている歌と記述で残っている詩とは区別して考えるべきだと、正委員達は判断した。そして提案されたのは、次の通りの編纂計画である。「第一のカテゴリーは、歌あるいは口承の語りで保存された詩を含む。これは世代間の伝承で伝えられているものである。第二のカテゴリーは、写本と同様の性質を有す詩に割当てられる。民謡集の出版は第一のカテゴリーの作品集から着手する。これらこそが最も分かりやすく、最も民衆的な性質をもたらすからである<sup>3</sup>。」写本として残る作品よりも、口承で守り継がれてきた詩歌を優先するという方針が、当座は承認されたのである。

ところがその2ヶ月後、1853年4月11日の例会で、中世研究と民謡収集との連関を重視するル・クレール委員（古代ギリシア哲学の専門家）が反論を述べる。彼はまず、12～13世紀に民衆の間で広く知られていたと類推される作品を列挙した。そして「今日ではこうした詩の大半が、写本の中でしか見つけることができない。そのため、写本に記された詩を等閑にしないことが重要」と主張したのである。具体的には第一に「民衆のために作られた韻文の説教」、第二に「伝説、あるいは聖人伝」がある。これは「文字を読めない者でも理解し、記憶に刻み込みやすいようにと、韻文に直されたものである。ワース（ノルマンディー公国史『ルー物語』の作者）は12世紀中葉に、こうした意図からフランス語の韻文で聖ニコラの生涯の詩を制作した。この慣習は数世紀に渡って続いた」とル・クレールは説明する。そして第三に「民衆の教育のために作られた多数の民衆詩、[...] ソロモンの知恵の書〔旧約聖書〕、教訓劇、格言を含む詩など」、第四に「様々な職業の格言」を挙げる。ル・クレールは「8音節からなる詩句が規則的な拍子を刻んでいる様子から、こうした類の歌が特定の旋律に乗せて歌われていたと考えることができる」と指摘する。続けて風刺、例えば「聖王ルイが、イギリス王ヘンリー三世と諸侯達との間を1264年に調停した際に作られた『イギリスに平和を』」という「元来は歌われていたに違いない」作品を挙げ、最後に「韻文の昔話」にも同様のことが当てはまると述べた。ル・クレールは「通信委員〔公教育省歴史研究委員会の通信委員。地方在住の研究者〕には写本を調査するよう促し、韻文の説教、韻文の聖人伝、教

---

<sup>3</sup> *Bulletin*, t. 1, pp. 99-100.



訓劇、格言、公的・私的な風刺、弁論、劇作品、昔話、レー〔中世の短い物語詩〕、ファブリオー〔13～14世紀の韻文の笑い話〕、長大な語り物、叙事詩、そして寓話詩を送るよう勧めるべきだ」と結んだ<sup>4</sup>。

この提案は議論的となったと議事録は伝えている。だが応酬の様子は残念ながら詳らかでない。ル・クレールが列挙したジャンルの一部は却下され、一部は採用されたと記してあるのみである。ル・クレールのように中世と民謡との連関を重視する立場からすると、叙事詩や中世の詩人達の作品を「民謡」とする提案は斥けられてしまったが、中世の口承の痕跡と思われる写本の詩を「民謡」に含めることには成功したのである。

一連の論争の最終的な決着を具体的に検討するのは次節に譲り、ここでは一旦、歴史研究委員会の外に目を転じたい。委員会内での議論は、委員会の外での「民謡」の語感とは実に乖離していたのである。

民謡収集を命じる大統領令が出された3日後、官報『モニトゥール』紙は「宗教歌、戦争歌、祭事歌、物語詩、歴史語り物、伝説、昔話、風刺」の収集の開始を告げ、この事業への協力を広く読者に募っている。この効果には目覚ましいものがあつた。わずか数日のうちに、協力を約束する手紙や歌詞を書き付けた手紙が、大臣の元に続々と届いたのである。だがそれらは、歴史研究委員会の正委員達の期待を外れるものが少なくなかった。彼らとしては、「民謡」とは古くから伝わる歌を前提とすることを想定していたところへ、時事的内容の自作歌や流行歌が舞い込んだのである。そうした歌の大半は、ルイ＝ナポレオンを讃え、愛国心を鼓舞する内容だった<sup>5</sup>。委員会はこうした報告に「全くもって取るに足りない」と冷たい反応を示し、それ以上取り合わなかった<sup>6</sup>。このように根本的な所で齟齬が起きた背景には、本稿で「民謡」と訳している語のニュアンスが影響している。原語ではchant populaire（民衆の歌、の意）またはpoésie populaire（民衆の詩、の意）である。これらの語自体には古く伝統的な歌といった含意はないため、民衆の作った歌でありさえすれば、chant/poésie populaireには違いないので

---

<sup>4</sup> *Bulletin*, t. 1, pp. 182-183.

<sup>5</sup> AN, F17/3245, dossier « Poésies contemporaines envoyées par leurs auteurs ».

<sup>6</sup> *Bulletin*, t. 1, p. 24.



ある。このため官報読者の一部は、記事の言う「民衆の歌」が、自分の身近にある流行歌や、民衆である自分の作った歌を指すと解釈した。委員会が自明と考えていた「民謡」＝古謡という図式は、一般の間では必ずしも通用しなかったのである。

以上、chant/poésie populaire（民衆の詩歌）という概念は、フォルトゥール調査が始まったばかりの段階では、同時代の流行歌から中世の詩人の作品までをカバーしうる、非常に幅広い語義を包含していたことが分かった。語の揺らぎが誤解を生んでしまうと、歴史研究委員会正委員達が考える民謡収集の意図が、全国の協力者達に正確に伝わらない可能性が生じてくる。これを防ぐ為にも、緩い「民謡」概念に輪郭を与えることが喫緊の課題となった。

## 第2節 「民謡」概念の統一の試み—『手引』における民謡像

歴史研究委員会の正委員達は調査開始当初から議論を重ね、翌1853年、アンペール委員の筆で『フランスの民衆詩歌—フランスの言語・歴史・芸術委員会の手引書』という小冊子に、民謡収集の指針をまとめた。これは地方在住の歴史研究委員会メンバー達や大学区長・初等視学官に配布された他、官報にも全文掲載された<sup>7</sup>。本節では同書を検討し、曖昧な「民謡」という概念を委員達がいかに定義したか、具体的に把握する。

『手引』は二部構成となっている。前半部では、民謡の全般的な特徴が説明される。まず、民謡とは作者不詳で自然発生的な歌、もしくは民衆向けに作られ民衆の間に定着した歌だと定義される。その上で、今回の調査で扱うのは、19世紀以前に制作された歌に限るとしている。これにより、自作歌や流行歌を「民謡」と呼ぶ解釈は排される。また、中世の有名な武勲詩や吟遊詩人の作品に関しては、原則として扱わないことに決まった。こうした作品は技巧を駆使しており、民衆特有の簡素な詩ではないからだとして『手引』は説明する。ただし武勲詩等が原初の状態のままで新たに発見され、民衆を起

---

<sup>7</sup> Jean-Jacques AMPÈRE, *Poésies populaires de la France : Instructions du Comité de la langue, de l'histoire et des arts de la France* (Instructionsと略記), in *Bulletin*, t. 1, pp. 217-279 ; Id., « Poésies populaires de la France », *Moniteur universel*, 19 octobre 1853, p. 1163 ; 19 octobre 1853, pp. 1171-1172 ; 23 octobre 1853, pp. 1179-1180 ; 25 octobre 1853, pp. 1187-1188.

源とすることが確証できる場合に限り、委員会はこれを歓迎するとも記されている<sup>8</sup>。

この例外規程は、前節で見た中世重視派の主張を部分的に容認したものである。論争は最終的に、両陣営の主張を折衷する形で落ち着いたのである。

『手引』後半部では民謡を13のカテゴリーに分類して、それぞれのカテゴリーについて実際の民謡の歌詞（方言や地方言語の歌はフランス語訳）を引用しながら、特徴を解説している。1番目から5番目のカテゴリーまでは、信仰、道德、歴史、物語と、民衆の思想に関係する内容が続く。6番目以降、民衆の生活に密接した内容に切り替わる（表参照）。順に一瞥していこう。

分類名	解説の要旨	歌詞を引用された歌の数
I. 宗教的な詩	-----	-----
I-1. 祈祷	民衆向けの俗語での説教等	0
I-2. 伝説、聖人伝、奇跡	聖母を主題とする歌等	2
I-3. 聖歌	村の祭や巡礼等で収集できる歌	0
I-4. 年間の様々な祭のための歌	クリスマス、公現祭、聖ヨハネの祝日、死者の日の歌等	2
II. 異教起源の民衆詩	-----	-----
II-1. ドルイドの記憶	ブルターニュの歌には古代ケルト文化の断片が残っている	2
II-2. ゲルマンの記憶	ドイツに隣接する地方の歌には、北欧神話との類似点が見られる	1
III. 教訓的・道徳的な詩	諺と同じ様に教訓を含む歌	2
IV. 歴史伝承詩	十字軍、百年戦争、宗教戦争等の史実を題材とする歌	7
V. 物語詩	物語の展開を語る目的の歌。ドイツ等のバラードやスペインのロマンセに該当	10
VI. 生涯の様々な出来事と人生の様々な段階に関する詩	結婚式の歌、葬送歌	3
歌。結婚、洗礼、初聖体拝領、出家、死、埋葬		
VII. 移動する職業に関する詩歌。兵士、船乗り、等	兵士の歌、船乗りの歌等	3
VIII. 定住的職業に固有の歌。鍛冶屋、機織り工、仕立て屋、靴修理工、木靴職人、糸紡ぎ女工、指物工。同業組合の歌	地域特有の産業を調べれば、同業組合の守護聖人の歌等、固有の歌が見つかる提案	1
IX. 農村の様々な労働に関する歌。種まき、刈入れ、ワイン用のブドウの収穫、オリーブの収穫	エジプトの歌と類似した内容の歌が、コレーズ県で発見された事例を紹介	詩句の一部
X. 狩人、漁師、羊飼いの歌	羊飼いを題材とする田園詩の解説	0
XI. 風刺歌	シャリヴァリの歌等	詩句の一部

<sup>8</sup> *Instructions*, pp. 218-219, 225.

XII. 即興歌。発明、流行、公衆の想像力を刺激する 大小の出来事に関して	18世紀に流行した操り人形についての歌 の紹介	詩句の一部
XIII. 酒の歌を含む戯れ歌	ロンド、乳母の歌、子守歌（酒の歌には 言及なし）	4（うち2曲は 詩句の一部）

冒頭を飾る「I. 宗教的な詩」では、古代ケルト文化を受け継ぐとされるブルターニュ地方のパルドン祭や、春の到来を祝う5月1日の祭と共に、カトリックの教義に必ずしも収まらない、民衆特有の信仰が表れた歌を例示している。例えば、聖母マリア崇敬をテーマとした西部ペリゴール地方の中世の歌では、マリアがイエスの母として、息子である神を動かす様子が歌われる。

「今宵ひとつの魂が死した  
告解なしに死した  
誰もその魂を見ない  
ただ聖処女だけを除いては  
悪魔が取り囲む  
—ちょっと、ちょっと、我が子イエスや  
この哀れな魂を許しておくれ  
—どうしてその人を許してほしいんです？  
一度も私に許しを乞わなかった人なのですよ  
—ねえ言うことを聞いて、我が子イエスや  
この人はこの私に許しを乞うたのです  
—わかった、母さん、母さんが望むなら  
すぐにその人を許しますよ」

続く「II. 異教起源の民衆詩」は、ケルトや北欧神話等、古代文化の痕跡をとどめているとされる歌を取り上げている。例えば「聖マルグリット」というブルターニュ地方の歌は、昼間は娘の姿をしているが夜には白い雌鹿に変身してしまうマルグリットが、鹿の姿をしている時に弟に仕留められ、領主の夕食に供されてしまうという筋書きで、『手引』の註釈では、この中にケルト特有の靈魂の輪廻転生の教義を読み取れるとする解釈が記されている。

「III. 教訓的・道徳的な詩」では嘘や放蕩を戒める歌が引用され、こうした歌が民衆にとっては、格言や諺と同じ役割を果たしていたと説明される。フランスでは中世から16世紀頃にかけて、諺を通じて民衆の知恵や道徳心を知ることがを目的に俗語の諺の集成が編まれてきたのだが<sup>9</sup>、この項目の解説もそうした態度をとっている。

「IV. 歴史伝承詩」は次の「V. 物語詩」と共に、突出して多くの歌詞が掲載され、最も力点の置かれた項目である。著者アンペールの解説を要約すると以下の通りとなる。歴史伝承詩とは、古代に始まり、ジャン王捕囚、百年戦争、三十年戦争等の史実を伝えたり、ダゴベール王、聖エロワ等の人物を称揚する詩で「時代の精神的・政治的状況」を活写している。我々のよく知るマルボロ卿の歌（歌詞は不掲載）は、「中世に遡る歌の断片であることが明白」で「封建的・騎士道的習俗の複数の特徴を示している」と<sup>10</sup>。また、16世紀に起こった宗教戦争は、非常に多くの民謡に痕跡を残している。プロテスタント勢力に包囲されたプロヴァンス地方カステラン市の抵抗を讃えた「爆竹の歌」は、「勇敢なるジュディット」と呼ばれる女性の武勲を語る。敵が爆竹を使って市門を壊そうとしている時、彼女は門の上から、タールを塗ったたらいに火を点けて投げつけた。これが敵の大將を直撃する（歌詞は引用されず、こうした粗筋のみが『手引』には記されている）。町の人々が祭などで練り歩く際、この歌を愛唱してきたということが興味深い、とアンペールは述べている。宗教戦争期の題材としては、他に、信仰上の迫害、ギーズ公、フランソワ一世の捕囚<sup>11</sup>、メヌ公、ビロン元帥<sup>12</sup>が例示される。同じビロン元帥を取り上げた歌でも、ヴォージュ地方ではビロンへの敵意が表れ、ブルターニュ地方では好意が表れており対照的だと、アンペールは指摘する。最後に、以上のように史実に取材した歌だけでなく、昔の習俗のイメージを醸し出す歌も歴史伝承詩として紹介される。その例は「ボワ＝ジル氏」という歌である。宗教戦争末期、アンリ

---

<sup>9</sup> ナタリー・ゼーモン・デーヴィス『愚者の王国 異端の都市—近代初期フランスの民衆文化』第8章「諺と迷信」成瀬駒男・宮下志朗・高橋由美子訳、平凡社、1987年。

<sup>10</sup> *Instructions*, pp. 240-241.

<sup>11</sup> 1525-1526年、カール五世に破れたフランソワ一世はマドリードに幽閉された。

<sup>12</sup> ビロン元帥 (1562-1602) はアンリ四世の家臣。陰謀の嫌疑をかけられ処刑された。

四世時代のこの歌は、アンペールによれば、自らの誇りにかけて剣を抜く準備が常にある貴族の姿を描いている。パリを追われた貴族ボワ＝ジルが平原を進むと、大部隊と遭遇する。その中に宿敵がいると気づいた従者は、剣を抜いて走るよう主人を促すが、ボワ＝ジルは拒む。二人の貴族は歩み寄り、まずは冷静に挨拶を交わす。

「16番：ボワ＝ジル、覚えておるか？

お前が私にはたらいた辱めを

姫君の目の前で

ラ、ラ、ソ、ファ

三度私を否定したのだ

ラ、ソ、ファ、ミ

〔…〕

19番：こう言い終わるや戦いが始まった

ボワ＝ジルは30人殺した

ラ、ラ、ソ、ファ

だが彼の剣は的を外した

ラ、ソ、ファ、ミ」

そして瀕死の身となったボワ＝ジルは、従者に言づてを頼む。妻へは、おまえの夫はもう逝く、と。乳母へは、息子をよろしく頼む、と。最後に、次の一節でこの長大な歌は締めくくられる。

「24番：そして息子には、いつの日かこの者達に復讐せよ、と

こう言い終わるや

ラ、ラ、ソ、ファ

ボワ＝ジルは息を引き取った！

ラ、ソ、ファ、ミ」

「V. 物語詩」は、韻文の昔話と理解してよい。このジャンルには全般的に、細部の省略、言葉の同形反復、三や七といった数の多用、金銀等金属的モチーフの多用といった特徴が見られるとアンペールは指摘している。これらは、後にリュティが理論化する昔



話の様式理論と共通する要素であることが興味深い<sup>13</sup>。このカテゴリーの中から例えば、作家メリメがオーヴェルニュ地方で採集した「ディオオンと王女」という歌を見てみよう。貧しい騎士のディオオンを愛した王女が、父王の手で7年間塔に閉じ込められた後、ディオオンの機転で脱出し、駆け落ちするという粗筋である。逃亡中のディオオンと王女とのやりとりに、昔話特有の語法が如実に表れている。

「15番：彼らは5〜6里進んだ

一言も二言も口にせず

美しい娘が彼にこう言った以外には

—ああディオオン、なんて私、おなかがすいたのでしょうか！

16番：ああディオオン、なんて私、おなかがすいたのでしょうか！

自分の拳を食べちゃいたいわ！

—お食べなさいよ、恋人よ、あなたの拳を

もうパンは食べられないのだから！

17番：彼らは6〜7里進んだ

一言も二言も口にせず

美しい娘が彼にこう言った以外には

—ああディオオン、なんて私、喉が渴いたのでしょうか！

18番：ああディオオン、なんて私、喉が渴いたのでしょうか！

自分の血を飲んじゃいたいわ

—お飲みなさいよ、恋人よ、あなたの血を

もう白ワインは飲めないのだから〔後略〕」

ここまでのI. からV. までのカテゴリーは詳細に解説され、歌の実例も充実している。歌詞を掲載せずにタイトルの言及だけにとどめる場合でも、アンペールは出版物の典拠を示すなどして、読者への情報提供に怠りがない。

---

<sup>13</sup> マックス・リュティ『増補ヨーロッパの昔話—その形式と本質』小澤俊夫訳、岩崎美術社、1976年（原著1947年）。

「VI. 生涯の出来事」は結婚式の歌が主に取り上げられている。西部ポワトゥー地方ニオール市近郊でド・コルセル氏がブドウ収穫人から聞き取った「新婦の歌」は、新婦の友人達が結婚を祝して歌う曲である。アンペールはこれを、隣のヴァンデ地方の「新婦の歌」の歌詞と並べて掲載する。ヴァンデ地方の「新婦の歌」は途中から問答形式になり、ニオール市の「新婦の歌」よりも長大であるという違いはあるが、両者を比較しながら読み進めていくと、ほぼ同一の内容が歌われているということが読者の目にも明らかとなる。この他、葬送時に女性が即興歌を歌うコルシカの習慣が紹介され、「娘の死についての或る母親の弔歌」の一節が引用されている。

「VII. 移動する職業の歌」の内の兵士の歌とは、兵士を題材とする歌ではなく、兵士自身が戦闘を称揚したり、戦意を高揚させるために歌う歌を指している。他にアンペールは、ブルターニュ地方の漁師が歌う歌や、南西部ピレネー地方の川の船頭が歌う歌をこのカテゴリーに中で掲載している。

「VIII. 定住的職業」は、職人の歌う歌である。ブルターニュ地方のサン＝ブリュー市近郊で収集された「靴職人達」という歌は、聖月曜日〔月曜も休業して居酒屋で過ごすという労働者の慣習〕を歌っている。フランス・フランドル地方の例では、特産品のレースを編む女工達が、レース工達の守護聖人である聖アンヌの祭の際にパレードしながら歌う曲が挙げられる。

次の「IX. 農村の労働」以降のカテゴリーは、例が格段と減少する。標題と解説の内容とが一致しないことも多い。例えば「IX.」は、標題からは農作業歌が容易に連想されるが、そうした歌は登場しない。代わりに、南仏の牛追いが歌う短い詩句が紹介され、古代ギリシアや古代エジプトの歌と共通する点があるとの指摘が記される。少しでも農村に関係のある歌を、既存の民謡集から無理矢理選んだ感が否めない。続く「X. 狩人、漁師、羊飼」の説明でも、狩人、漁師の姿はない。羊飼に関しては、中世の田園詩というジャンルに登場するとの情報が与えられる。「XI. 風刺歌」は、シャリヴァリ〔共同体の秩序を破った者への制裁として、大音量ではやしたてるなどする民衆の慣習〕の歌を含むと説明されるが、この例は挙げられていない。その代わり、宮廷で作られて民衆にも浸透した風刺の一節が紹介される。「XII. 即興歌」は、上掲表に記し

た以外の情報がなく、解説としてはあまりに簡素である。「XIII. 戯れ歌」の標題に酒の歌とあるが、これも解説文では一言も登場しない。説明されるのは主にロンド等の舞曲である。ロンドは、アンペールによれば、中世の騎士道の痕跡の残るジャンルである。例えばオジエ・ル・ダノワというシャルルマーニュの寵臣を歌った「この城にいるのは誰？／オジエ／この城にいるのは誰？／麗しき騎士」という問答形式のリフレインが、有名な武勲詩の一部と関係すると指摘される。そして最後に、厳格な目的の民謡収集だからと言って、卑猥でふざけた内容の歌にも目を瞑ることなく、ありのままを報告するようにとの注意をもって『手引』は締めくくられる。

歴史研究委員会が『手引』にまとめた「民謡」の定義およびその具体例は、以上の通りである。こうした記述から指摘できる特徴について、節を改めて考察しよう。

### 第3節 新たな関心の出現

『手引』の記述から、二点の特徴を指摘できる。一点目は、文献学的・歴史学的な関心の高さである。「IV. 歴史伝承詩」を筆頭に、至る所で、民謡の詩句は古代・中世の痕跡や武勲詩の断片を含むものとして解釈している。民謡の古層を重視するこうした態度には、公教育省がフォルトゥール調査以前より実施していた「フランス史に関する未刊行史料集成」事業との連続性が影響している。1834年、公教育大臣ギゾーの提唱で、散逸の恐れのある全ての古文書、碑文、口承を記した写本を活字化し、後世に遺すという壮大な計画が開始した。この時ギゾーは、民謡をはじめとする口承を集めることには、フランス文学史の欠落部分を補充する意義があると強調した<sup>14</sup>。だが、史料収集の一環として民謡を収集するという着想は、ただちに歴史研究委員会のメンバー達の理解を得られるものではなかった。例えば、1837年8月、のちに民謡集『バルザズ・ブレイズ』を出版することとなるラ・ヴィルマルケが、自ら収集したブルターニュ地方の民謡をまとめた原稿の一部を添えて、こうした民謡はフランス史の史料として役立つと主張

<sup>14</sup> François GUIZOT, « Seconde lettre du Ministre de l'instruction publique aux correspondants historiques de son ministère », le 15 mai 1835, in *Collection des documents inédits sur l'histoire de France*, vol. 1, Paris, Imprimerie royale, 1835, pp. 67-81 (esp. 77-81). 未刊行史料集成事業については次節で改めて詳述する。

して、民謡集として刊行するために助成して欲しいと訴えかける書簡を公教育大臣に送っている。ラ・ヴィルマルケはこの書簡の文頭で、歴史家オーギュスタン・ティエリの助言に従って助成を申請することにしたと述べている<sup>15</sup>。ティエリはこの時、未刊行史料集成事業に大きく関与しており、歴史研究委員会にとって発言力のある存在だった。だが歴史研究委員会の正委員達の間では、自分の集めた民謡の起源は5～6世紀に遡るとするラ・ヴィルマルケの主張に対して懐疑的な意見がまさったため、ラ・ヴィルマルケの申請は却下されてしまう<sup>16</sup>。その後1845年に、ギゾーの意図に倣って、サルヴァンディー公教育大臣が「宗教的・歴史的詩歌委員会」を発足させ、民謡に特化した収集計画を立ち上げる。だが七月王政が崩壊したため頓挫し、結局、1852年にフォルトゥール公教育大臣がこの計画を復活させる形で、全国民謡調査の実現にこぎつけた。実際にも彼は、ルイ＝ナポレオンに宛てた民謡収集事業の建白書で、次のように述べている。フランスで代々受け継がれてきた「国語に取って代わられた、諸地方の固有語 *idiomes* の詩歌」は、民衆の視点から祖国の歴史を語る貴重な証言であり、「国民史上の諸事件の痕跡」である。こうした民謡の伝統が消滅の危機にさらされている今、収集を急がねばならない。フランス人の文学は技巧に走る傾向があるために「偽りの洗練」に陥ってしまったが、民謡の「古きフランス精神の素朴な表現」が我々の新たな「美の規範」となる。民謡を収集することで、民衆の文学作品の「巨大な記念碑」を我々はフ

---

<sup>15</sup> 1837年8月26日、ラ・ヴィルマルケから公教育大臣への書簡。AN, F17/2834.

<sup>16</sup> 1838年7月18日、歴史研究委員会秘書ドネ *Donné* が作成した報告書。この報告書には、シャルル・ノディエ（作家）がフォリエル（文献学者）に、ラ・ヴィルマルケの集めたブルターニュの民謡・詩の鑑定を依頼した旨が記されている。AN, F17/2831. 1838年2月13日、公教育大臣からラ・ヴィルマルケへ、助成申請を却下するという歴史研究委員会の決定を伝える書簡の写し。AN, F17/2834.

ランス文学史上に築くことができる、と<sup>17</sup>。フォルトゥール調査の源流はこの通り、史料収集にあった。

『手引』の二点目の特徴は、従前の民謡収集とは異なる分野の歌にも、収集対象を広げたことである。「VI. 生涯の出来事」以下のカテゴリーに着目すれば、そこでは解説も歌の引用も総じて貧弱であった。特に「IX.」以降は実例が乏しく、標題と解説とが時にちぐはぐであった。『手引』執筆を担当したアンペールは、各カテゴリーの見本となる歌を求めて、既存の集成等の文献や、フォルトゥール大臣の元に集まった民謡報告を吟味した。だが適切な作品が未だに見当たらないジャンルがあるため、これを発見すべく総力を挙げて協力して欲しい、と歴史研究委員会の会合の場で何度も呼びかけた。委員達の側もこれに積極的に応えたが、彼らが持てる情報を総動員しても、調査員に見本として示すに値する歌の例を全カテゴリーで揃えるのは困難をきわめた<sup>18</sup>。民衆の日常の中で歌われ、生活の様子を垣間見させてくれる類の民謡は、フォルトゥール調査以前にはわずかしき記録されてこなかったためである。委員達は先例に従うばかりでなく、従来はあまり取組まれてこなかった、こうした新たな分野にも足を踏み入れた。フォルトゥール調査は歴史学的な関心を基調としながらも、新たな民謡像の方向性もまた示唆していたのである。

## 章括

フォルトゥール調査を舞台に、「民謡」の語義の揺らぎ、ならびに歴史研究委員会での定義を検討し、『手引』の示す民謡像の特徴について考察してきた。民謡とは何か、

---

<sup>17</sup> Hippolyte FORTOUL, « Rapport au Prince Président de la République française », s.d., in *Bulletin*, t. 1, pp. 21-22. 民衆の文学を通じて文学の革新を図るという、フォルトゥールがここで述べている考えと同様の動機で、ジョルジュ・サンドやネルヴァルといった作家達も民謡や昔話を収集していることは注目に値する。19世紀中葉のフランスにおける文学の革新と民衆の口承との関係については改めて考察したい。サンド『フランス田園伝説集』篠田知和基訳、岩波書店、1988年（初出1858年）。ネルヴァル「ヴァロワの民謡と伝説」（『火の娘たち』の内「シルヴィー・ヴァロワの思い出」の章の一節）『ネルヴァル全集V土地の精霊』中村真一郎・入沢康夫監修、田村毅・丸山義編訳、筑摩書房、1997年（初出1842年）所収。

<sup>18</sup> *Bulletin*, t. 1, pp. 49, 322-325, 339, 348.



民謡収集の意味とは何かという問いを歴史研究委員会の正委員達が突き詰め、その解を『手引』に結晶させたことの意味は大きい。『手引』の実例が全て、既刊の民謡集や大臣宛の民謡報告から採られていることも含め、19世紀前半の民謡収集の方法、関心のあり方、およびその成果が、ここに集大成されているからである。歴史研究委員会での論争や『手引』を検討してきた我々には、かつて非学問的と一蹴されてきた19世紀前半の民謡収集にも、それなりのロジックが貫かれていたということが分かる。民衆が口承する詩や旋律を忠実に記録することを至上命題とする民謡収集とは異なり、19世紀前半における民謡収集は、民衆の歴史を証言する史料を保存する行為として行われたのであった。その際フォルトゥール調査では、史実を語る歌にとどまらず、民衆の生活に密着した歌の収集をも開拓した。詩句の内容だけでなく、民謡の歌われる場である民衆の生活やライフサイクルもまた、未刊行史料集成事業の一環として収集すべき「史料」の一種だと、歴史研究委員会の正委員達は見なしたのである。

## 第2章

### 公教育省歴史研究委員会と未刊行史料集成事業

#### —「地方」と「中央」の関係に着目して

フォルトゥール調査は、民衆の歴史を語る「史料」として民謡を捉える考え方に基づき、「未刊行史料集成」事業の一環として実施された。では、いかなる人々がこの政府の事業に協力したのか。公教育省はいかにして、全国各地で協力者達を確保したのか。本章ではこうした点を明らかにしていく。そのために、公教育省歴史研究委員会の擁する全国組織の設立および変遷の過程を追うこととし、それを通じて、第三共和政以前の文化政策における政府の役割についても考察していく。

#### 第1節 未刊行史料集成の背景と歴史研究委員会の構造

国家による史料収集事業は、未刊行史料集成以前にも存在した。1759年、財務省文書管理官のモロー(1717-1803)が、15世紀以前に記された全ての証書の写本を作成し、各文書の註釈・要旨・目録を作成する計画を開始する。領主の要求や高等法院の抵抗に直面して、あらゆる種類の収入に対して課税する王の権利に根拠を与える全ての文書を、財務省で入手することがこの史料収集の目的だった。モローはベネディクト会士を中心に協力者集団を組織した。モローが始めた史料収集はフランス革命で中断したのち、第一帝政期に再開されて107年もの歳月を経て完成に至っている<sup>1</sup>。この他にも碑文・文芸アカデミーや、ギゾー自身も設立に関わったフランス歴史協会(1833年に創設され、現存している)という学術団体が、未刊行史料集成の事業が始まる以前に史料収集に着手していた。いずれの史料収集も、フランス革命以前には書かれることがなかった、国民を主体とする歴史を明らかにするために行なわれた。政府による未刊行史料集成の目的も同じものであった。ではなぜギゾーは、他団体と競合する可能性のある史料収集をあえて政府の事業として実施したのか。1833年末のギゾーの未刊行史料集成建白書から<sup>2</sup>、三つの理由が読み取れる。第

<sup>1</sup> Laurent THEIS, « Guizot et les institutions de mémoire », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. II : La Nation*, vol. 2, pp. 571-572.

<sup>2</sup> François GUIZOT, « Extrait du rapport au roi proposant la création d'un service de recherches et de publication de documents inédits », 31 décembre 1833, in Xavier CHARMES, *Le Comité des travaux historiques et scientifiques (histoire et documents)*, Paris, Imprimerie nationale, 1886, t. II (以下同書同巻からの引用はC. IIと略記), pp. 4-7.

一は財政面の理由である。ギゾーによれば、碑文・文芸アカデミーでは史料集出版の財源が少額であるために、作業の遅延を余儀なくされている。他方、政府による未刊行史料集成には、初年度の1835年に120000フランの予算が付けられた<sup>3</sup>。この金額はフランス歴史協会の同年度の会費収入の40倍以上にあたるということを考えると<sup>4</sup>、未刊行史料集成の資金の潤沢さが際立つ。第二に、多くの史料の所有者が政府であるという理由がある。ギゾーの主張を聞こう。「私の思うに、我が祖国の歴史に関する史料のうちで未だ刊行されずにとどまっている全ての重要な素材を、包括的に出版するという大きな仕事を達成するのは、ただ政府だけです。この壮大な企画を遂行するのに必要とされるあらゆる種類の資源を有するのは、ただ政府だけです。必要経費を捻出する方策のことだけを言っているのではありません。多くの解明をもたらすこうした出版物を一層充実させることができるのは、過去の諸世紀からの貴重な遺贈品の番人にして所有者たる政府だけなのです。」具体的には、従来非公開だった各省の史料（特に外務省文書）や、全国の県立図書館・文書館、高等法院、陸海軍の文書が収集対象となる。最後に、史料を損壊の危機から守るという理由もある。特に地方では適切な管理がなされず、劣悪な保存状態に史料が置かれて文字が消えて読めなくなるなどの損害が出ているため、史料収集を急がねばならないとギゾーは言う<sup>5</sup>。なおフランス歴史協会は、政府の計画との棲み分けを図り、活動方針を転換した。フランス国民の歴史に対する一般読者層の関心を喚起するために、持ち運びに簡便なサイズの本で中世の史料の訳文を出版するなどの工夫を凝らし、専門家以外へとターゲットを広げていったのである<sup>6</sup>。

史料集成を行なうための組織として、歴史研究委員会が、公教育大臣のもとに1834年に設立された。歴史研究委員会に関して、我々は二つの系列の先行研究から学ぶことができる。第一は、委員会についての個別研究である。まず、歴史研究委員会委員のグザヴィエ・シャルムが、創設50周年を機に歴史をまとめた『歴史・科学委員会（歴史と史料）』（1886年）が、歴史研究委員会に関する最初の研究である<sup>7</sup>。歴史研究委員会の歩みを時系列的に論述した225頁に及ぶ序文と、1759年から1884年の間に出された委員会関係の省

<sup>3</sup> 1835年1月10日省令, C. II, pp. 27-28.

<sup>4</sup> THEIS, « Guizot et ... », p. 584.

<sup>5</sup> GUIZOT, « Extrait du ... », pp. 4-7.

<sup>6</sup> THEIS, « Guizot et ... », pp. 580, 582.

<sup>7</sup> Xavier CHARMES, *Le Comité des travaux historiques et scientifiques (histoire et documents)*, Paris, Imprimerie nationale, 3 tomes, 1886.

令等の主要な刊行史料を収録した本文との二部構成で、古典的作品として今日でも重要である。次に、国立文書館文書管理官のアントワヌらが1970年代後半に著した史料目録が、史料渉猟時の基礎的文献である<sup>8</sup>。これと前後して、歴史研究委員会の委員を務めた祖先の手記等の私蔵史料を用い、例会の様子等を詳らかにしたドゥタンの論文が発表された<sup>9</sup>。ギゾーが史料保存体制を組織化する過程を論じたテイス論文も、歴史研究委員会を扱っている<sup>10</sup>。近年ではルロワが2000年・2001年に提出した学位請求論文があるが、前者は目次の半分程度しか執筆されておらず未完の作品であり、後者は古文書学校の卒業資格請求論文で一般公開されておらず、筆者は未見である<sup>11</sup>。

歴史研究委員会は改組を繰り返すが【資料1】、基本的な組織構造は変わらない。例会での議決権を独占的に持つ正委員 *membre titulaire* が委員会首脳部となって地方在住の委員達へ指示を出し、史料の収集や編纂を率いていくという構造である。正委員は各部門10名前後で、基本的にパリに在住する。学士院所属の研究者、ヴィクトル・ユゴー等の作家、公教育省役人などの他、歴史的建造物総監督官を務めた作家のメリメも兼任で長年正委員を務めた。一方、地方在住の委員は、歴史研究委員会例会への出席資格を有するが議決権のない地方委員 *membre non résidant* と、例会への出席を許されず通信のみで歴史研究委員会の事業に参加する通信委員 *membre correspondant* とに分かれる。前者の定員は10～30名（委員会改編に伴い増減あり）、後者は委員会発足当時の90名から増加し続け300名以上に膨らんだが、1851年以降は定員が200名に制限された<sup>12</sup>。このように歴史研究委員会

---

<sup>8</sup> ANTOINE et OLIVIER, *Inventaire ....* この目録とは別に、史料の分類方法を説明したアントワヌ論文の中にも、歴史研究委員会の歴史を整理したくだりがある。ANTOINE, « Un service pionnier au XIX<sup>e</sup> siècle : Le bureau des travaux historiques d'après ses papiers aux Archives Nationales », *Bulletin de la Section d'histoire moderne et contemporaine*, fasc. 10 : Orientation de recherche, Paris, Bibliothèque nationale de France, 1977, pp. 5-72. なお同書の目次では、同論文の標題が「La diffusion des Sciences et Lettres du Ministère de l'Instruction publique」と表記されている。

<sup>9</sup> Georges DETHAN, « Adolphe Chéruel et le comité des travaux historiques », *Actes du 100<sup>e</sup> congrès national des sociétés savantes*, t. I, Paris, Bibliothèque nationale de France, 1976, pp. 77-86.

<sup>10</sup> THEIS, « Guizot et ... », pp. 569-592.

<sup>11</sup> Rodolphe LEROY, *Une institution de recherche au cœur de l'essor scientifique européen : Le Comité des travaux historiques et scientifiques en France et à l'étranger, de sa création en 1834 à celle du CNRS en 1939*, directeur de recherche : Jean-Michel Leniaud, Paris, École pratique des hautes études, 2000 ; Id., *Le Comité des travaux historiques et scientifiques (1834-1914) : Entre animation et contrôle du mouvement scientifique en France*, Paris, Thèse diplôme d'archiviste-paléographe de l'École des Chartes, 2001.

<sup>12</sup> 1851年1月23日省令（C. II, p. 148）第2条で「今後、現行の通信委員が300名まで段階的に減るまでは、除名者2名につき1名しか新規に任命しない」とし、通信委員の定員が初めて定められた。同年4月7日省令（C. II, pp. 148-149）で定員がさらに削減され200名となり、以後これが定着する。



は、権限の面だけでなく人数の面でも、正委員を頂点とするピラミッド構造を特徴としている。

地方委員や通信委員は原則的に地方学術団体会員の中から選抜され<sup>13</sup>、公教育大臣が任命権を持った。地方に住む研究者自身が公教育大臣宛てに直接手紙を書いて、通信委員に自薦するケースがあったほか<sup>14</sup>、公教育大臣が県知事や大学区（アカデミー管区）長に命じて適任者を推薦させる場合も<sup>15</sup>、逆に大臣側があらかじめ候補者をリストアップするなどして、県知事や大学区長に人物照会する場合もあった<sup>16</sup>。その際、第二帝政下には、候補者の学識や業績に加えて、政治的傾向が選考材料として非常に重視された。例えば1852年9月、フォルトゥール大臣がエロー県のジュール・ルヌヴィエなる人物を新規に通信委員へ任命する候補者のリストに一旦は加えたものの、県知事からの報告で急進的な共和主義者であることが判明し、候補者リストから削除するということがあった<sup>17</sup>。

以上の通り、政府による史料収集は資金面や収集可能な史料の多さという点で、既存の取組みと一線を画すとの主張に基づき、公教育省の未刊行史料集成事業が始動した。これを担当する歴史研究委員会は、パリの正委員以下、地方委員や通信委員という全国規模のネットワークを擁し、組織的に史料収集を実行していく。次節で、未刊行史料集成のために実施された全国調査における、地方在住の委員達の役割を検討する。

---

<sup>13</sup> 本稿の扱う1830年代から1870年代には、地方学術団体会員は、大学やリセの教員の他、行政官、裁判官、弁護士、医師などの自由業者が一般的に多数を占める傾向がある。ただし会員の職業・出身地・年齢等の分布状況は、団体の専門分野や地域によって異なる。トゥールーズの全団体の会員構成を比較した、Caroline BARRERA, *Les sociétés savantes de Toulouse au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, CTHS, 2003, pp. 125-217 (2<sup>ème</sup> partie) が優れた分析を行なっている。

<sup>14</sup> 例えば、「はじめに」註20で引用した民謡集の著者であるゲロー Guéraud は、1849年2月8日に公教育大臣へ書簡を記し、歴史研究委員会通信委員に自薦している。同年4月5日付で通信委員に任命された。AN, F17/2857.

<sup>15</sup> 例えば、通信委員の推挙を県知事に命じる通達（1855年12月28日、草稿）。AN, F17/2811.

<sup>16</sup> 「はじめに」註22で言及したタルン県カストル在住のコンブ Combes は、1853年4月17日に通信委員のポストへ自薦する書簡を公教育大臣宛てに記した。その後県知事に対してコンブの人物照会が行なわれ、同年6月28日付でタルン県知事の推薦書が公教育大臣の元に届き、ほどなく、同年7月14日付の公教育大臣通達でコンブは通信委員に任命された。AN, F17/2846/2.

<sup>17</sup> « Renseignements données par les Préfets en réponse à la circulaire du 29 septembre 1852 », AN, F17/17130. 1858年に歴史研究委員会が改組された時にも同様のケースがあった。アリエージュ県のガリグー Garrigou という人物が優れた学識を持っているとして、公教育大臣が新規通信委員の候補者としたが、共和主義者と判明したため落選させている。1858年4月14日、アリエージュ県知事から公教育大臣への書簡。AN, F17/2811.



## 第2節 史料収集における地方委員・通信委員の役割

1836年、歴史家オーギュスタン・ティエリ (1795-1856) を編者に迎えて、未刊行史料集成事業の一つである『第三身分の歴史についての未刊行記念物集成』の編纂が始まり、全国での史料収集も開始された<sup>18</sup>。ティエリは公教育大臣を介して全国の通信委員へ宛てて個別に手紙を出し、史料調査を行なう場所や収集すべき史料の内容を具体的に指示する形で、史料収集を進めた<sup>19</sup>。通信委員は平均して数ヶ月後にはティエリへ返答している。通信委員制度が極めて効率的に機能した例である。

だがティエリのように、編者自身が個々の通信委員に対して、調査場所や収集項目を具体的に発注するケースは例外的で、他の未刊行史料集成事業では、こうした点は通信委員各自の判断に委ねられる場合が多かった。通信委員は、収集すべき史料の種類や、報告に記載すべき事項（史料の日付、題、判型、要旨等）、綴字法などの史料収集方法を大臣通達で指示された他<sup>20</sup>、史料収集の手引書をたびたび与えられた。こうした手引は、建築、考古学、宗教音楽、文献学、歴史学等の各分野を専門とする正委員や地方委員が筆を執り、それぞれの初歩的知識を解説したもので、委員会総会で正委員達の承認を得た上で全国の通信委員等へ頒布された<sup>21</sup>。前章で見た民謡収集のための『手引』も、こうした手引書の一つである。地方委員や通信委員は、通達や手引書の指示に従うか、あるいは一問一答式の質問表に回答する形で、歴史研究委員会の主導する史料調査に協力した。だが必ずしも全員がパリの本部から出る指示の通りに活動するとは限らなかった。例えばフォルトゥール調査の場合、調査が実施された1852年から1857年までの5年の間に民謡報告を提出したのは、通信委員・地方委員計220名のうちの52名にしか過ぎない<sup>22</sup>。フォルトゥール

<sup>18</sup> Augustin THIERRY, *Recueil des monuments inédits de l'histoire du tiers état*, 4 tomes, Paris, Typographie de Firmin Didot Frères, Imprimeurs de l'Institut de France (t. 1-3), Imprimerie impériale (t. 4), 1850-1870. 1856年に編者ティエリが死亡したため、1870年に第1部第4巻を刊行したのを最後に、計画の途中で終了した。都市、教区、同業組合に関係する証書や王令などがまとめられている。

<sup>19</sup> まず通信委員が近隣の図書館や文書館の史料所在状況について報告し、これを受けたティエリが、転写すべき史料を指定するという手順を踏んだケースが多い。AN, F17/3265.

<sup>20</sup> 1834年12月（日付不詳）通達, C. II, pp. 22-27 (esp. pp. 26-27). これ以降にも史料収集に関する指示を出す通達が出ている。自然科学・文学・哲学分野に関するギゾー公教育大臣の1835年5月15日通達（C. II, pp. 28-37）、サルヴァンディー公教育大臣の1839年（日付不詳）の通達（C. II, pp. 94-96）。

<sup>21</sup> 手引書は分野別に小冊子の形をとり、通信委員に配布された。CHARMES, *Le Comité...*, t. IIIにこうした数々の手引書が収録されている。

<sup>22</sup> Anon (Secrétaire du Comité?), « Correspondants. Résumé de leurs communications depuis 1852 », juillet 1855, AN, F17/2831. これに加え、民謡を報告している通信委員らの書簡や、公教育大臣側から通信委員らに出された返信（AN, F17/3245, F17/3246）も照合して算出した。

大臣は、民謡収集を歴史研究委員会の活動の最重点項目と位置付けたにも関わらず、4分の1程度のメンバーしか動員できなかったのである。民謡収集に協力しなかった委員の多くは、遺跡発掘結果の報告や、教会や町の歴史、歴史的建造物に関する報告といった、歴史学や考古学の分野で募集された他の事業に取組んだ<sup>23</sup>。つまり通信委員らは、各自の専門分野に応じて、歴史研究委員会で手がける複数の史料収集テーマの中から、自分が参加する事業を選択する自由を持っていたのである。それゆえに歴史研究委員会の事業の進捗状況は、通信委員らの関心の傾向や意欲に大きく依存するのが実態であった。

この通り、地方委員・通信委員は、編者や委員会首脳部からの指示を受けて近隣の文書館や図書館で史料収集を行う役割を担った。個別具体的に指示を受けて動くケースもあったが、多くは手引書等に則りつつ各自の裁量で史料収集が行なわれた。そして民謡収集の例のように、必ずしも全ての通信委員・地方委員が委員会首脳部に協力的とは限らなかった。ところで内務省管轄の歴史的建造物委員会でも通信委員の自立性が強く、多くの通信委員が総監督官の期待に沿う働きをしないことで問題となっていた。このようになったのは、内務省の通信委員（しばしば公教育省の通信委員と重複していた）にとって歴史的建造物の保存は未経験であったため、彼らには知識やノウハウが不足していたことが要因の一つだとタンシュは指摘している<sup>24</sup>。総監督官のメリメはやがて通信委員への期待を捨て、信頼の置ける建築家や自らが直接現地に赴き、歴史的建造物の調査や保存のための折衝を行なう方向へと変更していく。では公教育省の歴史研究委員会の場合、公教育大臣はこうした状況にいかに対処したか。節を改めて検討する。

### 第3節 歴史研究委員会の展開

未刊行史料集成の進展を期して、歴代の公教育大臣は様々な措置を試みた。その一つは通信委員対策であり、もう一つは通信委員以外の地方学術団体会員との連携である。まず通信委員対策について見ると、以下の三点がある。第一は、委員会紀要の無償配布の停止である。1840年のヴィルマン大臣の通達では通信委員達に対し、頻繁に報告を送るよう注意を促すにとどめたが<sup>25</sup>、第二共和政期のファルー大臣は、従来は歴史研究委員会の全構

---

<sup>23</sup> Ibid.

<sup>24</sup> TANCHOUX, « Heurs et malheurs... », p. 40 et s.

<sup>25</sup> 1840年12月31日通達, C. II, pp. 98-101.

成員へ無償配布していた委員会紀要を、今後は顕著な業績をあげた通信委員に限り配布すると決定した<sup>26</sup>。委員達は直ちにこの措置への修正を迫り、結果、紀要の無償配布停止は、過去2年間に一度も報告を提出しなかった通信委員への一種の罰則として適用されることに変更された<sup>27</sup>。第二は、表彰制度の創設である。通信委員の全報告の中から、正委員達が最優秀賞を毎年選定し、受賞者と選外佳作とを紀要で発表することで、通信委員の士気高揚を図った。名誉を得られるのみで、メダルや賞金の授与はない<sup>28</sup>。第三は、通信委員の除名規定の導入である。歴史研究委員会の発足以来、通信委員は増員し続けたが、その多くはごくまれにしか報告を提出してこなかった。この状況を鑑みて、1851年、ジロー公教育大臣は「公教育省の歴史研究の為の通信委員という肩書は、自尊心をひけらかすための不毛な肩書となるべきでなく、委員会の研究に対し現実的かつ有益な成果をもたらさなくてはならない」と述べている。そして、5年間報告を行なわなかった通信委員は資格を喪失すること、ならびに大臣が毎年年頭に通信委員の働きを審査してリストを見直すことを定めた。なお地方委員には、資格剥奪の規定は適用されなかった<sup>29</sup>。だが1851年12月のルイ・ナポレオンのクーデタ後、ジローの後継に着任したフォルトゥール大臣は、翌1852年に委員会を改組して以来、1856年年頭に秘書の指摘を受けるまで通信委員リストの見直しを行わず、この規定を一時形骸化させた<sup>30</sup>。次のルーラン公教育大臣はこの規定を遵守し、著名な研究者であっても例外なく除名処分を下した。例えばボルドー大学教授のフランシスク・ミシェルは、歴史研究委員会の正委員や地方委員を歴任し、未刊行史料集成の一環で『ノルマンディー公年代記』を大英博物館所蔵の手稿に基づき編纂するなどして、歴史研究委員会の事業に貢献してきた<sup>31</sup>。だがルーランが公教育大臣に着任した当時、委員会首脳部から命じられたスペインでの史料調査を実行しないなど、ミシェルは報告を提出しない状態を続けていた。このため、通信委員の資格剥奪が1858年年頭に通知

<sup>26</sup> 1849年1月8日省令、1849年1月15日通達, *C. II*, pp. 132-134.

<sup>27</sup> 1849年3月3日省令、1849年3月27日通達, *C. II*, p. 141. だが翌年には、ド・パリウー公教育大臣が全通信委員への紀要の無償配布を再び停止する（1850年3月8日省令, *C. II*, p. 145）。

<sup>28</sup> 1851年7月31日省令, *C. II*, pp. 150-151.

<sup>29</sup> 1851年4月7日省令, *C. II*, pp. 148-150. これに先行する1851年1月23日省令では「2年間何も報告のなかった全ての通信委員は責任放棄したと見なして交替させる」としていたが、4月7日省令以降は5年間という規定が定着する。

<sup>30</sup> Anon (Secrétaire du Comité), « Note pour Monsieur le Ministre », 26 janvier 1856, AN, F17/2811.

<sup>31</sup> SALVANDY, « Rapport au Roi sur l'état des travaux exécutés de 1835 à 1847 pour le recueil des documents inédits relatifs à l'histoire de France », 15 avril 1847, *C. II*, p. 112.

される。ミシェルは大学区長を通じてこの決定の撤回を要求し、オックスフォード大学に依頼された出版事業のために近タイギリスへ赴く予定があるため、そこで集めた史料を委員会に送ると申し出た。ボルドー大学区長もミシェルを擁護して、ミシェルの除名は不適切であると述べると共に、この除名の件が何名もの著名な委員達や有力者達の異議申し立てを引き起こすだろうと、大臣に訴えている<sup>32</sup>。ルーラン大臣は、通信委員ばかりでなく、歴史研究委員会の頂点を成す正委員に対しても改革を行なった。正委員の中には、歴史研究委員会の活動に関わる余裕のないほど多忙な有力者や政治家も含まれてきた。こうした、正委員の肩書きを名誉の証としてしか見なしていない者を斥け、熱心に働く人材に置き換えるのが望ましいとして<sup>33</sup>、ルーラン大臣は、1858年の委員会改編時に名誉委員 *membre honoraire* という地位を新設した。名誉委員は例会に参加可能だが議決権がなく、地方委員と同列の権限にとどまる。このように、ルーラン大臣は成果を重視しながら歴史研究委員会の構成員を人選していくと共に、助成金に関する規定も改訂し<sup>34</sup>、未刊行史料集成の能率向上を図った。

他方、フォルトゥール大臣は「歴史研究に身を投じている、帝国の様々な場所に住む全ての人々の協力なしには未刊行史料集成は完成しない」と考えた。もはや通信委員のみに頼らず、全国の地方学術団体会員を歴史研究委員会の「補充要員 *auxiliaires*」と新たに位置付け、史料収集に動員する方針を打ち出したのである<sup>35</sup>。もともとギゾーも、公教育省が地方学術団体と「頻繁かつ定期的」な交流を持つことを計画していた。歴史研究委員会が全国の地方学術団体の間を取り持って、研究成果などの情報を他の団体と共有できるよ

---

<sup>32</sup> 1858年4月24日、ボルドー大学区長から公教育大臣への書簡。AN, F17/2811. ミシェルは1862年11月に、イギリスでの史料調査結果を公教育大臣に報告する書簡を記している。AN, F17/2834. ミシェルは結局、除名処分の規定がない地方委員のポストに戻された。« Arrêté du 26 août 1858 », *Journal général de l'instruction publique*, Vol. 27, N°74, 15 septembre 1858, AN, F17/17130.

<sup>33</sup> Anon, « Rapport confidentiel à Monsieur le Ministre de l'Instruction publique », s. d. (文面から推定すると1857年1月27日～1858年2月22日の間), AN, F17/17130.

<sup>34</sup> 未刊行史料集成のシリーズとして刊行される著作の編者は、完成稿の提出期限より少なくとも半年前には、正委員の賛同を得た完成稿の写しを大臣の元へ届けることと定められた。期限を守らないと、一括前払いされた助成金（1巻当り上限4000フラン）を全額返還しなくてはならない。原稿の提出期日厳守を促す措置である。1857年1月26日省令, C. II, pp. 178-179.

<sup>35</sup> 1856年2月10日通達, C. II, pp. 169-171. これに先立ってフォルトゥールは、大学区長を介して初等視学官や小学教師も民謡収集に動員している（1852年9月17日通達, C. II, pp. 157-159 ; 1853年12月5日通達, C. II, pp. 162-164）。



うにするためである<sup>36</sup>。ギゾーの後に就任した公教育大臣の多くが、地方学術団体に対しては助成金交付以外の支援策を取らなかった中、サルヴァンディー、フォルトゥール、ルーランという3名の公教育大臣の施策により、歴史研究委員会は全国の地方学術団体の中核としての役割を担う組織へと徐々に変化していく。まず、サルヴァンディー大臣が二度の任期中に他省庁と粘り強く折衝し、1847年、地方学術団体同士が出版物を交換する際の郵便料金を免除することに成功する<sup>37</sup>。フォルトゥールは、地方学術団体会員の優れた研究を紹介する雑誌の創刊を推進した。その準備作業として、各団体会長に対して紀要類を定期的に公教育大臣へ届けるよう命じ（1854年）<sup>38</sup>、地方学術団体の刊行物を委員会の月例総会で書評する試みを創設する（1856年）。この書評会を通じて、正委員が地方学術団体の研究動向を把握し、未刊行史料集成事業の進展に役立てると共に、地方学術団体会員にとっては自らの研究が正委員から評価されることで励みを得る機会となる、とフォルトゥールは言う<sup>39</sup>。『地方学術団体雑誌 *Revue des Sociétés savantes*』はフォルトゥール没後の1857年に創刊される。その翌年の1858年、ルーラン大臣が委員会を「歴史研究および地方学術団体委員会」と改称して、地方学術団体会長に歴史研究委員会例会への出席を許可したり、委員会に優秀な報告を提出した地方学術団体会員ならびにその所属団体を報奨する制度（賞金総額1500フラン）を創設したりと、歴史研究委員会と地方学術団体との交流を促す政策を立てた<sup>40</sup>。このように1850年代後半以降、歴史研究委員会は、地方委員や通信委員だけでなく、多くの地方学術団体会員とも関係の構築を進めていった。

こうした方針が新たに取られた理由として、未刊行史料集成に動員可能な新規人員を確保するという目的の他に、政治的な意図も込められていた可能性にも言及しなければならない。フォルトゥール大臣は1856年に大学区を再編する際、「地方学術団体は、政府の許可なしには存在しえないにも関わらず、独自の活動を自立的に行なっています。彼らが研究内容を自由に選択し、研究の方向性を自由に決定することを放任する訳にはいきませ

---

<sup>36</sup> この時ギゾーは「私には地方学術団体の自由や個性を侵害する意図もなければ、地方学術団体に何らかの統括的な組織への参加を強いる意図も、あるいは何らかの支配的な思想を押し付ける意図もない」とも述べ、助成金の交付と引き換えに政府が地方学術団体の運営に介入することはないと強調している。1834年7月23日通達, *C. II*, pp. 8-11.

<sup>37</sup> 1847年5月16日王令, *C. II*, pp. 128-129. cf. 1838年7月5日・1847年3月19日・1847年7月25日の各通達と、1847年3月3日の財務大臣の決定。

<sup>38</sup> 1854年3月16日省令, *C. II*, pp. 164-165.

<sup>39</sup> 1856年1月31日省令, *C. II*, p. 169.

<sup>40</sup> 1858年2月22日省令第9条・第16条, *C. II*, pp. 185-186. cf. 1860年1月25日省令, *C. II*, p. 206.



ん」と述べて、通信委員や地方学術団体の研究内容の監視を大学区長の職責の一つに加えた<sup>41</sup>。ルーラン大臣も大学区長や大学教授に対し、『地方学術団体雑誌』の編集に加わって地方学術団体の研究を指導するよう命じている<sup>42</sup>。また、ルーラン大臣宛てに記された一通の機密報告には、七月王政期に歴史研究委員会が設立された背景として、「政府を不安に陥れる恐れのない真面目な研究を奨励」することで「急進的な新聞の新規会員数を減少させ」、社会問題をめぐる「熱烈で危険な」議論を「根絶」する狙いがあった、という記述がある。続けて、未刊行史料集成という「豊かな学識を必要とする穏健な調査」に専念させることで、「パリでは、数名の作家達を貧困問題への関心から免れさせ、政治的活動から引き離す」ことに成功し、地方でも、「執筆活動を行なって名声を得たいと欲し、その欲望を満たすために動き回り続け、飽くことなく〔名声を得ることを〕求め続ける者達」に「糧」を提供したと指摘されている<sup>43</sup>。つまり、未刊行史料集成事業はそもそも、反体制的活動を予防する手段として始まったと説明されているのである。この報告は署名の部分に破り取られているため筆者不詳である上、情報の典拠も不明であることから、書かれていることをそのまま事実として受け取ることは慎重でなければならない。だがこの報告が記された時期、つまり、歴史研究委員会を「歴史研究および地方学術団体委員会」として再編する1858年2月22日省令の準備期間に、未刊行史料集成を反体制的活動の予防策と捉える認識が、公教育大臣の周辺に存在したことの証左として読むことはできる。1858年の改組における、歴史研究委員会と地方学術団体との連携強化の意味について、第二帝政下の政治的文脈を考慮して考察する必要があるだろう。だがこの点については、本稿の趣旨から離れてしまうので稿を改めて論じたい。

最後に、この後の歴史研究委員会の展開について一言触れておく。1871年12月、大学区長達に宛てた通達でジュール・シモン公教育大臣は、戦争等の為に中断されていた歴史研究委員会の活動を再開させるにあたり、「国家が知的事業に介入することは微妙な問題である」と述べている。そして、学問の発展のためには研究者自身の選択に任せるべきだとして、政府（歴史研究委員会）が通信委員らに対し、収集すべき史料や研究テーマを指定することを完全に中止すると表明する<sup>44</sup>。史料収集という行為は、この時、国家が担うべ

<sup>41</sup> 1856年1月10日通達, *C. II*, pp. 165-168.

<sup>42</sup> 1857年5月30日通達, *C. II*, pp. 181-184.

<sup>43</sup> Anon, « Rapport confidentiel... », F17/17130.

<sup>44</sup> 1871年12月（日付不詳）通達, *C. II*, p. 246.

き文化遺産保存の領域から外された。これ以降、歴史研究委員会の存在理由はもはや未刊行史料集成事業には置かれず、委員会は地方学術団体の振興を活動目的とする組織へと生まれ変わっていく。

## 章括

本章は、地方学術団体および地方在住の委員と歴史研究委員会との関係を、未刊行史料集成事業に着目して考察するものであった。近年発表されたジェルソンの研究は、19世紀フランスで政府が中央集権的・強権的に文化政策を推進したとする歴史像を、批判的に検討した。本章ではこの問題意識を共有しつつも、ジェルソンが言説分析に重きを置いたのに対し、歴史研究委員会の活動内容や制度改変の経緯を一次史料に基づいて検討した。その結果、ジェルソンの提示した見取図を具体的な事例に即して改めて確認できたほか、歴史研究委員会の性格を以下のように明らかにすることができた。公教育大臣は県知事や大学区長の協力を得て、地方学術団体会員の中から適任者を選抜し、地方在住の歴史研究委員会メンバー（地方委員・通信委員）を任命した。彼らは歴史研究委員会で実施された未刊行史料集成事業に参加し、図書館や文書館で史料収集にあたった。個々の通信委員等へ個別具体的に調査場所や項目が指示される場合もあったが、多くは大臣通達や歴史研究委員会の正委員等が作成する手引という形で史料収集方法が示された。地方在住の委員達はこうした手引に基づいて活動することになっていたが、実際には各委員に委ねられた裁量の余地が大きく、たとえ大臣が最重点項目として推進した事業であっても、地方委員や通信委員達は、自らの専門領域や関心に合致しない史料収集事業には協力しなかった。歴代の公教育大臣達は事業の能率向上のために、怠惰な通信委員を除籍するなどして既存の委員会組織の活性化を図ったほか、地方学術団体会員を歴史研究委員会の「補充要員」と位置づけて、地方委員や通信委員以外にも調査網の裾野を拡大させた。こうした改革は1850年頃から始まった。

公教育省の全国調査組織は、最終的に地方学術団体との連携を構築する方向で整備されていった点に特徴がある。これは、通信委員達の自立性の強さゆえに、未刊行史料集成が必ずしも常に順調に進まなかったことへの対策として採られた道であった。シャルムや地方学術団体研究が指摘したような、強権的・中央集権的な歴史研究委員会が地方学術団体を掌握するというイメージは、19世紀後半に関しては該当する部分も確かにある。だが

1850年代頃までは、公教育大臣や歴史研究委員会の本部（パリの正委員達）は地方在住の委員達に対して拘束力を持たず、むしろ地方在住の委員達の関心や意欲の所在こそが、未刊行史料集成の進捗を決定づけたということは看過すべきでない。19世紀前半の歴史研究委員会は、地方学術団体を管理するための組織ではなく、未刊行史料集成という共同研究を行なう全国の研究者同士のネットワークと見る方が、活動実態を適切に表している。

では、政府の史料収集に参加するというのが、地方在住の委員達にとって持った意味を、次章で明らかにしていこう。

## 第3章

### 民謡収集とアイデンティティの形成 —フランス・フランドル地方の研究者達に見る

本章では、地方在住の研究者がフォルトゥール調査でいかなる活動を見せたかを検証する。第1節では19世紀中葉のフランス・フランドル地方の言語的状况を中心に把握する。第2節は、フォルトゥール調査の概要を押さえた上で、フラマン語圏を含む地域における同調査への協力者達について述べる。第3節で、歴史研究委員会の地方委員・通信委員の中から比較可能な二名（ルイ・ド・ベッケルとエドモン・ド・クスマケル）を抽出し、彼らがそれぞれに共有していた主張を分析するとともに、彼らの国家観、およびフランスと地元地域との関係についての彼らの認識を明らかにする。第4節と第5節では、ベッケル、クスマケル両名の民謡収集を、相違点に注目しながら比較する。同一言語圏の中で異なる方針が存在していたということと、国境地域の地域的アイデンティティの構築過程の特徴とを明らかにしていく。

#### 第1節 フランス・フランドル地方の概観

まずこの節では、フランス・フランドル地方について理解することから始める。フランドル地方の一部がフランス領となるまでの経緯を一瞥したのち、19世紀半ばの時点でのこの地域の人々の言語の使用状況について考察する。

##### (1) フランス・フランドル地方の歴史的概観

北フランスの一部を占めるフランス・フランドル地方は、中世にはフランドル伯領であった。13世紀、ブーヴィーヌの戦いでフランドル伯がフランス王に敗北した後、フランドル伯領に対するフランス王の支配が強まる。14世紀、フランドル伯の相続人マルグリートとブルゴーニュ公フィリップ豪胆公の婚姻を経て、フランドル伯領は独立を失い、ブルゴーニュ公の統治下に入る（1384年）。15世紀、マリ・ド・ブルゴーニュと神聖ローマ皇帝マクシミリアンとの間に生まれたフィリップ端麗公がフランドル伯の相続人となったことで、フランドル伯領はハプスブルク家に継承されることとなる。ハプスブルク家支配下となったフランドル伯領の一部が、最終的にフランス領に帰属することとなった要因は、

17世紀のルイ14世の領土拡張戦略である。ルイ14世は、フランドル地方の主要な輸出品である毛織物に高い関税を課して経済的打撃を与えると共に、1667年5月にはスペイン領ネーデルラントの領有権を主張して、フランドルに侵攻した。翌1668年、アーヘン（エクス・ラ・シャペル）の和約がスペインとの間で締結するが、この時、フランスが占領していた領土のうち、フランシュ＝コンテ地方はスペインに返還されたものの、アルトワ地方およびフランドル地方南西部は返還されず、フランスに割譲される形となった<sup>1</sup>。

## (2)19世紀中葉における「フラマン語圏」の言語状況

フランス・フランドル地方とフラマン語圏とは必ずしも一致しない。かつてのフランドル伯領で17世紀にフランス領となった地域（フランス・フランドル地方）の中でも、一部地域ではフランス語の浸透に伴って、フラマン語が廃れていったからである。ベッケルやクスマケルは、フラマン語の衰退が加速しているのではないかと危機感を抱いていた<sup>2</sup>。その背景には、産業化や鉄道敷設に伴って、フラマン語圏を含むノール県内で人の移動が増加していた現実がある<sup>3</sup>。ベッケルは、19世紀半ばの時点で、フランス国内のフラマン語話者数を約20万人と見積もっている<sup>4</sup>。フランスの人口約3600万人の内、ドイツ語（話者数約116万人）、ブルターニュ語（話者数約107万人）に比べると、フラマン語圏の人口は実に小規模である<sup>5</sup>。

クスマケルとベッケルとが設立した地方学術団体「フランス・フラマン委員会 Comité Flamand de France」（1853年に創設され現存している）では、フラマン語を衰退から守る

---

<sup>1</sup> 齊藤綱子、佐藤弘幸ほか「IIベネルクス」、森田安一編『新版世界各国史14スイス・ベネルクス史』所収、山川出版社、1998年（特に196, 260, 350頁）。堀内一徳「フランドル伯領」、前川貞次郎「フランドル戦争（帰属戦争）」京大西洋史辞典編纂会編『新編西洋史辞典 改訂増補』東京創元社、2000年（改訂増補第5刷）。

<sup>2</sup> Charles-Edmond-Henri de COUSSEMAKER, *Délimitation du Flamand et du Français dans le Nord de la France : avec une carte coloriée par M. Bocave : Extrait des Annales du Comité Flamand de France, tome III*, Dunkerque, Typographie Benjamin Kien, 1857.

<sup>3</sup> 18世紀にヴァランシエンヌ付近で石炭の鉱脈が発見され、産業革命を経てノール県は石炭の一大産地として繁栄した。19世紀前半の50年間に、ノール県およびパ＝ド＝カレ県では、都市部を中心に人口が10万人程度増加した。パリ～リール間の鉄道開通は1846年。Pierre PIERRARD, *La vie quotidienne dans le Nord au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Hachette, 1976 ; PIERRARD, *Histoire du Nord*, Paris, Hachette, 1978 ; 1992.

<sup>4</sup> ベッケルが1851年1月1日の法令（*Bulletin des lois de 1852*, n°533に所収）に所載の情報に依拠して算出した数字。Louis de BAECKER, *Grammaire comparée des langues de la France : Flamand, Allemand, Celto-breton, Basque, Provençal, Espagnol, Italien, Français comparés au Sanscrit*, Paris, Librairie Ch. Blériot, 1860, p. 54.

<sup>5</sup> フラマン語と同程度の人口規模をフランス国内に持つ地方言語の例として、ベッケルは、カタルーニャ語（国内話者数約10万人）、バスク語（約16万人）、イタリア語（約20万人）を挙げている。Ibid.



対策を講じるためにも、まずは現状把握が必要と考えた。そこで、フランス・フランドル地方での言語の使用状況をコミューン単位で詳細に把握し、現状の言語境界線を確定するべく、フランス・フランドル地方の言語調査を行なった（1853年以後1857年以前。正確な年代は不詳）。既に1845年にも別の地方学術団体「ノール県歴史委員会」が同様の言語調査を実施していたが、クスマケルらの目には、この時の調査は不十分な結果しか得られていないように映った。というのも、ノール県歴史委員会は質問表を市町村長にしか送付しなかったからである。クスマケルはこの調査方法を批判して、確かにその土地で最も優秀な人物は首長なのだろうが、民衆の使用する言語に関して彼らが正確な情報を把握しているかどうかは疑わしいと述べている<sup>6</sup>。フランス・フラマン委員会では、日頃からあらゆる階層の人間に接する機会のある人物こそが民衆の用いる言語の状況を熟知しているはずだと考え、聖職者や小学校教師に尋ねることが最善と判断した。調査地点は、ノール県北部のダンケルク郡とアーゼブルック郡、そしてノール県の西に隣接するパ＝ド＝カレ県サントメール郡である。人々が会話に用いる言語を筆頭に、説教、教理問答、結婚の告示、祈禱書およびその他の読書等、主に教会を舞台として想定される具体的な局面ごとに、人々がフランス語・フラマン語のいずれの言語を用いるか、双方共に用いる場合にはいかなる割合でどちらの言語が優勢かを報告させた<sup>7</sup>。

クスマケルらが202通の回答を分析した結果【資料2】、パ＝ド＝カレ県に接するグラヴリーヌとサン＝ジョルジュという2つのコミューンや、ノール県南部に接する8つのコミューンではフランス語しか用いられていなかったが、ベルギーに隣接するコミューンではフランス語を全く使わずにフラマン語だけが話されていることを確認できた。こうしたフランス語のみを用いる地域とフラマン語のみを用いる地域とに挟まれた、中間地帯にあるコミューンではフランス語もフラマン語も話せる人が多いが、フラマン語で主に会話すると答えたコミューンが多数を占めた<sup>8</sup>。現代のフラマン語圏はダンケルク郡とほぼ一致しているが、19世紀半ばの時点ではそれよりもやや広域で、パ＝ド＝カレ県の一部にも広がっていた。両言語を併用する地域では、読書に用いる言語に関して、フラマン語の本

---

<sup>6</sup> COUSSEMAKER, *Délimitation....*, p. 5.

<sup>7</sup> 質問表は、Ibid., pp. 5-6 に掲載。

<sup>8</sup> Ibid., p. 19.

<sup>9</sup> ダンケルク郡の人口約35万人のうち、フラマン語の話者数は4~10万人と推定（1984年時点）。前出ジオルダン所収「フラマン語」109-123頁。

を用いるのは年配者、フランス語の本を用いるのは若年者という具合に、年代別に傾向が分かれた<sup>10</sup>。

フランス・フラマン委員会の調査結果を相対化するために、1860年代にデュリュイ公教育大臣の時に行なわれた、全国言語調査の結果を簡単に見ておく<sup>11</sup>。この調査はフランス語教育の《浸透》の成果を把握する目的で実施されたものである。従って、地方言語の存続状況が過小評価されている可能性も念頭に置きつつ、この史料に臨むべきであろう。各県内で使用されるフランス語以外の言語は一括して「俚言 patois」と表記されている。ノール県ではフラマン語以外にもワロン語、リール語等の「俚言」が話されているため、残念なことに、フラマン語圏のデータだけをこの調査から拾い上げることはできない。ノール県では、660のコミューンのうち83のコミューンで、フランス語が全く話されていない。南仏の複数の県で、県内のどのコミューンでも一切フランス語が話されていないという回答が出ているのに比べると、ノール県でフランス語が会話に用いられる割合は相対的に高い。だが学校教育については、教育現場から「方言」を完全に排除している県が大半の中、小学校の授業でフランス語と共に「方言」を用いて教える（「方言」自体の教育ではないことに注意）と答えた教師のいる小学校が、ノール県内全1491校中146校と約1割存在し、また、フランス語での会話も読み書きもできない就学児・未就学児の存在も比較的顕著である<sup>12</sup>。フランス・フラマン委員会の憂慮をよそに、ノール県の初等教育現場では、他県と比較すると、依然として「方言」が堅持され続けていたのである。こうした言語的状况の中、フォルトゥール調査が行なわれた。

## 第2節 フラマン語圏におけるフォルトゥール調査

### (1)ノール県、パ＝ド＝カレ県でのフォルトゥール調査への協力者達

フラマン語圏を含むノール県とパ＝ド＝カレ県では、公教育省歴史研究委員会の地方在住の委員である地方委員・通信委員のポストに、1852年のフォルトゥール調査開始時の時点で、14名の研究者達が任命された。このうち、民謡収集に協力したことを史料上で確認

<sup>10</sup> 以上の調査結果はCOUSSEMAKER, *Délimitation*....

<sup>11</sup> AN, F17\*/3160 : Statistique de l'enseignement primaire sous le ministère Duruy [Entre 1863 et 1869] : ch. 8, idiomes et patois.

<sup>12</sup> 7才から13才の就学児・未就学児156703名のうち3800名が、フランス語での会話・読み書きともに不可。ノール県に隣接するパ＝ド＝カレ県では0名。AN, F17\*/3160.

できた者は5名（その内で、フラマン語圏の研究者はクスマケルとベッケルのみ）であり、それ以外の地方委員や通信委員は、民謡以外の史料集成や歴史的建造物に関する調査といった、歴史研究委員会で実施していた他の事業に専念していた<sup>13</sup>。わずか5名ではあったが、彼らは非常に熱心に民謡収集に取り組んだ。ノール県大学区長は県内のフォルトゥール調査の実施状況を報告して、「フラマン語が支配的なダンケルク郡とアーゼブルック郡につきましては、ダンケルク競争協会 *la société d'émulation de Dunkerque* や<sup>14</sup>、学士院通信委員であられるベッケル氏が民謡を収集し尽くしてしまったため、初等視学官が歌を拾う余地が一切残っておりません」と述べている<sup>15</sup>。ダンケルク競争協会以外の団体でも民謡が収集された。例えばフランス・フラマン委員会では、会長のクスマケルが次のように会員達に呼びかけている<sup>16</sup>。

「悲歌、物語詩、哀歌、子守歌や子どもの歌、短い昔話、そしてこの地（くに）*pays* に特有の慣習に関するあらゆるものを送って下さい。こうした歌や物語は、しばしば古代の歌や物語と同じくらい興味深い伝統を宿しています。急いで集めましょう。なぜならこれらは消えつつあるからです。」

こうした呼びかけに応え、会員達は古い文献などから歌を集めた。ノール県の研究者達の中で最も民謡収集への熱意に満ち、地元の地方学術団体で呼びかけるなどしてフラマン語圏での民謡収集の隆盛を牽引したのが、他ならぬクスマケルとベッケルという二名だった。彼らがフォルトゥール調査のために残した記述の量は、ノール県およびパ＝ド＝カレ県の他の地方委員・通信委員のそれを圧倒的に凌駕している。こうした点を鑑みて、本稿の分析の対象はクスマケルとベッケルに限定する。

---

<sup>13</sup> Anon (Secrétaire du Comité?), « Correspondants. Résumé de leurs communications depuis 1852 », juillet 1855, AN, F17/2831. 地方委員・通信委員の報告、大臣側から地方委員・通信委員への返答 (AN, F17/3245, F17/3246) も参照した。

<sup>14</sup> ベッケルもクスマケルも所属していた地方学術団体。「競争 *émulation*」は会員同士の切磋琢磨の場というほどの意味で、地方学術団体名としてしばしば用いられた語。

<sup>15</sup> 1854年6月17日、ノール県大学区長から公教育大臣への報告。AN, F17/3245. フォルトゥール調査では、歴史研究委員会の構成員である地方委員・通信委員の他にも、大学区長以下、初等視学官、小学校教師も民謡調査に動員された（第4章で詳述）。

<sup>16</sup> *Annales du Comité Flamand de France : 1853, Dunkerque, Mme Thery et les autres libraires, 1854, p. 10.*

## (2)エドモン・ド・クスマケル

エドモン・ド・クスマケル(1805-1876)は、弁護士(のち判事に転じる)を本業とする傍ら、地方学術団体に所属して研究活動を行なった。彼はダンケルク競争協会で会長を務めた他、フランス・フラマン委員会をベッケルと共同で設立し(1853年)、初代会長に就任する。またフランス学士院の通信会員、ベルギー王立アカデミーの客員会員等としても活躍し、所属団体は国内外で29を数える<sup>17</sup>。

研究者としてのクスマケルの最大の特徴は、音楽学に関する高度な専門知識を備えていたことにある。彼は幼児期より、歌い手としてもピアニストとしても卓越した才能を発揮したと伝えられている<sup>18</sup>。法学部の学生としてパリに渡り(1825-31年)、学業の傍ら、歌唱法や作曲法をフェリーチェ・ペツレグリーニ(1774-1832, 著名な歌手。1829年末より国立音楽学校教授)らのもとで本格的に学ぶ。学位取得後、法廷弁護士の職を得て帰郷したクスマケルは、ノール県の都市のドゥーエで対位法(作曲法の一つ)を学び、楽曲の作曲を始める<sup>19</sup>。音楽学者としてクスマケルは、グレゴリオ聖歌、中世の記譜法、中世音楽理論などを研究したほか、自ら発掘した中世の手稿譜を近代的記譜法に直して出版するなど、中世音楽を軸に研究活動を展開した。その業績は今日でもなお参照すべき内容を含み、クスマケルの名は、中世音楽研究の開拓者として音楽学史上に刻まれている<sup>20</sup>。1847年にクスマケルは、レジオン・ドヌール勲章の騎士章を受勲している<sup>21</sup>。

中世音楽の研究者であるクスマケルが民謡収集に身を投ずる契機となったのは、民謡の音楽的特徴が中世音楽と類似していたためである。実際、クスマケルは、フランス・フランドル地方の民謡の音階が、中世の聖歌の音階の一種と同一だと論じている。民謡の音楽的側面に強い興味を持った彼は、旋律の採譜に熱心に取り組んでいく(詳細は後述)。

---

<sup>17</sup> Danièle PISTONE, « Edmond de Coussemaker (1805-1876), Pionnier de la musicologie française », *Revue du Nord*, n°242, 1979, p. 610. 以下、クスマケルの伝記的情報は同論文と次註の文献とを主に参照した。

<sup>18</sup> Robert WANGERMÉE, « Coussemaker », in Stanley SADIE (ed.), *The New Grove Dictionary of Music and Musicians Second Edition*, vol. 6, London, Macmillan, 2001, pp. 614-615.

<sup>19</sup> クスマケルが作曲した作品のうち、数曲のロマンスや舞曲が出版された(筆者は未確認)。ほかに、劇曲、ミサ、その他の宗教曲といった未刊行の作品もある。WANGERMÉE, « Coussemaker ».

<sup>20</sup> 中世音楽は18世紀までは忘れられた存在と化していたが、19世紀半ば頃より、グレゴリオ聖歌の復興運動が起こるなどして再評価が進んだ。John A. EMERSON, Jane BELLINGHAM and David HILEY, « Plainchant », in SADIE (ed.), *The New Grove Dictionary of Music*, vol. 12, pp. 854-855.

<sup>21</sup> « de Coussemaker, Charles Edmond Henri », AN, LH/619/21. フランス文化省と国立古文書館とが運営する、レジオン・ドヌール受勲者データベースのLÉONORE (<http://www.culture.gouv.fr/documentation/leonore/leonore.htm>)で史料の画像を閲覧できる。



### (3)ルイ・ド・ベッケル

ルイ・ド・ベッケル(1814-1896)もクスマケルと同じように、治安判事や弁護士を生業としながら地方学術団体に所属して、郷土であるフランス・フランドル地方に関する研究を多方面で手がけた<sup>22</sup>。クスマケルと共同設立したフランス・フラマン委員会では、初代副会長を務めている。ベッケルは若い頃より地元ベルグ市の歴史に親しむうち、次第に証書や手稿史料を紐解いて郷土史の研究にのめり込むようになったと回顧している<sup>23</sup>。七月王政下の1842年、ベッケルは、開設されて間もない内務省歴史的建造物委員会のノール県通信委員(後にパ＝ド＝カレ県も兼任)に着任する。修復・保存すべき価値のある建造物の存在を調査し、現状の保存状況等を歴史的建造物監視官に報告することを任務とするポストである。そして1850年には、ノール県歴史的建造物監視官、および公教育省歴史研究委員会通信委員に任命される。内務省が管轄する歴史的建造物保存行政にも、公教育省が管轄する未刊行史料集成事業にも、ベッケルは大いに貢献したのである。1866年にベッケルは、レジオン・ドヌール勲章の騎士章を受勲した<sup>24</sup>。

ベッケルの報告した民謡は、3つの傾向に大別できる。第一に、フランス国内の他地域で収集された歌の、フラマン語版のヴァリエーションである。第二に、郷土史上のエピソードや叙事詩などを題材とする歴史伝承詩歌や、神話・伝説に取材した歌である。第三に、地元の祭の歌や子どもの遊び歌など、人々の慣習に根ざした歌である。ベッケルは、図書館や文書館で所蔵されている写本や文書類を紐解いて、すでに伝承が絶えてしまった古い民謡の記録を掘り起こしたのに加え、実際に歌われている民謡を聞き書きして記録に残す活動も行なった。音楽学の専門家であるクスマケルとは異なり、ベッケルは、旋律を採譜す

---

<sup>22</sup> 先行研究では、ベッケルの名への言及はあっても、彼の生涯に触れている文献が見当たらない。このためベッケルの伝記的情報については、以下の史料の中で、ベッケル自身が経歴を述べている箇所を主に参照した。1843年7月29日、ベッケルから公教育大臣への書簡(自著献本の挨拶、兼、歴史研究委員会通信委員に自薦する書簡)。1875年1月18日、ベッケルから公教育大臣への書簡(歴史的建造物の監視業務に対する助成金申請)、いずれもAN, F17/2838。ところでベッケルの姓の綴り方は、公教育省歴史研究委員会の刊行物やベッケル自身の著作等を見ると、Backer, Baëcker, Debaeckerなど複数の表記が並存し、統一されていない。本稿はベッケル自筆の表記に従いBaeckerとする。なおパ＝ド＝カレ県サントメールの民事裁判所では、ベッケルの姓をde Backerと綴るよう、1868年9月28日付で命令を出している(« Reconstitution des matricules des membres de la Légion d'honneur : de Backer », AN, LH/87/69)。1870年代に記されたベッケル自筆の署名を数点見たが、この命令通りの綴りに変更していた。

<sup>23</sup> BAECKER, *Recherches historiques sur la ville de Bergues, en Flandre*, Bruges, Vandecastelle-Werbrouck, 1849, pp. 5-6.

<sup>24</sup> « de Backer, Louis Benoit Désiré », AN, LH/87/69. 前出データベースLÉONOREで閲覧。



ることを必ずしも重視した訳ではなかったが、歌にまつわる民衆の慣習や「迷信」には強い興味を示し、詳細に記録した。

では次に、クスマケルとベッケルの所説について検討していく。

### 第3節 民族起源としての地域言語・地域文化—クスマケル、ベッケルの共通認識

#### (1) 地方言語とフランスとの関係

クスマケルとベッケルは共に、アンシアン・レジーム下の王権やフランス革命後の政府が行なってきたフランス語浸透策を、地方言語への抑圧と見なして非難した<sup>25</sup>。クスマケルは、権力と行政の中央集権化や法と機構の画一化の帰結として、「私達が生きている時代は、日々伝統が失われ、諸地方の特性 *caractère national* が消滅する時代である」と述べ、特にフランス・フランドル地方では伝承の断絶という危機が迫っているとして危惧を表明している<sup>26</sup>。またベッケルは、1621年のルイ13世の王令以来<sup>27</sup>、法廷等における地方言語の使用禁止令がたびたび出されてきた事例を列挙している<sup>28</sup>。そうした一連の措置にも関わらず、地方言語が使われ続けてきたことをベッケルは称揚して、「フランスという中央集権的政府のもとで、[...] 多様な固有語が存続しているのは興味深い現象」であ

<sup>25</sup> BAECKER, *Grammaire comparée...*, pp. 55-62 ; COUSSEMAKER, *Chants populaires des Flamands de France : recueillis et publiés avec les mélodies originales, une traduction française et des notes*, Gand, Imprimerie et lithographie de F. et E. Gyselynck, 1856, p. VII.

<sup>26</sup> COUSSEMAKER, *Chants populaires...*, p. IV.

<sup>27</sup> ポーに高等法院を新設する王令で、ベアルン語を用いて調書を作成することを禁じたもの。

<sup>28</sup> ①フラマン語禁止令：1684年12月のルイ14世の王令。フランス・フランドル地方の諸都市では、全ての弁護士・検察官・裁判官に対し、訴訟事件の口頭弁論、記録の筆記、判決の言い渡し、その他いずれの手続きでも、フランス語以外の使用を禁じる。違反した場合、審判等が無効となる。②アルザス語禁止令：1685年1月30日の国王諮問会議の裁定。アルザスでは、裁判所の審級や訴訟の民事・刑事の別を問わず、いかなる公証人・書記も、フランス語で書類を作成しなくてはならない。行政官、バイイ裁判所裁判官、公証人、書記、その他いずれも、いかなるドイツ語の書類も受け取ってはならない。違反した場合、審判等が無効となるとともに500リーヴルの罰金が課される。③カタルーニャ語禁止令：1700年2月のルイ14世の王令。ルシヨン、コンフラン、セルダーニュ（サルダーニャ）では、行政官・司法官および都市当局の議決、公証人の証書、ならびにあらゆる調書はフランス語を用いなくてはならず、違反した場合は無効となると定められた。だがこの王令の後も、ルシヨンの司祭達は口述遺言を筆記する際にカタルーニャ語を用い続けたため、半世紀後、口述の遺言をフランス語以外で筆記した場合は無効となると定めた法令が再度出されている（1754年3月24日法）。④フランス革命下の共和暦2年テルミドール2日、いずれの調書もフランス語以外の言語で記すことを禁じ、違反者には禁固6ヶ月の刑罰を課す法令が出された。アルザスの代議士はこの法の執行猶予を要求したが、コルシカを除く地域では猶予が認められなかった。BAECKER, *Grammaire comparée...*, pp. 55-56.

り、「ルイ14世がフランドル沿岸地方を侵略した時、フラマン語を根こぎにしてフランス語に取って代わらせようと欲したが、偉大なる王の意志は、未だ達成されていないのだ」と誇らしげに述べている<sup>29</sup>。

クスマケルとベッケルは同時代的な問題にも関心を持ち、初等教育で推進されつつあるフランス語の強制を批判した。本稿第1節で触れたフランス・フラマン委員会の言語調査の結果、事前に危惧していたほどにはフラマン語の衰退が進行していなかったことが分かってクスマケルは安堵した。だがその一方で、公立・私立ともにフラマン語の読み書きを初等教育で教えることが許可されない現状を考えると、数年のうちにフラマン語の読み書きができる人は稀になり、今後の世代はフランス語のみを読み書きに用いるようになるだろうと述べ、クスマケルは予測を述べている<sup>30</sup>。ベッケルは、フラマン語を母語とする子どもたちが途中で通学を止めてしまえば、フランス語もフラマン語も十分に習得しないままに終わる恐れがあると指摘する。教室でのフランス語の使用やフランス語教育を強制する初等教育を媒介にして、地方言語をフランス語に取って代わらせようとすることは、「われらが諸都市や農村の労働者階級の知的発展の害悪となる」とまで述べて<sup>31</sup>、ベッケルは政府の方針を厳しく批判した。クスマケルやベッケルが揃って要求する事柄は、初等教育でフランス語の読み書きと並行して、フラマン語の読み書きも教えること、ただこの一点のみである。子どもたちが母語であるフラマン語の読み書きを習得すれば、同じ語派である北方の諸言語の学習に役立つだけでなく、フランス語の会得にも役立つことが見込まれるため、フラマン語教育は実用的かつ有益なのだとクスマケルもベッケルも熱心に訴える<sup>32</sup>。地方言語の読み書きを子どもたちに教えることを許可するよう要求する声はフラマン語圏のみに限ったものではなく、アルザス語、プロヴァンス語、バスク語、カタルーニャ語についても、同様の主張が叫ばれているとベッケルは言う<sup>33</sup>。

---

<sup>29</sup> Ibid., pp. 55-57. フランドル沿岸地方は、ノール県の北半分のフラマン語圏を指す。

<sup>30</sup> COUSSEMAKER, *Chants populaires*..., p. VII ; Id., *Délimitation*....

<sup>31</sup> BAECKER, *Grammaire comparée*..., p. 57.

<sup>32</sup> Ibid. ; COUSSEMAKER, *Chants populaires*..., p. VII.

<sup>33</sup> BAECKER, *Grammaire comparée*..., pp. 58-61. ベッケルが引用しているのは、ド・ラン（アルザス語について）、マリ＝ラフォン（歴史研究委員会委員。プロヴァンス語について）、アルシュ（ジロンド県初等視学官でフォルトゥール調査に貢献。バスク語について）、ジョバール・ド・パサ（学士院通信委員。カタルーニャ語について）の主張である。

クスマケルやベッケルにとって、地方言語擁護を主張することと、フランスへの帰属意識を持つこととは、決して矛盾する事柄ではなかった。ベッケルの主張を聞こう。

「我々の父祖が話していた古き諸言語、つまり現代フランスを作った諸々の民族性の残滓を、尊重しようではないか。フラマン人、アルザス人、ロレーヌ人、ブルゴーニュ人、ブルターニュ人、ノルマン人、ピカル人、バスク人、プロヴァンス人、コルシカ人は、それぞれの地域の山々や平原の固有語を用いて、共通の祖国の榮譽を称え、歌って欲しい。だが彼らが祖国を愛して祖国のために身を尽くすための魂も心も、ただ一つしかないのだ<sup>34</sup>！」

ベッケルは、フランス国内の全ての地方言語が、ローマ人達によってガリアの地にラテン語がもたらされる以前、つまり「フランス語」が生まれる以前の「ガリア人達の前初の固有語」を受け継ぐことばだと考えた<sup>35</sup>。それぞれのことばがフランス（ガリア）の地での諸民族の興亡の歴史を象徴すると位置づけることで、ベッケルは、フランスという国が文化的多様性に彩られている事実を正当化しようとしたのである。フランス各地固有の言語や文化を保ちつつ、フランスとしての統一性を形成することを、彼は理想としていた。

1849年、2作目となる自著の冒頭で、ベッケルは次のように語る。

「再開発の今世紀、鉄道網が走るフランスでは、大西洋と地中海とを隔てる距離を、そしてピレネー山脈とライン川とを隔てる距離を、自分の息子達が稲妻のような素早さで横切っていくのをフランスは見ることであろう。その息子達は互いの習俗や考え方や言語を交換し、統一性の中に溶かし込んでいくであろう。そのようにしてただ一つの心と魂とを持った、ただ一つの国民 *peuple* が形作られていくのである<sup>36</sup>。」

クスマケルの方は、祖国フランスへの帰属意識とフランス・フランドル人としてのアイデンティティとの間に、一種の区別を設けた。

「フランス文学の傑作に直面し [...]、フランス史が他を押しよけるほどに偉大であることに直面すると、このうるわしい国家に属していることをわれわれは誇りに思うべきである。この国家の精髓は、ヨーロッパや世界中の文明を導く役目を果たすのである。だがこのうるわしい国 *pays* の中で、われわれには一つの家族がある。フランス全国の歴史の中で、われわれには固有の歴史がある。文明を伝える作品の中で、われわれ

---

<sup>34</sup> Ibid., p. 62.

<sup>35</sup> Ibid., pp. 40-62.

<sup>36</sup> BAECKER, *Recherches historiques sur la ville de Bergues...*, p. 6.

には固有の部分がある。われわれフランスのフランドル人達はフランス国民ではあるが、出自はフラマン人である。われわれは国民の〔国家の〕栄光の傍らで、気高い母の子どもたちであることに値するよう、われわれの家、われわれの家族、われわれの古き良きフランドルの名誉を輝かせることができるし、また、輝かせなければならないのである<sup>37</sup>。」

ベッケルもクスマケルも、フランスへの帰属意識を明らかに持っている。だが彼らは《フランス＝統一すべきナション》という考え方を斥け、言語や文学作品（特に民謡のような民衆の文学）、そして歴史に体现されるような諸地域の固有性を、擁護していく必要性を主張した。ベッケルとクスマケルの政治的傾向について突き止めることは現時点では史料上不可能だったが、彼らのように貴族出身者で地方学術団体に活躍していた他の人々の例から、王党派的な傾向を持っていた可能性が考えられる<sup>38</sup>。彼らの理想とする国家観、フランス観は、アンシアン・レジーム的なフランスのあり方に近いと言えるかもしれない。

## (2) フラマン語の民謡とフランスとの関係

ベッケルは、フランス諸地域の言語がフランスを作り上げた諸民族の興亡の歴史を体现すると考えていた。フラマン語に関して彼は、高地ドイツ語よりも起源が古く、原初の言語に最も近い言語の一つだと主張している<sup>39</sup>。そして、フラマン語はゲルマン民族の一部族であるチュートン人の言語を受け継いでおり、フラマン語で民衆が口承してきた詩歌（民謡）は、フランク人の詩歌をほぼ古代の形のままで維持している論じた<sup>40</sup>。18世紀から19世紀半ば頃にかけて、フランスの支配者層の祖先をフランク人と考える歴史観が広

---

<sup>37</sup> *Annales du Comité Flamand de France* : 1853, p.2. ベッケルも「地域住民の共同体は、大きな家族ではなかろうか？」と述べている。BAECKER, *Recherches historiques sur la ville de Bergues...*, p. 6.

<sup>38</sup> アルシス・ド・コーモンやラ・ヴィルマルケなど、同時代に地方学術団体や歴史研究委員会で活躍した貴族出身者達は、王党派的な政治傾向で知られる。Françoise BERCÉ, « Archisse de Caumont et les sociétés savantes », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. II : La Nation*, vol. 2, Paris, Gallimard, 1986, pp. 532-567. 梁川英俊「ブルターニュにおけるナショナリズムの誕生—『バルザズ・ブレイズ』以前のラヴィルマルケ（一）〜（四）」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』、第54-57号、2001-2003年。

<sup>39</sup> BAECKER, *De langue néerlandaise et des premiers monuments littéraires écrits en néerlandais : leçon d'ouverture du cours de littérature néerlandaise fait à Paris, dans la salle Gerson, annexe de la Sorbonne*, Paris, Ernest Thorin, Libraire-éditeur, 1868, pp. 6-10. 単語の比較等を根拠としている。

<sup>40</sup> Id. (recueillis par), *Chants historiques de la Flandre : 400-1650*, Lille, Ernest Vanackere, Libraire-éditeur, 1855, pp. V-XXV. この主張の典拠としてベッケルは、歴史研究委員会正委員であるポーラン・パリスの論を引用している (pp. XI-XII)。



まっていたことを考え合わせると<sup>41</sup>、フランク人の歌をフランス・フランドル地方の人々が継承しているというベッケルの主張は、フラマン語の民謡の文献学的価値を強調する作用を狙ったものと思われる。1851年、歴史研究委員会が「フランス語の起源に関わる全ての事柄を重要視している」ことを知ったベッケルは、委員会がロマンス語の未刊行史料の収集を奨励していることに対し、次のように提案している。

「しかしロマンス語と同時に、ガリアの特に北部では、フランク語あるいはチュートン語がカロリング朝の言語として話されていました。委員会ではチュートン語方言の文学の史料については、ロマンス語と同様の熱意を持って受け取ることはないのですか？われらが祖先フランク人達が歌っていた詩句を読むということは、興味深いことなのではないでしょうか？」と<sup>42</sup>。

もし委員会がチュートン語に興味を持つようであれば、フランスの言語の起源の一つであるフラマン語で記された興味深い作品を、迅速に翻訳します—ベッケルはこのように申し出てもある<sup>43</sup>。クスマケルは、以上のようなベッケルの見解を支持した。彼らは、フランス・フランドル地方の民謡がフランスの民族起源の一つを体現しているため、地元地域のみならず、フランスにとっても意味深い存在なのだと主張したのであった。

## 第4節 国境を越えて—ベッケルの民謡収集

### (I)国境を越えた連帯を求めて—「オランダ語」圏の一体性

フォルトゥール調査の開始から半月ほど経った1852年10月4日、ベッケルはフォルトゥール公教育大臣に宛てて、民謡収集をドイツ北部で実行したいと願い出る手紙を書い

---

<sup>41</sup> Krzysztof POMIAN, « Francs et Gaulois », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. III : Les France*, vol. 1, pp. 40-105. (クシシトフ・ポミアン「フランク人とガリア人」上垣豊訳、ピエール・ノラ編、谷川稔監訳『記憶の場Ⅰ対立』所収、岩波書店、2002年、59-125頁。)

<sup>42</sup> 1851年6月6日、ベッケルからクルゼイル公教育大臣宛の書簡。AN, F17/2838. 「われらが祖先ガリア人」という常套句（前註文献を参照）を意識した表現か。

<sup>43</sup> 1851年5月28日、ベッケルからクルゼイル公教育大臣への書簡。ベッケルが翻訳を考えていた作品名は具体的に明示されておらず、ただ「ベルギー人作家の作品」とだけ記されている。この作品の翻訳の為には、ジェナン Génin が著したローランの歌についての研究書を参照する必要があるが、貴重な書物で入手困難だとして、ベッケルは同書の貸出を依頼している。歴史研究委員会の図書室（後に「地方学術団体図書室」と改称）からの貸出を指すと推測される。AN, F17/2838.



た<sup>44</sup>。フォルトゥール調査の開始以前より地元で民謡収集を行なってきたベッケルは<sup>45</sup>、ウエストファーレンやハノーヴァーといったドイツの諸都市やベルギーで、フランス・フランドル地方と同じ民謡が歌われていることを知った。そこで、北海沿岸の住民達が国を隔てて共有している民謡を収集・比較して、その起源を探究するという研究計画をベッケルは立てた。そしてくだんの手紙では、この研究計画に対する助成金の交付を公教育大臣に申請したのである。公教育省には、国外での研究活動を助成する制度があった。ベッケルの研究計画は助成金の獲得には至らなかったものの、無給派遣 *mission gratuit* が認められた<sup>46</sup>。無給派遣とは、旅費等の助成金が下りない代わりに、派遣先の関係各所宛に、公教育大臣や外務大臣の推薦書が発給される便宜が図られるという措置である<sup>47</sup>。19世紀半ばの時点では、フランス国内でさえ文書館への入館には審査を経なくてはならなかったもので<sup>48</sup>、大臣達からの推薦状は、国外での学術調査を円滑に進める上で、今日のわれわれが想像する以上に重要な物だったのである<sup>49</sup>。

ベッケルの申請に対しては、1852年11月19日に無給派遣を決定する省令が出され<sup>50</sup>、1853年7月にベッケルはフォルトゥール大臣宛の調査報告書を提出している<sup>51</sup>。この報告書は、歴史研究委員会のパリでの月例会で高い評価を得て、フォルトゥール調査の成果をま

---

<sup>44</sup> AN, F17/2935A.

<sup>45</sup> フォルトゥール調査開始以前の1850年に出版された『フランスのフラマン人達』という著作の第2部で、「フラマン人の文学」として民謡を掲載している。BAECKER, *Les Flamands de France : Études sur leur langue, leur littérature et leurs monuments*, Gand, Imprimerie et lithographie de L. Hebbelynck, 1850.

<sup>46</sup> フォルトゥール大臣は「政府が出版を準備している民謡集に豊かな成果をもたらすような、かくも独特な派遣計画を貴殿に任せることができ、幸甚です。しかし残念ながら、こうした目的に適用できる資金が全くありません」と回答した。予算をすでに使い果たしたためという理由で、無給派遣の決定となったのだった（1852年10月28日、公教育大臣からベッケルへの書簡の写し）。AN, F17/2935A.

<sup>47</sup> ベッケルのドイツでの民謡収集にあたっては、外務大臣が1852年11月22日付の推薦状を発行し、公教育大臣を介して1852年12月13日にベッケル本人へ送付されたことが確認できる。AN, F17/2935A.

<sup>48</sup> 1856年の時点では、審査なしに国立古文書館で史料の閲覧が許可された身分は、公務員、学士院会員または学士院賞受賞者、博士、古文書学士（＝国立古文書学校の卒業生）、国立古文書学校学生のみに限られていた。Krzysztof POMIAN, « Patrimoine et identité nationale », *Le Débat*, n°159, mars-avril 2010, p. 51.

<sup>49</sup> ベッケルはこの研究助成申請の際、もしも公教育省の資金が潤沢でないならば、無給派遣の決定を甘んじて受け入れるから、とにかくドイツでの研究計画を実現したいとフォルトゥールに訴えた。ベッケルにとっては、国外での史料調査の為には金銭的な援助以上に、公教育大臣や外務大臣からの推薦書を得ることの方が重要だったのであろう。1852年10月4日、ベッケルから公教育大臣への書簡（前出）。AN, F17/2935A.

<sup>50</sup> 省令（N°4187）の写し。AN, F17/2935A.

<sup>51</sup> BAECKER, *Rapport à Monsieur le Ministre sur l'origine commune des chansons populaires du Nord de la France avec celles de l'Allemagne* (ms.). 1853年7月12日提出。AN, F17/2935A.

とめて編纂される予定の民謡集に収録されることが決まった<sup>52</sup>。ベッケルは、北ドイツとフラマン語圏の民謡との間の着想や形式の類似点に注目している。特に子どもの遊び歌や、遊戯の身振り、聖人祭での子どもたちの役割（パレードや家々を廻るなど）など、北ドイツとフラマン語圏とで共通する風習の中に、キリスト教伝来以前の時代の「異教」信仰の痕跡が残っているとベッケルは指摘する。また、フラマン語圏の民謡のうち、ゲルマンの女神の神話を内容とする歌に関しては、ドイツにも同様の民謡があるということが確認された。他方、フラマン語圏の民謡には狼や巨人などのモチーフも登場するが、これらはドイツでなくスカンジナビアに由来することが分かったとベッケルは述べる。北ドイツでの調査の成果として、フラマン語圏の民謡の一部がドイツに起源を持つことをこのように論証したベッケルだが、フランス・フランドル地方の文化的起源を追究する為には、さらにスカンジナビアでも史料調査を行なう必要があると気づき、新たな課題を得たのだった。そして1856年5月にベッケルは、スカンジナビアとフラマン語圏との文化的起源の共通性を探究するべく、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーでの史料調査を公教育大臣に願い出ている<sup>53</sup>。4～5世紀にスカンジナビアからフランドル地方へと移住してきた人々の言語や慣習や「迷信」が、ダンケルク郡およびアーゼブルック郡に残存しているということを立証するという計画だったが、この時の申請は却下された<sup>54</sup>。国外のフランドル地方とフランス領フランドル地方との共通点や同一性をこのように強調する背景には、いかなる意図があるのか。

北ドイツでの民謡収集のための無給派遣の前年の1851年、ベッケルは、ベルギーとオランダでフラマン語（フランデレン語／オランダ語）の歴史や文学の状況を調査するという研究計画で助成を申請し、無給派遣で調査に赴いている<sup>55</sup>。この時の研究の趣旨について、ベッケルは次のように述べている。フランドル地方一帯で話されている言語は、蔑視の対象となってきた。例えば、人類の始原の言語の起源を研究したフランスの研究者達は、原初のオランダ語でなされてきた知的営為を無視してきた。フランス人達は、「オラ

<sup>52</sup> 1854年3月13日の月例会で決定。1854年4月18日、公教育大臣からベッケルへの書簡でこの決定を通知。AN, F17/3245.

<sup>53</sup> 1856年5月14日、ベッケルから公教育大臣への書簡。AN, F17/2838.

<sup>54</sup> 1856年5月22日、公教育大臣からベッケルへの書簡。AN, F17/2838. この時ベッケルは公教育省の研究助成制度への申請という形ではなく、北欧諸国に学術調査へ向かうナポレオン公 Prince Napoléon〔皇帝の従兄。当時、外交を担当していた〕に随行する学術調査委員会に自分を指名して欲しいと願い出たのであった。公教育大臣は、ナポレオン公随行団の人選は公教育省の管轄外だという理由でこの願い出を却下した。

<sup>55</sup> 1851年8月19日の公教育大臣省令で無給派遣が決定。AN, F17/2935A.

ンダ語は文学も文法もなく、粗野にして野卑、平板にして稚拙 [...] な俚言 patois だと見なしたから」オランダ語を無視してきたのだとベッケルは指摘する<sup>56</sup>。またスタール夫人(1766-1817)の「オランダの固有語 idiome は、文法で記されたカエルの鳴き声だ！」という表現に表れているような認識が一種の流行となってきたが、自分の研究計画は「スタール夫人の発明した措辞に反することになるため、デリケートかつ厄介な任務」となるだろうとベッケルは言う<sup>57</sup>。しかしこの研究によって、興味深いにも拘らず殆ど知られていないオランダ語(フラマン語)の作品を世に広めることができるとして、ベッケルは自らの研究計画の利点を強調している。フラマン語を蔑視の対象から救い出すことが、この研究計画の最終目的であり、ベッケルの望みでもあった。

フラマン語の地位向上のためにベッケルは、フランドル地方のことばが「固有語 idiome」「俚言 patois」などと呼ばれている現状を脱却し、フラマン語を一つの独立した「言語 langue」の地位にあるものと唱えた。ベッケルの主張を聞こう。

「ダンケルク郡とアーゼブルック郡とサントメール郡の一部の民衆達の固有語 idiome populaire は、フランドルの言語 langue flamandeである。私はあえて言語 langue と言った。俚言 patois という語は、シャルル・ノディエが示した意味—すなわち、単一の民族 races によって保存されてきた父の言語にして、国の言語であるという意味—で解釈しない限り、この言語は俚言などではないということを知らしめるためである<sup>58</sup>。」

「この言語〔フラマン語〕はフランドル地方ではフランドル語と呼ばれ、ブラバント州〔ベルギー中部〕ではブラバント語と呼ばれ、ホラント州〔オランダ北海沿岸〕ではホラント語と呼ばれる。このことは重々承知しているが、これらの呼称はいずれも、時代遅れの地方人根性 provincialisme に由来するにすぎない。いわゆる固有語と呼ばれてきたこれら全てのことばが、唯一にして同一の言語の諸方言 dialectes でしかないということが、今日では認知されている。つまりオランダ語のことである。この言語は、隣接諸

---

<sup>56</sup> BAECKER, *Rapport à M. le Ministre de l'Instruction publique et des cultes de France sur l'histoire et l'état des lettres en Belgique et dans les Pays-Bas : 1<sup>re</sup> partie —Langue néerlandaise*, Paris, Auguste Aubry, Libraire-Éditeur, 1862 (1851年9月にアムステルダムにてベッケルが執筆した、ベルギーとオランダへの無給派遣の報告書を活字化した小冊子), pp. 25-26, AN, F17/2935A. この活字版は1862年12月26日に提出されたが、すでに手稿版の報告書が1851年に提出されたことが、他の書簡類の文面から推察される。だが手稿版の方はANには保管されていない。ベルギーとオランダへの無給派遣で、ベッケルは、13~14世紀に詩人がフラマン語韻文で記した日記の収集等を行なった。

<sup>57</sup> Ibid., p. 10.

<sup>58</sup> BAECKER, *Grammaire comparée...*, p. 56.

国の文学作品とは一線を画した文学を産みだしている。私はこれを『オランダ語文学』と呼ぶ。これは、オランダ語で記された文学作品総体のことである<sup>59</sup>。」

つまりベッケルは、国境によって複雑に分断されているために各地域の「固有語」と見なされてきた諸々のことばは、実は「オランダ語」という一つの言語なのだと考えたのである。ベッケルは、フランス・フランドル地方とオランダやベルギーといった諸外国との言語的・文化的共通性および一体性を強調することで、フランスの中では国土の北端の狭小な地域の「固有語」と見なされてきたフラマン語が、独立国オランダの言語であり、なおかつ独自の「オランダ語文学」を生み出してきた由緒ある言語の、一方言だと主張したのである。

## (2)パリへの意識

フランス・フランドル地方と国外の「オランダ語文学」圏との連関や一体性を強調することで、ベッケルは、フラマン語（圏）の地位向上を図る持論を展開した。それに加えて彼は、「オランダ語」およびその「文学」の世界をフランス国内の他地域へ紹介し、普及させるために尽力した。その際、彼が特に意識したのは、フランスの中心地たるパリである。1852年にベッケルは、コレージュ・ド・フランスでの「オランダ語文学講座」の開講を公教育大臣に提案している。この講座の開講が実現すれば、自分が無償奉仕で講師を引き受けるとも申し出た。この提案に対して公教育大臣は、「ドイツ起源の言語・文学講座」が既に存在するため却下すると回答したが<sup>60</sup>、ベッケルはこれにひるまず、1854年にはドゥーエ大学文学部に「フラマン語文学講座」の開講が検討されていると聞き、責任者のポストに立候補している<sup>61</sup>。1868年、遂に彼はソルボンヌ大学でのオランダ語文学講義の開講の実現にこぎつけ、講義録も出版した<sup>62</sup>。

またベッケルは、公教育省歴史研究委員会のメンバーとしても、パリで活躍することを望んでいた。ベッケルは通信委員だったが、この身分では、公教育大臣やパリの正委員達

---

<sup>59</sup> BAECKER, *De la langue néerlandaise...*, p. 5.

<sup>60</sup> 1852年2月17日、フォルトウール公教育大臣からの回答。Cited in BAECKER, *Rapport...en Belgique et dans les Pays-Bas*, p. 28 (Appendice II), AN, F17/2935A.

<sup>61</sup> 1854年9月4日、ベッケルから公教育大臣宛の書簡。公教育省は「検討する」とだけ回答した（1854年9月14日、公教育省第2課課長プチからの回答）。Cited in *Ibid.*, pp. 28-29 (Appendice III).

<sup>62</sup> BAECKER, *Histoire de la Littérature néerlandaise : Depuis les temps les plus reculés jusqu'à Vondel. Cours fait à la Sorbonne en 1868-1869*, Louvain, Typographie de Vanlinthout Frères, 1871. 講義録はベルギーのルーヴァンで出版されたが、パリでも、初回講義のみを収めた冊子が出版された。BAECKER, *De langue néerlandaise...*



との書面上のやり取りが認められているに過ぎず、パリで開かれる月例会に出席することは許されなかった。通信委員の定員は全国合わせて200名であるのに対し、月例会への出席権を持つ地方委員は、わずか13名しか任命されていない<sup>63</sup>。たいへん狭き門である地方委員の座への昇格を、ベッケルは、歴代の公教育大臣に懇願し続けた。史料上確認できるだけでも、1853年から1863年の間に実に8度にもわたって、地方委員への昇格を求める書簡を公教育大臣に送っている<sup>64</sup>。だがことごとく却下され、彼が地方委員に昇格することは遂になかった。彼ほどに地方委員の地位に拘泥した通信委員は、少なくとも史料で確認できる限りでは、他に見当たらない。ベッケルが地方委員のポストを切望した背景には、月例会に主席したいという理由と共に<sup>65</sup>、自分こそがフラマン語圏を代表しうる存在だという自負もあった。通信委員に任命されてから3年目の1853年10月、ベッケルは、地方委員に自薦する書簡を初めてフォルトゥール大臣に書いている。この書簡で彼は、歴史研究委員会文献学部門で実施しているフォルトゥール調査はフランス諸地域の諸方言を扱うにも拘らず、また歴史研究委員会では「フランス北部のフラマン語方言の文献は注意を払うに値する」と言っているにも拘らず、委員会の月例会出席者の中に「フラマン語を専門に研究するような人物が見当たらない」ことは問題だと指摘した。その上で、「もしフラマン語の文献学に従事しているメンバーを委員会〔月例会〕に加えたいとお考えでしたら、わたくしが喜んで地方委員を拝命いたします」とアピールしている<sup>66</sup>。もちろん、ベッケルを突き動かしていたのは名誉欲に過ぎなかったという可能性を否定する根拠はない。だが、フラマン語の普及および地位向上にかける彼の熱意を考慮に入れると、パリの月例会で正委員達と直接議論をし、彼らの目の前で自分の研究成果を発表し、さらにフォルトゥール調査でフラマン語民謡に関する文献学的考察を担当する役目をも引き受けること、すなわちフランス・フランドル地方の代表としてパリで活躍することを純粋に願っ

---

<sup>63</sup> 第2章で述べた通り、地方委員の数は時代によって増減する（10～30名程度）。本文で13名と記したのは、フォルトゥール調査の開始に合わせて歴史研究委員会が「フランスの言語・歴史・芸術委員会」へ改称・再編された1852年時点での、地方委員の人数。

<sup>64</sup> 例えば1858年9月18日、ベッケルからルーラン公教育大臣への書簡では、同年2月22日付の歴史研究委員会の改編で科学部門が新規に設立されたのに合わせて、ベッケルは、自分にとって畑違いの分野であるにも拘らず、新規に任命される科学部門の地方委員の枠に立候補している。この時ベッケルは、北仏沿岸地方の砂丘を耕作する方法の研究を行なうとして、農業関係の研究の構想を記している。AN, F17/2838.

<sup>65</sup> 1855年9月13日、ベッケルからフォルトゥール公教育大臣への書簡。自分がパリに出かけるたびに月例会に出席できたらさぞや嬉しいだろうと述べている。AN, F17/2838.

<sup>66</sup> 1853年10月17日、ベッケルから公教育大臣への書簡。AN, F17/2838.



て、ベッケルは地方委員のポストを切望していたように見えてならないのである。ベッケルは、フランス・フランドル地方の民謡と国外の近隣地域の民謡との共通点に着目して国外での史料調査を敢行し、その起源の同一性を論証した。フラマン語（圏）に対する根強い蔑視を払拭するべく、国外の同一言語圏との連帯をバネに、フランス・フランドル地方の属する文化圏の偉大さを強調したのだった。

## 第5節 フランドルの中の「フランス」として—クスマケルの民謡収集

### (1) 旋律の採譜への情熱—歌われたままに、正確に

クスマケルは、集めた民謡150曲をまとめて、1856年に『フランスのフラマン人達の民謡』を刊行した。ラ・ヴィルマルケが1839年に著したブルターニュ民謡集『バルザズ・ブレイズ』に匹敵するような、フランス・フランドル地方の民謡を集めた作品を発表することが目標だったと、クスマケルは述べている<sup>67</sup>。歴史研究委員会はこの民謡集の内容を高く評価し、フォルトゥール調査の優れた成果として、編纂中の『フランス民衆詩歌選集』に収録することを決定している<sup>68</sup>。クスマケルはこの民謡集で、全収録曲をダンケルクやアーゼブルックの祭、街角、仕事場、家庭といった場所で「民衆の口から収集」して、「歌詞も旋律も、民衆の記憶している通りに記」した全曲の譜面を付けるという方針を強く打ち出した<sup>69</sup>。19世紀半ばの時点では画期的な方針である。というのも、当時の大半の民謡集は歌詞しか掲載しておらず、たとえ譜面が付いていても、歌曲風にピアノ伴奏を加えたり、耳馴染みの良いように旋律を改変したりと、民謡を編曲して出版する傾向が主流だったからである<sup>70</sup>。クスマケルはこうした傾向を批判して、歌われた通りに忠実に旋律を採譜するべきだと主張した。彼は歌い手がいると聞けばどこへでも出かけ、幾人もの人に同じ節を歌ってもらった。「首尾よく記録できたかどうか確認するのに最も良い方法

<sup>67</sup> COUSSEMAKER, *Chants populaires...*, p. IV. クスマケルは同時に、フランス・フランドル地方は2つの郡しかなく、人口も21万人に過ぎないため、数の面でも重要さの面でもラ・ヴィルマルケ氏のコレクションと同等のものができるとは至らないだろうとも記して、優れた民謡集を編纂することの難しさを指摘している。

<sup>68</sup> 1856年7月26日、公教育大臣からクスマケルへの書簡で通知。AN, F17/2847.

<sup>69</sup> COUSSEMAKER, *Chants populaires...*, p. V.

<sup>70</sup> PISTONE, « Edmond de Coussemaker... », p. 615 ; Jane FULCHER, « The Popular Chanson of the Second Empire : 'Music of the Peasants' in France », *Acta Musicologica*, n° 52, 1980, pp. 34-35. クスマケルの民謡集と同時代に発表された伴奏譜付きの民謡集の例としては、CHAMPFLEURY (notices par) et J.-B. WECKERLIN (accompagnement de piano par), *Chansons populaires des provinces de France*, Paris, L'écrivain et toubon / Garnier Frères Libraires (2種の版がある), 1860.

は、採譜した節を復唱してみせることである。何か足りない所があれば、その場で歌い手が指摘してくれる」と語るクスマケルの民謡収集の方法は<sup>71</sup>、復唱法と呼ばれる今日の方法とほとんど変わらず、今日でも通用すると音楽学者のピストンは指摘している<sup>72</sup>。

クスマケルはフォルトゥール公教育大臣へ次のように述べ、旋律を正確に収集することの重要性を訴えた。

「民謡にとっては旋律が無視できないほど重要で、しばしば主たる役割を果たしているということは、きわめて明白です。旋律なくしてはいわゆる民謡は存在しません。ですから、現在準備中の『手引』〔第1章参照〕において、通信委員達にこの点を注意喚起する必要があります。しかし同時に、旋律に刻印されている各地域固有の独創性を保存するためには、伝承されてきたままの形の旋律がもたらされることが最重要であるため、旋律を書き留めるのにあたっては、最大限の正確さと最大限の綿密さとを推奨するのがよろしいでしょう。この種の仕事をするには、近代音楽の慣習を一時的に離れたり、言うなれば捨て去ったりしなくてはなりません。そうしないことには、近代調性とは全く別物である〔民謡の〕調性の旋律を完全に変質させてしまう危険にさらされるからです<sup>73</sup>。」【資料3】

クスマケルのこうした提案は歴史研究委員会の正委員達から歓迎され、『手引』に採用された<sup>74</sup>。ここで注目すべきは、民謡の旋律にこそ、地域固有の特徴が現れると述べられていることである。歌われている通りに旋律を記録するよう留意すべきだとクスマケルが主張した背景には、音楽学者としての関心とともに、民謡の旋律に見られる地域的固有性を保存する必要があるとクスマケルが考えていたという理由もあったのである。

---

<sup>71</sup> COUSSEMAKER, *Chants populaires...*, p. XV.

<sup>72</sup> PISTONE, « Edmond de Coussemaker... », pp. 614-615. 民謡収集で知られるバルトークが1930年代に実践した方法に似ているが、復唱して歌い手から訂正してもらうほどのクスマケルの慎重さは、バルトークをも上回るとピストンは述べている。

<sup>73</sup> 1853年5月6日、クスマケルから公教育大臣への書簡、AN, F17/3245. 【資料3】は、この書簡に添えられたクスマケルの自筆譜の写真。参照されたい。

<sup>74</sup> Jean-Jacques AMPÈRE, « Poésies populaires de la France », in *Bulletin du Comité de la langue, de l'histoire et des arts de la France*, t. 1 (1852-1853), Paris, Imprimerie Impériale, 1854, pp. 226-227. 歴史研究委員会正委員のヴァンサン（考古学部門。中世音楽に関する学問は「音楽考古学」と呼ばれていた。フォルトゥール調査は主に文献学部門が担当）も、クスマケルと同様の見解を主張していた。

## (2)旋律に宿る、フランス・フランドル地方の固有性

クスマケルの民謡集では、民謡を13のジャンルに分類している【資料4】。歴史研究委員会の『手引』と似た構成だが、フランドル地方特産のレース織を担う女性職人達の守護聖人である聖アンヌに関する歌だけを集めて1章を設けるなど、フランス・フランドル地方特有の歌のジャンルを巧みに組み込んだ点に、クスマケルの工夫がある。クスマケルは、各ジャンルの特徴を概説した上で、1曲ごとに簡潔な解題を添えている。そうした記述の中でクスマケルは、フランス・フランドル地方の民謡には、国外のフランデレン語／オランダ語地域、および、古代にフランドル地方と関係の深かったスカンジナビアやドイツの民謡と、歌詞の内容、題材、ジャンルといった点で共通する要素があると指摘している。ベッケルが北ドイツでの民謡収集の報告で展開していた主張と、一致する見解である。

だが旋律に関しては、フランス・フランドル地方の民謡と国外の同一言語圏の民謡との間には、歴然たる違いがあるとクスマケルは論じている。その違いは、起源の《古さ》の差に起因するとクスマケルは唱える。たとえフランス・フランドル地方の旋律と似た旋律がドイツでも歌われていても、起源は自分達の地域の歌の方が古いとクスマケルは指摘する<sup>75</sup>。まさに起源の古さこそが、フランス・フランドル地方の民謡の旋律の固有性だと主張するのである。こうした主張の根拠は、フランスで話されているフラマン語と、国外のフランデレン語／オランダ語との間の、発音上・表現上の相違にあるとクスマケルは述べる。彼は主に母音の比較を行い、o, ooといった母音（例：mogen, woonen）が、フランス・フランドル地方ではeuという二重母音で発音する（例：meugen, weugen）などの例を挙げている。表現上の違いに関しては、本章第1節で触れたフランス・フラマン委員会の言語調査の結果に表れている。この言語調査では、教会に設置されている祈禱書や『布教年報 *Annales de la propagation de la foi*』といった書物が、フランス語版であるか、それともフラマン語版であるかを尋ねた。その結果、多くのコミューンでフラマン語版の『布教年報』が拒絶されていることが分かった。フラマン語しか話されていないと回答したコミューンでさえ、フラマン語版の『布教年報』は使われていなかった。その理由は、フラマン語の書籍がベルギーやオランダで製作されていることにあった。フランス・フランドル地方の住民にとっては、ベルギーやオランダのことばは自分達のことばと表現が異なるため、内容が理解しにくい、あるいは全く理解できない。そのためフラマン語の書物を

<sup>75</sup> COUSSEMAKER, *Chants populaires...*, p. XVIII.

置かないのだと、多くのコミュニンの回答には記されていた<sup>76</sup>。言語学的には同一言語圏とされるフランドル地方の中での発音や表現の差異の程度を、われわれ日本語使用者が実感することは難しいが、フランス領のフラマン語話者からすると、国外のフランデレン語／オランダ語とは相互理解に困難をきたすほどの差異があったということである。フランス・フランドル地方とそれ以外のフランデレン語／オランダ語圏との間に言語的差異が生まれた要因は、フランス・フランドル地方が17世紀にフランス領化されたことにあると、クスマケルは説明する。ベルギーのフランデレン語が、オランダ語やドイツ語に近づく形でおよそ半世紀程前から大きく変化してきたのに対し<sup>77</sup>、フランス・フランドル地方のフラマン語は、フランスに占領される以前の17世紀の状態のまま変化していない。従って、フランス・フランドル地方の人で文字が読める人は、17世紀から18世紀にかけての時代に記されたベルギーやオランダの文章は簡単に理解できても、同時代に書かれた文章を理解することは難しいのだとクスマケルは言う<sup>78</sup>。

発音や言い回しのような言語的特徴は、民謡の旋律の音楽的特徴に強く影響することから、フランス・フランドル地方の民謡の中には、他国のフランドル地方の旋律よりも古い特徴が残されている歌があると考えられるとクスマケルは論じる<sup>79</sup>。ドイツやオランダやベルギーの民謡の旋律は、フランドル地方の民謡が本来持っていた特有の要素を変質させてしまっているのに対し、フランス・フランドル地方では17世紀の仏領化が幸いして、フラマン語の古い発音・表現のみならず、古い旋律の特徴もまた守り継がれているとクスマケルは考えた。彼は言う。

「ブリュッセル、アントウェルペン〔アントワープ〕、ヘント〔ゲント〕、ブリュッヘ〔ブリュージュ〕のフランドル人達は、この〔クスマケルの〕民謡集の中に、忘れていた歌詞や旋律を再発見するだろう。そうした歌は、彼らの西側に住む兄弟であるわれわれが、200年前より絶えず他の諸習俗、他の一言語〔＝フランス語〕、他の音楽的調性と接触してきたにもかかわらず、完全に原初の純粋な形ではないにしても、少なくとも本来の完全な形に近い状態で保存してきた歌なのだ<sup>80</sup>」

<sup>76</sup> COUSSEMAKER, *Délimitation...*, pp. 19-20. フラマン語版の本や祈禱書を入手するのが困難であるため、読めないながらも仕方なく、フランス語の本を持っているという回答もあった。

<sup>77</sup> Ibid., p. 20. この主張の根拠は示されていない。

<sup>78</sup> COUSSEMAKER, *Chants populaires...*, pp. XXII-XXIV.

<sup>79</sup> Ibid., pp. XVIII, XXII.

<sup>80</sup> Ibid., p. V.

「われわれ〔フランス・フランドル地方〕の歌の中に、今日のベルギーではすたれてしまった表現を見つけることができる」と<sup>81</sup>。

クスマケルがフランス・フランドル地方の民謡に固有な音楽的特徴として看取したのは、リズムおよび調性 *tonalité* である。まずリズムの方から見ていくと、変拍子の曲が多いことや、あるいはリズム自体に規則性がないことこそが、フランス・フランドル地方の固有性だとクスマケルは述べる<sup>82</sup>。調性に関しては二点指摘している。第一に、導音<sup>83</sup>が存在しないことである。フランス・フランドル地方の旋律は、「グレゴリオ聖歌の第1音階〔第一教会旋法〕あるいは、第6音・第7音を高くしない近代的な短音階である。こうした旋律では、導音を排する傾向が強く存在するということを指摘できる<sup>84</sup>。」すなわち、第7音が歌の途中で現れても、導音としての働きをしないか、あるいは、近代音楽であれば歌の末尾から数えて2つ目の小節に導音が出てくる所で、フランス・フランドル地方固有の民謡では末尾から2つ目の小節から導音が排除されるということである。第二にクスマケルが挙げているのは、主調と関係調とが混交するという特徴である<sup>85</sup>。フランス・フランドル地方の民謡がグレゴリオ聖歌と酷似している理由は、中世の民衆が重労働を紛らわせようと、誰もが知る歌である教会の聖歌を繰り返し歌っていたためだとクスマケルは言う。こうした慣習は多くの地域で忘れ去られ、すたれてしまったが、フランス・フランドル地方だけは例外だとして、クスマケルは次のように記している。

「フランドルの民衆は、グレゴリオ聖歌の旋律に乗せて歌われた民謡を保持している、唯一の人々かもしれない。この点は特筆に値する<sup>86</sup>。」

フランス・フランドル地方に特有のリズムや調性が最も顕著に見られる例として、クスマケルが挙げている「メシア」という歌の譜面を掲載する【資料5】。もっとも、上記の特徴がフランス・フランドル地方の全ての民謡に見られる訳ではなく、近代音楽を基にした民謡も数多く歌われているとも、クスマケルは述べている。

---

<sup>81</sup> Ibid., p. XXIII.

<sup>82</sup> Ibid., pp. XX-XXII.

<sup>83</sup> フレーズを解決する〔終わらせたり区切りをつけたりすること〕力が最も強い音。音階上、主音から数えて7番目に来る「第7音」であることや、主音よりも半音下であることが多い。

<sup>84</sup> Ibid., p. XIX.

<sup>85</sup> Ibid., pp. XVIII-XX.

<sup>86</sup> Ibid., p. XX.



以上の通りクスマケルは、民謡の音楽的特徴に関する考察を通して、フランドルという広大な地域の中でもフランス領の地域のみに備わる固有性に注目した。これは、音楽学の専門家たるクスマケルだからこそ、着眼できた点であろう。他方、クスマケルは、フランス国内でのフラマン語圏の位置付けには無関心だった。フランスとフランス・フランドル地方との民族起源の連関については、ベッケルの所説に依拠するだけで、クスマケル自身はそれ以上踏み込んだ考察をしていない。むしろクスマケルの関心は、フランドル地方の同一言語圏の中で、フランス・フランドル地方の固有性を強調することの方にあった。フランス・フランドル地方は、政府が推進するフランス語教育の例のように、フランス領であるがゆえに伝統消滅の脅威にさらされていると、クスマケルは認識していた。だがフランス領となったがゆえの《利点》もまた存在するとクスマケルは考えた。すなわち、フランスに占領される17世紀以前の状態で、フラマン語の発音・表現や民謡を保っていることである。クスマケルはこの点を梃子に、ベルギーやオランダと地元地域との差異化を図る。そして、複数国に及ぶ広大なフランドル地域の中でもフランドルの原初のことばや音楽を維持しているのは、唯一フランス・フランドル地方のみだと論じた。クスマケルにとっては、フラマン語（フランデレン／オランダ語）圏の中でのフランス領の特殊性こそが、フランス・フランドル地方のアイデンティティを支える柱なのだった。クスマケルの主張はベッケルの主張と相互補完的である。ベッケルは、フランス国内で唯一、フランク人の歌を受け継ぐ地としてフランス・フランドル地方を位置付けた。クスマケルの方は、フランス・フランドル地方で唯一、17世紀以前の歌を受け継ぐ地としてフランス領のフランドルを位置付けた。国内外双方との関係を明確化させてはじめて、フランス・フランドル地方の研究者達のアイデンティティは形成されていったのである。

最後に、ベッケルやクスマケルの所説がパリでどのように受け止められたかを示す、傍証を一つ示しておく。1853年10月、ベッケルは初めて公教育省歴史研究委員会の地方委員への昇格を願い出た。翌11月にフォルトゥール公教育大臣は、今は定員に達しているので地方委員に昇格させることはできないものの、「わたくしはあなたからの依頼を忘れないようにします」と述べ、次に空席ができればベッケルを地方委員に任命することを約束し

た<sup>87</sup>。だが1855年4月、次の新たな地方委員として任命されたのはクスマケルだった<sup>88</sup>。親しい仲間が地方委員になったことを受けてベッケルは、同年9月にフォルトゥール大臣へ改めて手紙を書く。委員会のメンバーの人数が増えて「新たに地方委員に任命された人達も出てきました」と述べ、自分との約束をもう一度思い出して欲しいと大臣に訴えた<sup>89</sup>。この後、地方委員の空席ができるたびにベッケルは、フォルトゥールの後任の公教育大臣達に宛てて、フォルトゥール大臣から受け取った約束の言葉を一言一句引用しながら昇任願いを出し続けたが<sup>90</sup>、却下され続けた。フォルトゥール大臣をして、ベッケルとの約束を反古にするに至らしめるような何らかの事由があった形跡は、現時点では史料上確認できない。国外との連帯を強調する論調のベッケルと比べ、フランドル地方におけるフランス領の優位な点（古い言語や民謡を維持している点）を強調したクスマケルの所説の方を、政府としては歓迎したということが、地方委員の人事に表れたのかもしれない。

## 章括

以上、フォルトゥール調査の、国境地域における実施状況を検討してきた。民謡収集に積極的に取組んだ地域であるフラマン語圏に注目し、歴史研究委員会の通信委員・地方委員の中からベッケルとクスマケルという二名を取り上げ、彼らの民謡収集について分析した。ベッケルもクスマケルも、初等教育でのフランス語教育を断行するなどの、フランス政府による画一的なフランス化の試みに対する反発の念を持っていた。彼らは共に、フランスは文化的に統一すべき国家としてでなく、国内の文化的多様性を尊重し擁護しながら、緩やかに統合するような国として存在するべきだと考えていた。フランス国内だけでなく、国外（ベルギー、オランダ）の同一言語圏との関係について考察する中で、フランス・フランドル地方に生きる人間としてのアイデンティティを、ベッケルやクスマケルは

---

<sup>87</sup> 1853年11月10日、フォルトゥール公教育大臣からベッケルへの書簡の写し。AN, F17/2838.

<sup>88</sup> 1855年4月13日、クスマケルを地方委員に任命する公教育大臣の省令、および同日付の書簡の写し。またこの前日の4月12日に、パリに滞在中のクスマケルが公教育大臣宛てに書簡を記している。その書簡でクスマケルは、フォルトゥール調査での自らの働きをアピールしつつ、時々パリへ行く機会があるので、地方委員としてパリの月例会で有益な報告をできるだろうと述べて、地方委員に立候補している。いずれもAN, F17/2847.

<sup>89</sup> 1855年9月13日、ベッケルからフォルトゥール公教育大臣への書簡。AN, F17/2838.

<sup>90</sup> 1862年9月7日（ルーラン公教育大臣）および1863年9月14日（デュリュイ公教育大臣）、ベッケルから公教育大臣への書簡。1863年の方は、ベッケルの地元ノール県の地方学術団体の重鎮ル・グレイ氏（リール在住）の死去を受けての書簡である。いずれもAN, F17/2838.

確固たるものにしていった。その際に彼らは地元地域の民謡に着目した。彼らにとっては民謡が、フランス・フランドル地方の固有性の一種の根拠としての役割を果たしたのであった。

## 第4章

### 農村民衆の習俗と地域的固有性—フランス語圏の諸地域での民謡収集

前章の問題意識を共有しつつ、本章では、農村民衆らがフランス語およびその方言を会話に用いる諸地域で行なわれた民謡収集を取り上げる。まず第1節では、本稿で用いる「フランス語圏」という語の定義を述べた後、フランス語圏でのフォルトゥール調査の実施状況について考察する。第2節では、民謡こそが民衆の歴史を語る史料だとする、『手引』で示されていた考え方（第1章参照）が、フランス語圏の諸地域から公教育大臣の元へ届いた民謡報告では、必ずしも共有されていたとは限らなかったということを検証していく。第3節は、史料として民謡を解釈する考え方に代わるような、フランス語圏の民謡収集に特徴的な傾向を明らかにし、地域意識のあり方との関連を論じる。

#### 第1節 「フランス語圏」におけるフォルトゥール調査の実施状況

##### (1) 「フランス語圏」の定義

フォルトゥール調査が実施された19世紀中葉の時点で、フランス語およびその方言が主に住民達の会話に用いられていた地域を具体的に特定するための手段として、前章でも引用した、デュリュイ公教育大臣の時の全国言語調査を根拠とする<sup>1</sup>。この調査の質問項目は多岐にわたるが、その中で、言語の使用状況に直接関わる内容は約10項目存在する。例えば、県内で用いられている固有語 *idiomes* の名称や、フランス語が未だに話されていないコミューンの数とその人口、逆にフランス語が常用されているコミューンの数とその人口、固有語あるいは方言 *patois* でのみ教育を行なっている教師が在籍している小学校の数、7才から13才までの就学・未就学児童のうちでフランス語の読み書きができない児童の数、などである。ほぼ全ての回答が数値でもたらされている。この調査結果によると「フランス語圏」は、おおむね北仏に広がるオイル語圏（ノルマンディー地方、ピカルディー地方、ブルゴーニュ地方、フランシュ＝コンテ地方、サントル地方、シャンパーニュ地方、パリ近郊、ポワトゥー地方、アングーモワ地方、アンジュー地方）に加え、南仏に広がるオック語圏の中でも「フランス語化」の度が高かった、大西洋岸付近のギュ

<sup>1</sup> AN, F17\*3160, ch. 8.

イエヌヌ地方も含まれる。結果的に、フランス北部・東部・中央部・西部にまたがる広大な地域を本章では対象とすることになる。

## (2) フォルトゥール調査の実施状況—フランス語圏の特徴

歴史研究委員会地方委員・通信委員のフォルトゥール調査への協力状況を概観した後、学校関係者が取ったフォルトゥール調査への対応を検証していく。それを踏まえた上で、フランス語圏の民謡収集の特徴を捉えるために適した方法論について述べる。

フランスの民謡収集に関する先行研究は、ブルターニュ地方などの地方言語圏で充実している一方、フランス語圏では脆弱な状況にある（「はじめに」7頁参照）。実際にも、フォルトゥール調査以前の時代のフランスにおける民謡集の出版状況を見ると【資料6】、ブルターニュ地方の歌をはじめ、バスク地方やコルシカ島の歌など、フランス語以外の言語で歌われている民謡を集めた民謡集が主流となっている。フランス語方言の民謡を収集している作品の例としては、フランシュ＝コンテ地方の民謡を集めたイニシャルJ. V. の匿名氏の論考（1834年）、大西洋岸のバザデ地方の民謡を集めたラマルク・ド・プレザンスの著作（1845年）、シャンパーニュ地方の民謡等を載せているタルベの著書（1851年）などが刊行されているものの、フランス語圏の中で、フォルトゥール調査以前にすでに民謡収集が行われていた地域は、ごく一部だった。フランス語圏の諸地域に住む研究者達の中で民謡収集に着手した経験のある者は、決して多くはなかったのである。フォルトゥール調査開始時、歴史研究委員会の地方委員・通信委員は計220名を数えた。1852年秋の調査開始から1年以内ほどの期間に区切ってみると、民謡の報告を提出したことが史料上確認できたのは、全地方委員・通信委員の内のわずか1割程度の24名に過ぎない<sup>2</sup>。歴史研究委員会のパリの正委員達が、詳細な指示を『手引』の形にまとめて初めて公にし

---

<sup>2</sup> 地方委員・通信委員の内訳（太字＝フランス語圏・フランス語が民衆に浸透している県、ならびに収集された民謡がフランス語方言を含んでいる事例）AN, F17/3245, 3246および歴史研究委員会議事録に基づき作成。アン県ニッド神父 **L'abbé Nyd**、エーヌ県ゴマル **Gomart**、同県ポケ **Poquet**、コレーズ県コンベ **Combet**、ドゥー県リシャール神父 **L'abbé Richard**、ウール＝エ＝ロワール県メルレ **Merlet**、イル＝エ＝ヴィレーヌ県ケネ **Quesnet**、ロワレ県ジラルド **Girardot**、同県ビュゾニエール **Buzonnière**、マルヌ県バルテルミ **Barthélemy**、同県メレ **Mellet**、オート＝マルヌ県ペルノー **Pernot**、ニエール県スールトレ **Soultrait**、ノール県デュチュール **Duthillœul**、同県クスマケル **Coussemaker**、同県バルテルミ **Barthelemy**、パ＝ド＝カレ県リナ **Linat**、同県ベッケル **Baecker**、セーヌ＝アンフェリウール県マトン **Mathon**、セーヌ＝エ＝オワーズ県ムーティエ **Moutié**、ドゥー＝セーヴル県ボーシェ＝フィロー **Beauchet-Filleau**、アリエ県ペーグ **Peigue**、ソーヌ＝エ＝ロワール県ラクロワ **Lacroix**、同県カナ **Canat**。ただし、今回の民謡収集の目的には合致しないと歴史研究委員会の正委員達が判断した報告（自作の詩など）を送ってきた者も含んでいる。



たのは1853年12月であるから、調査開始から1年弱の期間は、歴史研究委員会の本部からの具体的な指示がほとんどないままに、地方委員・通信委員達は民謡収集に臨まざるをえなかった<sup>3</sup>。この期間に独力で、しかも自発的に民謡収集に取り組んだ地方委員・通信委員が、全国でも24名のみだったのである。そもそも1850年代には、通信委員のポストに適任な人材の不足に悩む県が依然として複数存在していた<sup>4</sup>。各県でもれなく民謡を集めるというフォルトゥール大臣の計画を実現するには、地方委員・通信委員やそれ以外の地方在住の研究者達の自発的な協力のみに頼っている訳にはいかなかった。

そこでフォルトゥール大臣は、小学校教師や初等視学官といった学校関係者を組織的に動員して、大学区長の指導の下で民謡収集にあたらせた。だが、調査が開始された当初より学校関係者らが積極的に協力した県はごく一部だった。例外的に、フランス南東部のオート＝ザルプ県では、大統領令が発布されてから4日後には、大学区長が自発的に地元の地方学術団体会員等を招集し、県内で集まった歌を審査するための委員会を立ち上げるなど民謡収集に非常に協力的な態度を示したが<sup>5</sup>、これは稀なケースに過ぎない。1852年秋の調査開始から1年以内（『手引』発表以前の期間）に、民謡の報告を提出した大学区長・初等視学官・小学校教師といった学校関係者が存在したことが史料上確認できたの

---

<sup>3</sup> 『手引』が発表される以前の段階は、歴史研究委員会の地方委員や通信委員と並んで、民謡調査の開始を告知した官報『モニトゥール・ユニヴェルセル』紙上の記事を読んだ有志の者達からの書簡が、フォルトゥール大臣の元には多数届いた。その中には、フォルトゥール調査の開始以前より民謡を収集してきた地方在住の研究者達からの書簡以外にも、「民衆」を自認する人々が自作の歌（詩）を公教育大臣やルイ＝ナポレオンに披露するべく、書簡を送ってきたケースがある。第1章で見たようにして歴史研究委員会の本部が民謡収集の方針を固めていくに従い、こうしたケースは減少していったが、国立古文書館には、自作歌が記された書簡が30通ほど保管されている（AN, F17/3245, dossier « Poésies contemporaines envoyées par leurs auteurs »）。これらは、自称「民衆」が自作の歌に託して、公教育大臣やルイ＝ナポレオンに訴えかけた内容を垣間見せており、非常に興味深い史料である。本稿の問題意識から逸脱するため、これについては機会を改めて論じる予定である。

<sup>4</sup> AN, F17/2811 « Correspondants des travaux historiques ». 例えばカンタル県では、歴史研究委員会の事業に協力したという実績が全くないことを理由に、公教育大臣が3名の通信委員の除名を通告したが、県知事は、この3名以外に通信委員の仕事が勤まる人材がいなかったため除名処分を撤回して欲しいと願い出ている（1858年5月13日、カンタル県知事から公教育大臣への書簡）。通信委員の人材不足という問題は歴史研究委員会だけに限ったことではなく、内務省および公教育省の歴史的建造物保存行政でも、同様の問題に直面していた。このため、地方では、内務省や公教育省の複数の委員会の通信委員のポストを兼任する者が珍しくなかった。TANCHOUX, « Heurs et malheurs ... ».

<sup>5</sup> 1852年9月17日、オート＝ザルプ県の委員会議長ルーベール Roubertから大学区長への書簡、および1852年9月19日、大学区長ラーニュ Laragneから公教育大臣への書簡。AN, F17/3245. 大学区長はフォルトゥール大臣に、この委員会の活動に対する助成金の交付を申請した。フォルトゥール大臣は、民謡の審査はパリの歴史研究委員会正委員達が一括して行なうので、地方でそのような委員会を編成する必要はないと回答し、オート＝ザルプ県の委員会に解散を命じた。

は、全国86県の内の6県のみである<sup>6</sup>。初等視学官の中には、巡視という通常の任務だけでも激務だというのに、それに加えて民謡収集を行なわなくてはならないのは大変な負担を強いられることだと述べて、フォルトゥール大臣に不満をぶつける者すらいた<sup>7</sup>。こうした状況の中でフォルトゥール大臣は、大学区長や初等視学官に対して、調査開始後1年が経過しても依然として、数名の初等視学官だけからしか民謡調査への協力が得られていない現状には「失望したと言わざるを得ない」と告げながら、歴史研究委員会の作成した『手引』を大いに活用して民謡収集に臨むよう、引き続き学校関係者らを鼓舞—あるいは半ば強制—した<sup>8</sup>。『手引』やフォルトゥール大臣の通達を受け取った大学区長や初等視学官の多くは、急いで返答をしたためた。これまで民謡の報告を提出してこなかった理由を、大臣に釈明するためである。返答には例えば、「大臣に送る価値があるように思われる歌が、県内では一切見つかっていなかった<sup>9</sup>」という説明や、これまでに集めてきた歌が大臣に報告するに値するということに『手引』を見て初めて気づいたという説明<sup>10</sup>、卑俗な歌であるため大臣に報告する価値がないと大学区長が独断で判断し、大臣に報告を拳

---

<sup>6</sup> 大学区長・初等視学官・小学校教師が、民謡収集開始から1853年11月までの期間に民謡報告を提出した県の内訳（フランス語圏・フランス語が民衆に浸透している県、ならびに収集された民謡がフランス語方言を含んでいる事例を、註2と同様に太字表記）。AN, F17/3245, 3246および歴史研究委員会議事録に基づき作成。オート＝ザルプ県、シャラント＝アンフェリウール県、コート＝デュ＝ノール県、ジロンド県〔提出されたのはガスコーニュ語の民謡〕、ニエーヴル県、バ＝ラン県。

<sup>7</sup> 1855年12月14日、ヴァンデ県フォントネー＝ル＝コントの初等視学官ノブレNobletから公教育大臣への書簡。AN, F17/3246。

<sup>8</sup> 1853年12月5日付、フォルトゥール公教育大臣から大学区長宛の大臣通達からの引用。C. II, pp. 162-164. ほぼ同様の内容の通達が、同日付で初等視学官宛にも出ている。これらの通達の草稿（11月末日付）が、国立古文書館に保管されている。AN, F17/3245。

<sup>9</sup> 1853年12月12日、メーヌ＝エ＝ロワール県大学区長から公教育大臣への書簡。AN, F17/3245。

<sup>10</sup> ロゼール県初等視学官ラバリー Rabaly から大学区長宛の書簡（1854年1月18日）。ラバリーは「フランスの全県の中で、ロゼール県こそが、まぎれもなく最も民衆詩歌や民謡が乏しい県です」と述べ、民謡収集の呼びかけに対してこれまで返答してこなかったのは、民謡収集を行なう気がなかったからではなく、「私のあらゆる努力が無駄に終わっていたからです」と釈明している。ラバリーは、100曲以上の民謡を集めたものの、一曲として報告するに値するものが見つからなかったと思い込んでいたが、『手引』を読んだ上でこれまでに自分が集めた歌を読み返してみると、思っていたよりも成果が上がっていなかった訳ではなかったことに気がついたと、この書簡の中で語っている。彼は数点の民謡の記録を提出した。AN, F17/3246。

ヴァール県の通信委員ジロー神父 L'abbé Giraud もラバリーと同じように、プロヴァンス語の韻文の諺を収集したものの、『手引』を読むまではこうした諺は大した内容ではないと考えていたため、公教育大臣に報告するつもりがなかったと記している（1854年2月10日の書簡）。AN, F17/3245。

げていなかったという説明<sup>11</sup>、そして、民謡収集をしようという意欲はあったものの、大臣や歴史研究委員会から詳細な指示がなかったため、何をしたらよいか分からずに沈黙を貫いてきたといった説明の言葉が<sup>12</sup>、大学区長や初等視学官達から公教育大臣への書簡には連ねられている。学校関係者からの民謡報告は、『手引』で具体的な指示が出されて以降、増加傾向に転じる。だがそれでも、質・量ともに充実した民謡報告を提供できた県もあれば、貧弱な成果しか残せなかった県もあった。

フランス国内の多くの地域では、フォルトゥール調査が始まったことで、歴史研究委員会の本部からの指示や公教育大臣の通達を受けて、民謡収集の経験の浅い者達が民謡収集に臨まざるをえない状況に置かれた。こうした、いわば民謡収集の初心者達が記した民謡報告は、地方言語圏の諸地域を含めてフランス各地から、フォルトゥール大臣の元へ届けられている。ただ、地方言語圏の中には、フランス・フランドル地方のベッケルやクスマケルのようにかねてより民謡収集に熱心に取り組み、フォルトゥール調査に積極的に貢献する意欲を見せていた研究者もいた地域・県が存在する。他方、フランス語圏には彼らのように民謡収集への熱意を持った有力な研究者はほとんどおらず、逆に、フォルトゥール調査を機に民謡収集に初めて取組んだような人物からの報告が大半を占めている。フランス語圏の諸地域は、フォルトゥール調査という試みを前にして、ほぼ均質な条件にあった。すなわち、地元の研究者達や地方学術団体等による民謡収集の蓄積がほとんど無い状態でフォルトゥール調査に臨んだという点が、フランス語圏の諸地域には共通しているのである。以下では、こうした共通点を持つ諸地域から、多くの地点の事例を集めて比較していく。この方法を取ることで、フォルトゥール調査がもたらしたインパクトの全体的な傾向を把握することができる。特定の一地域を中心的に取り上げて分析した前章と対比することで、フォルトゥール調査の理解が深まることを意図した。

## 第2節 民衆の歴史の史料としての民謡—フランス語圏の場合

### (1) シャンパーニュ地方の研究者、プロスペル・タルベ

『手引』には、2つの関心が並存していた（第1章参照）。簡単に振り返っておくと、第一に、民謡は民衆の歴史を語る史料であるとする考え方が『手引』では大きく扱われて

<sup>11</sup> 1853年12月21日、シャラント＝アンフェリウール県（現シャラント＝マリティム県）大学区長から公教育大臣への書簡。AN, F17/3245.

<sup>12</sup> 1853年12月16日、シェール県初等視学官マニオー Magniaut から公教育大臣への書簡。AN, F17/3245.



いた。その理由として、フォルトゥール調査が未刊行史料集成事業を背景として実施されたということと並んで、既存の文献にはこうした方向性で民謡を解釈した事例が多数掲載されていたために、収集すべき歌の実例として『手引』に容易に引用でき、結果的に扱いが大きくなったという事情もあった。第二に、民謡を媒介として民衆の習俗に関心を持つ傾向も『手引』には見られた。だがこうしたジャンルの歌は『手引』では比較的小さく扱われていた。フランス・フランドル地方のベッケルとクスマケルの記した民謡報告の場合、『手引』で見られた第一の関心と同様にして、民謡こそ民衆の歴史の史料だとする考え方に依拠しながら、地域的固有性に関する言説が構築されていた。彼らは、遊びの歌や祭の歌などの歴史伝承詩歌以外のジャンルに属する歌の中にさえ、古代から中世のフランク人の文化の痕跡を探し求めるような解釈を記していた（第3章参照）。フランス語圏の研究者の中にもベッケルやクスマケルのように、地元の民衆の歴史を語る史料として民謡を探索し、解釈を加え、民謡や民衆のことばの起源を突き止めようとした者がいる。主にシャンパーニュ地方で活躍した、プロスペル・タルベ(1809-1871)である<sup>13</sup>。タルベは少なくとも1839年2月には、オーギュスタン・ティエリを編者として進められていた未刊行史料集成事業のための史料収集への協力を始めていた<sup>14</sup>。そのティエリの事業に対する自らの貢献をアピールしながら、1839年4月12日にタルベは、歴史研究委員会の通信委員のポストに自薦する書簡を公教育大臣へ送っている。そして早くも翌月の1839年5月18日には、ヴィルマン公教育大臣の発した大臣通達にて歴史研究委員会通信委員に任命されている<sup>15</sup>。その後もタルベはティエリの未刊行史料集成事業への協力を続けていたが、フォルトゥール調査が開始された1852年の時点では、歴史研究委員会通信委員から除名されている<sup>16</sup>。フォルトゥール調査関係の史料（歴史研究委員会議事録、書簡等）からは、タルベがフォルトゥール調査に協力した痕跡を確認できなかった。それにも関わらずタルベの事

---

<sup>13</sup> タルベは公証人の息子。パリ生まれで、ブルゴーニュ地方ヨンヌ県サンス出身の家系。23才で検事代理に就任し、1838年にランスへ配属されて以来、ランスの歴史の研究に取り組んだ。

<sup>14</sup> 1839年2月19日、公教育大臣からタルベへの書簡の写し。この書簡では、公教育大臣が仲介役となって、収集すべき史料に関して編者のティエリから出された指示を、タルベに伝えている。AN, F17/2886/1。

<sup>15</sup> 1839年4月12日、タルベから公教育省諸氏宛ての書簡。1839年5月18日付の公教育大臣通達の写しおよび同日付、公教育大臣からタルベへの書簡の写し。いずれもAN, F17/2886/1。1839年の段階では、まだ通信委員の定員が設けられておらず（第2章註12参照）、通信委員の人数は増加の一途をたどっていた。

<sup>16</sup> 1845年7月19日のタルベからの書簡で、史料収集の成果が報告されている。これが、タルベがティエリの事業に協力したことを確認できる書簡の中で、最も日付が新しいものである。この1845年7月の時点では、タルベはまだ通信委員の肩書きを保持していた（AN, F17/2886/1）。1851年1月に通信委員の定員が設けられ、通信委員の漸進的な削減が始まる。1863年、タルベは碑文・文芸アカデミーの通信会員に就任した。

例を取り上げる理由は、彼の著作が、フランス語圏の民謡集の中では異色な存在だからである。タルベは、フォルトゥール調査開始の前年である1851年に『シャンパーニュの言語史と方言についての研究』を上梓した。この著作でタルベは、シャンパーニュ地方の方言の起源と来歴を論じ、シャンパーニュ地方の民衆のことばの歴史を解明するための史料として民謡を用いている。タルベの論の概要は次の通りである。古代シャンパーニュ地方では元来、ゲルマン系のチュートン語が話されていた。そこへ南仏の言語（オック語）や北仏の言語（オイル語）が流入し、その後ローマの支配下となる。こうした来歴が、シャンパーニュ地方の方言の発音や語彙に見られる特徴に反映されている。このようにタルベは述べる。そして彼は、シャンパーニュ地方の各コミューンの民衆のことばの発音・語彙の特徴を分析している。その結果、シャンパーニュ地方固有のことばはケルトのことばとゲルマンのことばという複数の言語を受け継いでいるとタルベは考えるに至った。タルベは、「〔シャンパーニュ地方固有のことばは〕ケルト語とゲルマン語とを結束したに違いない絆だった。すなわち、中間的な方言を話していたのがわれわれの地域だったのである」と記している<sup>17</sup>。またタルベは、中世や宗教戦争期に起こった出来事等を題材とする歴史伝承詩歌を重視し、古代史に遡りつつ、フランス王権の成立とシャンパーニュ地方との関係について考察している。

地域固有のことばの言語的特徴を、地域の歴史を反映したものとして分析するタルベの論の運び方には、ほぼ同時代にベッケルが記したフランドル地方の言語史と、次のような共通点がある。第一に、地元地域の言語史を古代史から起筆している点である。ケルトとゲルマンとを結ぶ役割を果たしていた古代シャンパーニュ地方の特徴は、19世紀に至るまで地域の言語的特徴の中に生き続けており、地域の固有性をなしているとタルベは論じている。地域的固有性の淵源を古代に看取する態度は、フランス・フランドル地方の文化的起源をフランク族に求めたベッケルのそれと共通している。第二に、地域の歴史をフランス（特に王権）との関係に着目しながら叙述している点である。第三に、地元地域の言語的起源が隣接地域よりも古いということに価値を置き、強調する点である。他方タルベは、方言の衰退と政府の言語教育の方針との連関に着目して、政府を糾弾したり「方言」の教育を要求したりといったベッケルやクスマケルのような動きは、全く行なわなかった

---

<sup>17</sup> Prosper TARBÉ, *Recherches sur l'histoire du langage et des patois de Champagne*, Reims, P. Regnier, 1851, t. 1, p. xiii.



た。むしろタルベは、フランス王権とシャンパーニュ地方との間の密な関わりを強調している。

## (2) フランス語圏における、民謡の起源に対する関心の低さ

フォルトゥール調査では、フランス語圏の諸地域でも多くの歴史伝承詩歌が収集されている。だがフランス語圏の諸地域で記された民謡報告を概観すると、民謡の言語的・歴史的起源の解明を重視し、そうした起源に基づいて地元地域とフランスとの関係を論じるような記述は例外的である。地元地域の歴史を題材とする歌を記した報告や、地元地域の方言に関する考察を述べた報告はあるが、シャンパーニュ地方のタルベやフランス・フランドル地方のベッケルが行なったように、古代史に遡ってフランス国家と地元地域との関係を論じている訳では必ずしもない。むしろそのようなパースペクティヴを持つ報告は、フォルトゥール調査で得られた民謡報告全体の中では少数派である。フランス語圏やフランス語の使用割合の高い地域からフォルトゥール大臣のもとに寄せられた民謡報告の多くには、民謡の起源を解明するということに関して、以下のような3つの傾向がある。

第一に、民謡報告に記される解題には、歴史学的な情報が乏しい傾向が見られる。歴史研究委員会の正委員達が作成した『手引』では、集めた歌の歴史的な背景や起源などを記した上で報告するようにと指示している。だが実際に集まった民謡報告を見ると、歌の註釈を一切記すことなく歌詞や楽譜のみを書き付けたものが大半なのである。初等視学官の中には、歌の解題を添えることを求めている『手引』の指示を遵守するよう、小学校教師らを指導した者もいた。だがそうした指導は必ずしも奏功しなかった。例えばアルデンヌ県の初等視学官イエリオは、管轄地域の小学校教師らが作成した民謡報告を取りまとめて大学区長へ提出する際、「ある歌には歴史学的な註釈が全く添えられておらず、他の歌には不十分な註釈しか付けられていない」と、ベアニョンという元小学校教師の民謡報告に対して批判的なコメントをあえて記し、この報告の不備な点を強調して大学区長に報告している<sup>18</sup>。ベアニョン元小学校教師は、歌の歴史的な背景に関する解題を充実させるべきだとするイエリオ初等視学官の指導をあえて実行しなかったか、あるいはできなかったかのいずれかであろうが、史料からは明確な答えが導き出せない。他方、努力したにも関わらず、歌の起源を明らかにできなかったと述べているケースもある。これが第二の傾向である。起源を明らかにできなかった原因は、文献不足ゆえか、あるいは調査者の力量不足

<sup>18</sup> 1854年8月17日、アルデンヌ県の初等視学官イエリオ Hieriot から大学区長への書簡。AN, F17/3246.

ゆえなのか、本稿で参照できた限りの史料からは追究が難しい。だがそうした原因を突き止めることよりもむしろ、民謡の起源への関心が全く表れてこないような第一の傾向とは異なり、第二の傾向に属する民謡報告では、歌の起源の解明を試みて調査を行なったという事実を、民謡調査を行なった本人達が、公教育大臣や大学区長に説明しているという点にこそ注目すべきである。セーヌ＝アンフェリウール県（現セーヌ＝マリティム県）ル・アーヴル市の初等視学官は、自ら収集した5曲の民謡について、次のように述べている<sup>19</sup>。いずれもよく知られている歌に過ぎないが、調査には最善を尽くした。各歌の起源や古さについての情報を記しておいたが、よく調べたにもかかわらずここに書いた以外の情報を得ることはできなかった、と。その「情報」を簡単に見ていくと、まず、ル・アーヴルで歌われているロンド（題名不詳。歌い出しは「私は船を一艘造らせた J'ai fait construire un navire...」）は起源が不明である。次に、コー地方（ル・アーヴルやディエップ等の周辺の地域）で歌われている「ほら私の脚はこの通りあるわ Voici ma jambe」という題の歌については、「太古の昔に遡ると思われるが、時代や起源は特定できず」。ルーアンとその周辺で歌われているロンド「靴直しの親方 Le Maître savetier」という題のロンドについては、歌っている人々はこの歌の起源を知らないが、1789年の革命初期かと推定される。「ブドウ園の大農園主 Le Planteur de Vignes」という題の歌は、ソットヴィルに長年住んでいる人物から聞き取った歌だが、起源は不明だった。最後に「小さな夫 Le petit mari」という題の歌はパリからもたらされた歌で、古代に遡る歌らしいが正確な起源は誰も知らない。つまりこの初等視学官は、結局のところ、歌の起源を明らかにできるような情報をほとんど得られなかったのである。初等視学官のみならず地方在住の研究者にとっても、民謡の起源を特定するということは困難な課題だった。フォルトゥール調査以前の1845年に、『旧バザデ地方の民衆の慣習と歌』という民謡集を出版したラマルク・ド・プレザンス (1813-1880) が序文で記している内容を要約すると、次の通りである。私は、しばしば民謡がきわめて古い起源を持つらしいと聞いている。いくつかの歌は異教の時代以来遡るという。調査したにも拘らず、私は古代の刻印を示す歌を一つも見ることができなかった。だが一曲、中世の領主権を暗示していると思われる歌はあった、と<sup>20</sup>。彼

<sup>19</sup> 1854年2月3日、セーヌ＝アンフェリウール県ル・アーヴルの初等視学官から大学区長への書簡。AN, F17/3246.

<sup>20</sup> Alphonse LAMARQUE DE PLAISANCE, *Usages et chansons populaires de l'ancien Bazadais. Baptêmes, noces, moissons, enterremens*, Bordeaux, Imprimerie de Balarac jeune, 1845, p. 6. バザデ地方はジロンド県南東部のガスコニュ地方にあるが、同書収録の歌はフランス語に近いことばで歌われている。

は、内務省歴史的建造物委員会のジロンド県通信委員を務めていた。内務省や公教育省の委員会の通信委員のポストには、地元地域を代表するにふさわしい研究者が地方学術団体から選抜されて、大臣の任命を受けていた（第2章）ことから、ラマルク・ド・プレザンスは優秀な研究者だったと推測される。そのような人物をもってしても、民謡の起源の解明は必ずしも成功しなかったのだから、先述のル・アーヴルの初等視学官の場合も、単純に彼の能力不足に帰すべきではなかろう。

第三に、民謡の起源の追究に対する関心が希薄であるか、あるいは、そもそもはじめから民謡の起源を解明することを放棄すると表明しているケースがある。セーヌ＝エ＝オワーズ県<sup>21</sup>ランブイエ市の初等視学官のヴォレールは、フォルトゥール大臣への書簡で<sup>22</sup>、「ヴィヴァンディエールの出発 le départ de la Vivandière」という歌に関して次のように述べている。「この歌は、正確には、いったいどこから来たのでしょうか？私は知りません〔原文はJe l'ignoreで、「無視します」とも訳せる〕。ただ確かなことは、この歌が伝承によって保存されてきた民謡であるということと、独創的であるため貴殿〔＝フォルトゥール大臣〕や委員会諸氏が注意を払うに値する歌だということなのです。」また、ウール＝エ＝ロワール県の地方委員メルレの著作、『16世紀以前の詩人達』（初版1857年）の第1巻（1894年改訂版）序文では<sup>23</sup>、

「詩情は、心の中に詩情を抱く者ならば誰しものが持っている。われわれの田舎の黄金の平原の中にも、われわれの隣にあるペルシュ地方の森で覆われた丘にも、等しく詩情は存在する。その詩情を見つけ出すべを知っている者のために、神は、森林に住む尊大な巨人に詩情を与えたのと同じようにして、ささやかな草一茎の中にも詩情をもたらしただのである。従ってわれわれは、この貴重な贈り物がどこから来たのかを説明しようとは決してしないようにしよう」

と述べており、歌があるという事実だけ受け止めて、伝承の起源を問おうとはしない姿勢を表明している。

<sup>21</sup> パリ近郊にかつて存在した県で、県庁所在地をヴェルサイユに置き、セーヌ県を取り囲むような形状をしていた。1968年にエソンヌ県、ヴァル＝ドワーズ県、イヴリンヌ県に分割され、現在に至る。

<sup>22</sup> 1854年3月1日、セーヌ＝エ＝オワーズ県初等視学官ヴォレール Volaire から公教育大臣への書簡。AN, F17/3246.

<sup>23</sup> Lucien MERLET, *Poètes beaucerons antérieurs au XIX<sup>e</sup> siècle*, Chartres, Durand, 1894, 2 vols. メルレ (1827-1898) は古文書学校の卒業生で、シャルトルにあるウール＝エ＝ロワール県文書館の古文書管理官。

フォルトゥール調査で集まったフランス語圏の民謡報告の大半に見られるこうした傾向と、タルベやベッケルのように民謡の起源の解明、および民謡の背景となる歴史（特に古代史）を明らかにすることを重視する傾向とを比較すると、以下のような相違点が指摘できる。一点目は、フランス語圏の民謡収集では、古代史や古代の民族の言語・慣習と、地元地域の固有性との連関に対して、低い関心しか示さない傾向にあるという特徴である。二点目は、地元地域とフランスとの関係が考察されていない点である。三点目は、民謡の言語的・歴史的起源への興味が表れている記述が少なく、また、歌の起源の古さを誇る姿勢も希薄だという点である<sup>24</sup>。フランス・フランドル地方のベッケルやクスマケルの場合、民謡の起源を古代にまで遡って突き止めようとするなど、民謡の体現する地元地域の民衆の《歴史》の解明に執着していた。そうした歴史の価値を強調しながら、地域的固有性に関する言説を磨き、フランスの中のフランドル人としての自分達のアイデンティティを構築することに、彼らは没頭していたのだった。他方、フランス語圏の研究者達や学校関係者が民謡収集を行なう上で、民謡の歴史的起源の探求にはあまり熱心でなかったとすれば、では、彼らは何に主たる関心を持って民謡収集に取り組んだのか。次節では、フランス語圏の民謡報告の記述に見られる特徴を、別の角度から検証していく。

### 第3節 フランス語圏での地域意識のあり方

#### (1) 「文明」と「伝統」—フランス語圏の民謡収集を貫く対立軸

フランス語圏の民謡報告の特徴を押さえた上で、フランス語圏の民謡収集における地域的固有性に関する言説の特徴を検討する。それを踏まえて、フランス語圏に住む研究者達や学校関係者達の地域意識のあり方について考察していく。

フォルトゥール調査が未刊行史料集成事業の一環として実施された背景の一つには、口承の「伝統」が消滅へと向かいつつあるものとして現状を認識し、伝統の喪失を危惧する、一種の危機感があつた。フォルトゥール大臣はルイ＝ナポレオン大統領宛ての民謡収集建白書の中で、「時とともに〔民謡の〕豊かさは日に日に増しますが、われわれの祖国の栄光と不幸とに関する多くの証言〔＝民謡〕を急いで集めようとしなければ、残念な

---

<sup>24</sup> 例外的に、フランシュ＝コンテ地方ドゥー県の通信委員リシャール神父が提出した地元の方言に関する考察ならびに民謡報告では（1853年10月7日、8頁の手稿小冊子。AN, F17/3246）、フランシュ＝コンテ方言にはローマの言語とともにアルメニア、アラブ、ペルシア、コプトの言語の要素が見られ、隣接する他地域よりも古い語彙や発声法が残存しているという見解を強調している。



がらこれはもうじき消えてしまうことでしょう」と記し、こうした事態に早急に手を打つ必要があると訴えかけている<sup>25</sup>。フォルトゥール調査以前にフランス語圏で刊行された民謡集の中にも、こうした危機感の表れた記述が見られる。例えば、ラマルク・ド・プレザンスの前出の1845年の著作では、次のように記されている。

「今日では、抑制のきかないほどにまで贅沢を愛する趨勢が大都市から溢れ出て、田舎の奥地にさえ、なだれ込むに至ってしまった。一つ、また一つと、古い習俗が打ち捨てられていくのをわれわれは目にする。数年のうちに、すべての民間伝承は消滅するだろう<sup>26</sup>。」

民謡が、地域的な特徴や固有性を喪失する危機に瀕していると述べられている。また、ノルマンディー地方のマンシュ県に住み、歴史研究委員会の通信委員を務めたル・エリシェ(1812-1890)著の『ノルマンディーの文献』(1847年)序文では、「今日、ノルマンディーがますます国家的な統一性 *unité nationale* に浸食され、諸地方 *provinces* の精髓が著しく失われてしまった」と記され、地域的固有性が既に「著しく」喪失されてしまったと断じている<sup>27</sup>。地域的固有性が希薄になってきているというこうした認識は、フォルトゥール調査の民謡報告の中にも見られる。例えばシャラント＝アンフェリウール県大学区長は、フォルトゥール大臣に宛てた書簡で次のように述べている<sup>28</sup>。全国の民謡を収集するという計画をナポレオン1世が初めて構想した時代ならいざ知らず、わが地方の田舎では、40年前頃から言語も歌も服装も変化し始めてしまった。守護聖人、農業、家族の祭などが途絶し、そうした場で歌われる歌も消えていった。1815年の時点では16世紀の語彙が存続していたが、1850年代の現在では、古来の語彙は現代フランス語の単語に置き換わってしまった、と。フランス東部のフランシュ＝コンテ地方ドゥー県通信委員のリシャル神父は<sup>29</sup>、「1世紀前より、農村の上流社会の人々の間では、都市の上流社会の人々と同様にして、方言が使われなくなった。だが農業の仕事に専心している村民達や町民達は、方言

<sup>25</sup> Hippolyte FORTOUL, « Rapport au Prince Président de la République française », s. d., in *Bulletin*, t. 1, p. 21.

<sup>26</sup> LAMARQUE DE PLAISANCE, *Usages et chansons populaires de l'ancien Bazadais*, pp. 6-7.

<sup>27</sup> Édouard LE HÉRICHER, *Bibliographie normande*, Avranches, Imprimerie de E. Tostain, 1847. ル・エリシェはアヴランシュ考古学協会会長。ル・エリシェの研究分野は多岐にわたり、歴史学や考古学と並んで、植物学の著作も残している。例えば、地元ノルマンディー地方に自生する草花を中心に、植物名の語源を論じた次の著書。 *Philologie de la flore scientifique et populaire de Normandie et d'Angleterre*, Coutances, imprimerie de Salettes, 1883. ル・エリシェは1848年7月4日付で歴史研究委員会通信委員に任命されている。AN, F17/2866/1.

<sup>28</sup> 1853年12月21日、シャラント＝アンフェリウール県大学区長から公教育大臣への書簡。AN, F17/3245.

<sup>29</sup> 1853年10月7日、リシャル神父による地元の方言に関する考察ならびに民謡収集の報告。AN, F17/3246.



を日常的に使い続けている。少なくとも、フランシュ＝コンテ語が完全に理解されないことはない」と述べ、農村でさえ一部の人間は方言の使用を止めているものの、日常的に方言で会話する人々はまだ存在している状況だと説明している。だが歌に関しては、話し言葉以上に衰退の程度が著しいとリシャル神父は言う。「18世紀の間は、頻繁に方言で民謡が歌われていた。[...] だが50年ないし25年前より、フランシュ＝コンテでは方言の歌を歌う慣習がほとんど完全に失われてしまい、戦争歌、あるいは、崩れたフランス語で歌われる愛の歌しか耳にしないようになってしまった」と彼は記している。

地元地域に固有なことばが、会話や歌で用いられる機会が減少している要因について、歴史研究委員会の地方委員・通信委員や、大学区長や初等視学官といった人々は、必ずしも追究してはいない。そのような中、ソンム県大学区長代理（アミアンの大学区視学官ピシヤール）は、自らの管轄地域には地域的固有性が乏しいとの見解を示したあと、その理由について、彼なりの解釈を次のように説明している<sup>30</sup>。

「ピカルディー地方には、特別な出来事の舞台となったような古代遺跡がわずかしかなかった。その原因は、一方では、首都の近隣にあるせいでフランスの他の諸地方 *contrées* よりも早いうちから、ピカルディー地方に文明が浸透したということがあります。そのせいで、いくつかの《くに》 *le pays* でありふれているような、多かれ少なかれ歴史上の真実を主題とした伝説や民謡が、普及していくのが妨げられたに違いありません。現在でもソンム県では、地域固有の歌が一曲も存在していないように見受けられます。ソンム県で歌われている歌は総じて、フランスのあらゆる部分に属する歌〔フランス中どこでも歌われている歌〕なのです。」

---

<sup>30</sup> 1854年8月25日、ソンム県大学区長代理（大学区視学官）ピシヤールから公教育大臣への書簡。AN, F17/3245.

このように、「伝統」が衰退したため地域固有の民謡はもはや収集できないとして現状を分析している書簡は、フォルトゥール大臣のもとに多数寄せられている<sup>31</sup>。「伝統」を脅かす要因は、「文明」や「近代」といった語で説明されている。これに対し、前章で見たフランス・フランドル地方のような地方言語圏の場合、地元地域の民謡を脅かす存在として通信委員らが名指ししていたのはフランス政府であり、特にフランス語使用を推進する言語政策に他ならなかった。ベッケルやクスマケルは、フランス（王権や政府）と地元地域との関係に対立的に捉えていた。彼らは、地域的多様性を包含する形で、フランスとしてのまとまりを形成すべきだとする国家観を持っていた。他方、フランス語圏の民謡報告は、地域とフランスとの関係を論じていない。むしろパリから侵入してくる「文明」と、地元地域の「伝統」との対立関係が強く意識されている。

## (2) フランス語圏で収集された民謡の傾向

フランス語圏では、地域的固有性は具体的にいかなる要素から構成されると記述されているか。フォルトゥール調査の報告や、ならびに同時代の地方在住の研究者達が収集した民謡の傾向をまず押さえた上で、地方委員・通信委員のような地方在住の研究者や学校関係者が、地元地域の民謡の固有な特徴として何をどのように記したかを検討していく。フランス語圏のフォルトゥール調査報告で多数を占めるジャンルは、大きく分けて次の二つである。第一に、宗教歌である。歴史研究委員会の作成した『手引』の「I. 宗教的な詩」に該当する。クリスマスの時季に歌われる歌などのキリスト教の歌はもちろんのこと<sup>32</sup>、民間信仰的な内容の歌もある。クリスマスの歌の多くはキリスト教的な祈祷の歌であるのに対し、クリスマスの時季に特有の子どもの習俗に関する歌を報告した、珍しい例が、

---

<sup>31</sup> 民謡の伝承の衰退を伝える記述は、フランス語圏の他にはオック語圏でも多く見られる。例えばラングドック地方オート＝ガロンヌ県ヴィルフランシュ郡およびミュレ郡を担当していた初等視学官キュルス Curs から公教育大臣への書簡（1853年12月16日付）では、「私が毎年巡回しているこれら2つの郡を含む《くに》le pays は、完全に農業〔をしている《くに》〕です。ここでは何年か前から、古い伝統が少しずつ消えていっています」と述べている。だがこの一節の後、フランス語圏の事例では見られない主旨の文章が続く。「そうであるにもかかわらず、いくつかの〔破損につき欠落〕は民衆詩歌の形で表現〔翻訳〕され、未だに収集されたことがありません。大臣に興味を持って頂くに値するような、この《くに》のいくつかの古い詩歌をお送りできれば幸いと存じます」。キュルス初等視学官は、自らの管轄地域の「古い伝統」は消滅に向かっているものの、まだ完全には消え去っていない状況にあると判断し、民謡を収集できる見込みがあると考えているのである。この点でフランス語圏の報告とは異なる。実際、オート＝ガロンヌ県からは、歴史研究委員会の例会で高い評価を得た民謡報告が提出されている。AN, F17/3245.

<sup>32</sup> ただし地方言語圏でもクリスマスの歌は多く収集されている。そもそもフランスの民謡にクリスマスの歌は多い。

ウール＝エ＝ロワール県モンルイユの小学校教師ルフロワの報告に含まれている<sup>33</sup>。ルフロワは述べる。「モンルイユや特にノルマンディーでは、子どもたちが威勢良く木の植え付けに出かけ、次の歌詞を歌います。

『さらばクリスマス

復活祭よ、おいで

リンゴの木よ、実を付けろ

ナシの木よ、実を付けろ

アンズの木よ、実を付けろ

サクランボ〔セイヨウミザクラ〕の木よ、実を付けろ

うちの畑にや

野ネズミ達がいっぱいだ

やつらのひげを燃しちゃうぞ

小骨になるまで燃しちゃうぞ』」

この歌のヴァリエーションもあわせてルフロワは報告している。

フォルトゥール調査と同時代に出版された民謡集においても、民衆の信仰に関わる歌が充実している。例えば、リボー・ド・ローガルディエールの著作『ベリー地方の数曲の民衆祈禱について』（1856年）は、宗教的・民間信仰的な内容の歌だけを集めている<sup>34</sup>。同書の主な内容を並べると、

- ・聖母や聖人に捧げる祈り（羊飼いが聖マルグリットを拝みながら歌う歌など）
- ・就寝前の祈り（両親を亡くした子が唱えていた言葉や、守護天使を女性化して祈りを捧

<sup>33</sup> 日付不明（ウール＝エ＝ロワール県大学区長の書簡から推定すると1854年2月頃か） ウール＝エ＝ロワール県モンルイユの小学校教師ルフロワ Leffroy からの民謡報告。AN, F17/3246.

<sup>34</sup> Charles RIBAUT DE LAUGARDIÈRE, *Lettres à M. le rédacteur du droit commun, sur quelques poésies populaires du Berry*, Bourges, Imprimerie de E. Pigelet, 1856. リボー・ド・ローガルディエールは弁護士でシェール県歴史委員会委員。同書序文に記された、同書の出版の経緯は次の通り。ベリー地方在住の研究者ノワールヴァル Noirvalle氏が、1853年10月に、ブルジュで発行されている『普通法』誌に民謡収集の成果を発表した。リボー・ド・ローガルディエールはこの記事に興味を惹かれ、自ら収集した歌のテキストとノワールヴァル氏の記事の歌のテキストとの比較を行なうとともに、ノワールヴァル氏がまだ発表していない歌を同書で初めて活字化した。リボー・ド・ローガルディエールは、ジョルジュ・サンドの編纂したベリー地方の伝説集から影響を受けたとも述べている。また、この成果をフォルトゥール調査に提出する予定だと記しているが、議事録や国立古文書館のフォルトゥール調査関係文書ではその記録を確認できなかった。仮に彼がフォルトゥール調査終了後の1857年5月以降に提出したとすれば、国立古文書館ではリボー・ド・ローガルディエール氏の民謡報告に関する記録が、フォルトゥール調査関係のファイル以外の場所に混入する形で分類されている可能性がある。

げている地域の例など)

- ・各種の祈り（呪文のことば。狂犬とでくわしたとき、雷から身を守りたいとき、熱を下げたいとき、子どもが病気のときなど）

- ・伝説（サンドの伝説集でも紹介されている有名な伝説「白い女」など）

- ・悪魔や魔女などについての話

キリスト教に由来する祈祷だけでなく、民間信仰的な祈祷も含み、民衆特有の信仰心や世界観や思想が示されている。他方、ベリー地方の固有性を強調するような記述は殆どなく、地元地域とフランスとの関係は全く論じられていない。

フランス語圏のフォルトゥール調査報告で多数を占めるジャンルは、第二に、民衆の習俗に根差した歌である。これは、『手引』後半の「VI. 生涯の様々な出来事」以降の各カテゴリーにほぼ該当する内容となっている。その記述の特徴は以下の四点に整理できる。一点目は、人生の節目となる儀礼などに用いられる歌である。例えば、洗礼や結婚式や埋葬で歌われる歌である。ソーヌ＝エ＝ロワール県サン＝ボネ＝ド＝ジュ St. Bonnet de Joux在住のラヴァリ夫人が<sup>35</sup>、サントル地方の諸県で集めた数曲の民謡のうち、結婚式前夜に新婦の家の玄関前で歌われる民謡が、歴史研究委員会本部の注目を惹いたと議事録には記されている<sup>36</sup>。また、フォルトゥール調査の報告以外の例では、ラマルク・ド・プレザンスの前出の民謡集が特に、農村民衆の慣習や民謡を詳細に描写している。洗礼、結婚式、埋葬などの場面ごとに章を設け、それぞれの儀式的流れを追いながら、場面ごとに民謡の歌詞を紹介する構成となっている。洗礼を例にとると、教会での儀式が終わったら、

「代父が鐘を鳴らす。そうしないと、赤ちゃんが耳の聞こえない子になるかもしれないのだ。教会を出る時、次のように歌い始める。

Nous l'ats baillat coume un gigiou ; Bous lou tournen chrétien de Diou.

（仏語訳） Vous nous l'avez donné comme un .....; Nous vous le rendons chrétien de Dieu.

私〔＝ラマルク・ド・プレザンス〕には、gigiou という語の意味が分からない。joujou〔おもちゃ〕か、juif〔ユダヤ人〕か？この歌を私に歌ってくれた女中にgigiouの意味を聞くと、『分かりません。retrucの代わりの言葉ではないでしょうか』と答えた。retruc

<sup>35</sup> 1853年11月4日付の書簡。歴史研究委員会からラヴァリ夫人 Mme A. Ravaryへの書簡の写し。AN, F17/3245.

<sup>36</sup> 1853年12月12日の文献学部門部会議事録。 *Bulletin du Comité de la langue, de l'histoire, et des arts de la France*, t. 2, Imprimerie impériale, p. 29.



という語も方言で、《音の繰り返し》という意味である。方言の言語 la langue patoise は何と豊かで、表現力に富むのだろう<sup>37</sup>！」

民謡を書き留めたラマルク・ド・プレザンスには、民衆の用いることばの中に理解できない語があつたのである。

人生の節目となる場面で歌われる歌の中には、共同体の秩序を乱すような婚姻等を行なう者達への制裁として行なわれた、シャリヴァリの歌も含まれている。ウール＝エ＝ロワール県〔パリ南西、サントル地方〕のメジエール＝アン＝ドウルエ Mézières-en-Drouais の、マルソースー Marsauceux というコミューンで収集した歌に、小学校教師（氏名不詳）は丁寧な譜面を付けて報告し<sup>38</sup>、次のように記している。

「次の歌は、125年前に男やもめとマルソースーの未亡人とが結婚した際に作られました。それ以来、似たような結婚の際には、シャリヴァリでこの歌が歌われます。

『一人の年寄り男がいた

このくにの このくにの

白髭にごま塩頭の ごま塩頭の

彼だって、自分が結婚する時にはシャリヴァリして欲しいと思ってる

シャーリーヴァーリー』（以下、6番まで続く）」

二点目は、農作業の歌、および同業組合の守護聖人の祭の時の歌などの職人の歌である。ウール＝エ＝ロワール県で収集された歌（収集者不明）に、次のような歌がある<sup>39</sup>。

「ダンピエール＝シュル＝ブレヴィ Dampierre-sur-Blévy〔現マイユボワ Maillebois〕のグーピル Goupilにある鍛冶工場の労働者達は、聖エロワ〔鍛冶屋の守護聖人〕の日にこの歌を歌います。

『今日は聖エロワの日

みんな、古いしきたりに従おう

槌に花を咲かせるべし

槌にワインを与えてやろう（繰り返し）

槌に花を咲かせるべし

---

<sup>37</sup> LAMARQUE DE PLAISANCE, *Usages et ...*, pp. 12-13.

<sup>38</sup> 初等視学官・大学区長を介して、1854年3月15日付で公教育大臣に提出された民謡報告。楽譜付。AN, F17/3246.

<sup>39</sup> ドルー郡初等視学官・大学区長を介して、1854年3月15日付で公教育大臣に提出された民謡報告。AN, F17/3246.

槌に新酒のワインを与えてやろうぜ〔1番〕

鍛冶屋達よ、掃除をせねばならぬ

道具は全部撤収だ

道具が絶対に音を立てないようにな

俺たちは夕飯を食いたい（繰り返し）

いっさい音を立てるんじゃないぜ

俺たちはここで夕飯を食いたいんだ〔2番：全7番〕』

三点目は物語性のある歌で、『手引』の「V. 物語詩」に該当する内容である。そして四点目は、ロンド（輪舞曲）である。舞踊のための歌の中でもロンドは特に多数集まったため、フォルトゥール調査の成果として最終的にフランス国立図書館手稿部に収められた民謡集『フランスの民衆詩歌』では、『手引』で分類された13のカテゴリーに加えて、「ロンド」の項目を新設している。例えば、ウール＝エ＝ロワール県シャルトルの初等視学官ピレが提出した自作の民謡集（全58曲）の章立ては以下のようになっており、ロンドの多さが突出している<sup>40</sup>。

- I. 宗教的なテーマ（4曲） II. 戦争の歌、軍隊の思い出（5曲） III. 結婚式の歌（6曲）  
IV. 伝説、教訓、物語（15曲） V. その他（5曲） VI. ロンドとその他の遊び（23曲）

### (3)地域の固有性—農村民衆の習俗の中に

フランス語圏の民謡の解題の叙述にも、農村民衆の習俗への関心の高さが表れている。フランス北西部アングーモワ地方の民謡を集めたカステーニュの『アングーモワ地方の6曲の民謡』（1856年）という、フォルトゥール調査と同時代に刊行されたフランス語方言の民謡集では<sup>41</sup>、ユグノー関係の歌（3曲）についての解題の中で、歴史的な背景をほとんど取り上げていない。むしろ著者の興味は、民謡を媒介にして民衆の習俗について知ることの方に注がれる。例えば「ジャン・ショヴィノーのユグノー L'Huguenote de Jean Chauvineau」という歌の解題では、歴史的背景について「この興味深い歌は確実に、16世紀の宗教的な内乱〔宗教戦争〕あるいは17世紀に遡る」としか述べられず、代わりに、

<sup>40</sup> ピレPilletが1854年2月10日付で提出した民謡集（手稿。紐綴じで製本）。AN, F17/3246.

<sup>41</sup> Eusère CASTAIGNE (recueillies et annotées par), *Six chansons populaires de l'Angoumois*, Angoulême, Imprimerie de J. Lefraisse et c<sup>ie</sup>, 1856. カステーニュはアングレーム市図書館員。1858年8月26日付で歴史研究委員会通信委員に任命されるが、1863年に通信委員リストから除名される。カステーニュは同年3月23日の公教育大臣への書簡でこの除名処分に抗議して、報告を提出できない日々が続いていたが、多忙な業務の傍らで史料収集は続けてきたと訴えた。これが奏効し、同年4月30日付で再び通信委員に任命されている。AN, F17/2843.

「この歌は、アングーモワ地方および近隣諸地域で非常に広まっている、ある台所用品の名称の語源をわれわれに証明している。それは一種の深鍋で、3本ないし4本の足があり、〔...〕」と、民謡の歌詞の内容から、民俗に関する情報を得ることに解釈の力点が置かれている。

フランス語圏の研究者達は、たとえ地理的に近接していても、民謡に歌われた民衆の習俗には相違点が見られるということに注目した。例えば前出のラマルク・ド・プレザンスは、

「農民は、大都市の住民達と同じように生まれ、結婚し、埋葬される。〔...〕だがその形式のなんと異なることか！慣習は土地によって異なっているのだ。〔...〕各県、各郡、各コミューンごとにヴァリエント〔異文〕がある」

と記している<sup>42</sup>。フォルトゥール調査で集まった民謡報告の中にも、コミューンごとの細かな相違点を重視する姿勢が表れている。ロワレ県の大学区長の書簡が、その好例である<sup>43</sup>。この大学区長はフォルトゥール大臣に、管轄内で集まった民謡を自らがあらかじめ選別することはせずに、全ての報告を大臣へ提出するという趣旨の断り書きをしている。フォルトゥール調査では、大臣の目に触れるに値しないと大学区長が判断すれば、民謡報告を中央を上げずに大学区で留め置く措置がしばしば取られていた。このロワレ県大学区長は、自分はそのようなことはしないとあえて宣言したのである。彼はその理由を次のように述べる。

「なぜなら、いかにこうした歌がすでに知られていると言えども、地域的な〔固有の〕想像力、あるいは地域的な感情に着想を得たヴァリエントを含む歌があるからだ。」

同一の歌のヴァリエントは、それぞれの地域の固有性を示しているとする考え方に基づいて、同じ県内とは言えども、わずかな相違点を見逃すべきではないと、このロワレ県の大学区長は判断したのである。また、ドゥー県通信委員のリシャル神父は、フランシュ＝コンテ地方の方言について研究した成果を、民謡収集と共にフォルトゥール大臣へ送っている<sup>44</sup>。その報告でリシャル神父は、方言の語基や語尾や発音などを分析して、ドゥー県内のコミューンごとの微妙な相違点を明らかにしている。前節で取り上げたシャンパーニュ地方の研究者のタルベも同様に、地元地域の方言論を、コミューンごとに執筆し

<sup>42</sup> LAMARQUE DE PLAISANCE, *Usages et ...*, pp. 5-6.

<sup>43</sup> 1854年5月22日、ロワレ県大学区長から公教育大臣への書簡。AN, F17/3246.

<sup>44</sup> 1853年10月7日、リシャル神父による地元の方言に関する考察ならびに民謡収集の報告。AN, F17/3246.

ている。彼はシャンパーニュ地方の各コミューンの発音や、動詞の活用や、言い回し等の相違点を分析し比較して、コミューン別の小辞典の形にまとめあげた<sup>45</sup>。

以上のように、フランス語圏の民謡収集や方言研究では、習俗や言語（発音等）の特徴を細かに観察し、コミューンごとの差異を検出して、各コミューンの固有性を強調するという特徴が見られる。地域的なまとまりは、コミューンを単位とした非常に小規模なものとして意識されていた。前章で見たフランス・フランドル地方の場合は、フランドル言語圏の中のフランス領に属する地域を単位として《われわれ》意識が形成されており、フランス国内外のその他の諸地域の《彼ら》との差異を明確化することを通じて、《われわれ》の言語的・文化的固有性や、《われわれ》の民謡に特有な歴史学的・文献学的な価値の高さを強調していた。他方、クスマケルやベッケルは、フランス・フランドル地方内部の差異に意識を向けることはなかった。彼らは、フランス・フランドル地方という《われわれ》を一つの均質な地域として表象していたのである。これに対し、フランス語圏の民謡収集を行なった地元地域の研究者達や学校関係者は、県内、あるいは地方（旧州）の内部での民謡のヴァリエーションの豊富さに目を向けた。そして彼らは、民謡の歌詞の内容や民衆のことばに見られるコミューン同士の相違点を、コミューンごとの固有性として捉えるような記述を残した。フランス語圏の民謡収集においては、地域意識は地域の外部である《彼ら》との比較や対抗関係によって形成されることはなく、コミューンを単位とする狭小なまとまりごとに地域的固有性が細分化される形で認識されるという特徴が見られた。

## 章括

フランス語圏における地域的固有性についての言説の形成に関する先行研究では、民謡収集の扱いが少なかった。だがフランス語圏で民謡収集が行なわれていなかった訳ではなかったという点を、本章ではまず確認した。フォルトゥール調査以前には、民謡収集が盛んと言える状態になかったフランス語圏の諸地域では、民衆の歴史を語る史料として民謡を捉えるような考え方よりも、『手引』後半で示されていたような、農村民衆の思想（主に信仰心）や習俗を、民謡を媒介にして叙述することに力点が置かれながら、民謡報告等が記された。そして、民謡収集を行なった者が民衆のことばの一部を理解できなかった例

---

<sup>45</sup> TARBÉ, *Recherches sur...*, t. 1, pp. 89-170. 同書の« Monuments des Patois usités en Champagne aux XVIII<sup>e</sup> & XIX<sup>e</sup> siècles, 1671-1851 »と題する第1巻後半部の中に、コミューン別にまとめた簡単な方言辞典（主要動詞の活用、標準フランス語の語彙と方言の語彙との対応表）が収められている。



があった通り、民謡を収集した者が自分自身のアイデンティティを民謡に仮託して構築するという事例は、フランス語圏のフォルトゥール調査結果の中には見られなかった。

フランス語圏の諸地域に住む研究者や学校関係者らの地域意識のあり方の特徴について、彼らが残した民謡に関する記述から読み取った結果、次の2点の知見を得られた。第一に、地域的固有性についての言説は、農村民衆の「伝統的な」ことば・習俗・慣習・信仰心などに立脚する形で構成されていたという点である。その際の「地域」の枠組は、コミューン単位にまで細分化されていたという特徴が見られた。第二に、地元地域とフランスとの関係は何らかの形で意識している民謡報告の類は、フランス語圏では、タルベの著作を例外としてほとんど見当たらなかったという点である。フォルトゥール調査で集まった民謡報告や同時代の民謡集では、民謡や方言などの民衆の口承を「文明」あるいは「近代」に抗する、地域固有の「伝統」として捉える言説が顕著であった。フランス語圏の民謡報告等では、「文明」あるいは「近代」こそが民衆の口承という「伝統」を脅かす存在だとする構図で語られていた。これに対し、前章で見たフランス・フランドル地方のような地方言語圏では、「国家」によるフランス語化に「地域」の言語・文化が抗するという構図で語られていた。地方言語圏について見られた「国家」と「地域」との対抗関係が、フランス語圏では、農村民衆の習俗の観察を基に「伝統」と「近代」との対抗関係に置き換えられた形になっているということが、本稿の検討の結果、明らかとなった。フランス語圏の研究者達にとってはフランスという国家への帰属が自明だったため、地域と国家との間の緊張関係という争点を見いだしにくかったのではないかと推察される。だが、民謡収集に着目するという方法ではこれ以上の論証を行なうことは困難であるため、仮説として呈示するにとどめざるをえない。地方言語圏の研究者達に関しては、民謡収集を通じて地域意識と国民意識との関係のあり方を明らかにし、研究者達自身のアイデンティティの形成過程を看取できるなど、民謡収集に注目するという方法が非常に有効だったが、フランス語圏に関しては、研究者達における地域意識と国民意識との関係を詳らかにする上ではこの方法には限界があるということが見えてきた。地方言語圏の民謡収集とフランス語圏の民謡収集との間でのこうした相違点を具体的に指摘できたことは、本稿で得られた収穫の一つである。今後、フランス語圏における地域意識と国民意識との関係のあり方について新たな角度から検討していくにあたり、フランス語圏では地方言語圏とは異なるあり方で地域意識と国民意識とが結びついていた可能性を念頭に置いて、仮説を立てていくことができる。

ただ、地方在住の研究者や学校関係者らフォルトゥール調査に協力した者達の全員が、農村民衆の伝統を維持することを支持していたとは限らないという点には注意が必要である。初等視学官や小学校教師らの中に、民謡が価値ある「記念物」だと主張する公教育大臣や歴史研究委員会の方針には懐疑的な心情を持ちながらも、公教育大臣や大学区長の命令には逆らえずに、不本意ながらも民謡を収集していた人物がいたかもしれない。だがたとえ存在していたとしても、彼らはそうした心情を文字に残すことは控えたのかもしれない。実際にそのような記述は、歴史研究委員会の秘書の手で整理されたフォルトゥール調査関係史料（国立古文書館所蔵）の中には残されていない。一切の解題も添えられずに、ただ歌詞のみが専ら書き連ねられている形式の民謡報告からは、記述した者の考え方を読み取ることが困難である。こうした史料の中には、民謡という「伝統」を保持しようと民謡収集を行なうことへの懐疑的な声が込められている可能性もあるだろう。フランス語圏における地域意識と国民意識との関係を明らかにするためには、こうした声にも耳を傾ける努力が必要となる。

## むすびに

### 1 要約

本稿は、19世紀（特に第三共和政以前の時代）のフランスにおける民謡収集と地域意識の形成との関係について考察することを目的としてきた。フランスでは、国民意識の形成と民謡等の民衆の口承の収集・保存との関係が希薄だと先行研究では語られてきた。だがこうした見解は、フランスの例外性を指摘するのみに終始している。本稿では、民謡収集の具体的な局面を分析することを通じ、こうした見解とは異なる歴史像を示す試みを行った。そのために主たるフィールドとしたのは、政府主導の全国民謡収集事業のフォルトゥール調査である。この民謡調査を取り上げた理由は、次の2点にある。第一に、公教育大臣、歴史研究委員会、地方の協力者達といった、政府と地方とのそれぞれの観点から分析を行って一つの事案について立体的に考察することを可能とする、希有な事例だからである。第二に、政府の文化遺産保存政策としての民謡収集に協力するという行為が、地方の研究者らにとっては、地元地域と国家との関係を考える契機となったのではないかとの仮説を立てたためである。近年の研究動向では地方に住む研究者に注目が集まっており、「地方エリート」が地方学術団体で行なっていた諸々の活動を分析することを通じて彼らの地域意識の形成過程を明らかにし、19世紀フランスにおける地域と国家との関係を捉え直していく試みがなされている。本稿でもこうした問題関心を共有し、フォルトゥール調査における地方在住の研究者達の活動を主に分析した。

本稿の大まかな構成を振り返っておく。第1章および第2章では、フォルトゥール調査の性格を把握することを主たる目的とした。先行研究で論じられてきたフォルトゥール調査像を再検討し、新たな見解を呈示するべく、公教育大臣や公教育省歴史研究委員会に着目しながら論述した。第3章および第4章では、地方在住の研究者や学校関係者ら、地方で地元の民謡を収集した者達に焦点を絞り、彼らが民謡に関して残した記述（フォルトゥール調査での民謡報告や刊行された民謡集）を分析した。そして、地方言語圏とフランス語圏とを比較する形で、地域意識のあり方に関する言説の特徴を論じた。

フォルトゥール大臣と歴史研究委員会の立場をそれぞれまとめておくと、まずフォルトゥール大臣に関しては、公教育省で1830年代以来実施してきた未刊行史料集成事業の軌道修正を図り、新機軸を打ち出した。すなわち、公教育省の委員会から科学関係の部門を排し、詩歌・芸術関係の「記念物」の収集・保存を重視する方針へと委員会を改組すると

共に、民謡収集を開始し最重点項目に位置付けた。フォルトゥール大臣自身、こうした民謡収集重視の方針はルイ＝ナポレオンの意向に沿ったものだと説明していた。次に歴史研究委員会のパリの本部（例会を運営する正委員達）は、ルイ＝ナポレオンや大臣の意図を汲もうと努力していた。例会の議事録には、法令の文言に忠実に民謡収集計画の方針を立てようと委員達が努めていた様子が記されている。だが、大統領や大臣の意図を理解するための手がかりは乏しく、「民謡」という語の解釈やフォルトゥール調査における民謡収集の方針をめぐり、委員同士の論戦が生じる展開となった。歴史研究委員会本部が立てた民謡収集の方針や月例会での民謡報告審査には、大統領や大臣の指示が直接及ぶことはなく、歴史研究委員会の正委員達が大統領や大臣の意図を解釈・推測した成果であり、フォルトゥール調査の実際の運営は、彼ら正委員達の手任せられていた。彼らは、民謡とは民衆の体験した歴史、あるいは民衆特有の思想（主として信仰心）を示す「史料」だとする考え方にに基づき、民謡収集の指揮を執った。委員会ではフランス全国の歌をジャンル別に整理して、フランスの民謡の全体像を示す計画を立てたが、フォルトゥール大臣の死亡、そして編纂の途中で主要な編纂担当者の死亡を受けて、計画は変更され、民謡報告の一部は単に県別に整理されて終わった。

本稿で明らかにした事柄は、以下の4点に整理できる。第一に、フォルトゥール調査における「民謡」に対する関心のあり方である。先行研究ではフォルトゥール調査をフランス民族音楽学の始点と位置付け、旋律の収集を奨励した初の大規模な民謡収集という点を、フォルトゥール調査の特徴として特に強調して論じてきた。だが歴史研究委員会の議事録や『手引』を読解したところ、フォルトゥール大臣の立てた民謡収集の構想や歴史研究委員会の例会での議論の中では、音楽的な関心よりも、歴史学的・文献学的関心の方が大きな位置を占めていたことが明らかになった。旋律の収集に関する指示など、『手引』に見られる音楽学的内容に関する記述は、歴史研究委員会の本部（例会に出席する正委員達）から出た意見ではなく、実質的にクスマケルが提案した意見が通った結果なのだった。旋律を重視する意見を歴史研究委員会の正委員達が採用したこと自体には意味があるが、音楽学的関心がフォルトゥール調査の基調を成していた訳ではない。この点は、フランス政府の文化遺産保存政策の特徴を捉える為の鍵として、明確に押さえておくべきだと本稿では考えた。歴史研究委員会は、民謡は民衆の歴史が刻み込まれている「史料」だとする考え方に則り、調査の指揮をとった。実際、フォルトゥール調査はそもそも、公教育



省で七月王政期以来継続されてきた、未刊行史料集成事業の一環として実施されたのだった。

本稿で明らかにした第二の点は、文化遺産保存政策における政府と地方との関係である。1980年代から1990年代にかけて発表された諸々の先行研究は、中央集権的な政府と地方学術団体との関係に対立的な構図で論述していた。そのような中で、フォルトゥール調査の際に全国に張り巡らされた民謡調査網についても、従来の研究では、中央集権的な政府に既に備わっている機構を利用して全国調査が実施されたと捉えられるにとどまり、調査網は実際にはどの程度、どのようにして機能したのか、あるいは、各地の調査員はどのようにして民謡の調査報告を記したのかといった点について、具体的には検討されてこなかったのである。本稿では、こうした点を明らかにすることがフォルトゥール調査の性格を理解する上で重要と判断し、フォルトゥール調査の民謡調査網、すなわち歴史研究委員会の正委員から成るパリと、地方学術団体に所属する研究者達から選抜された歴史研究委員会地方委員・通信委員との関係を分析した。その結果、1830年代から1850年代頃の文化政策においては、政府は必ずしも地方に対して強権を発動できる訳ではなかったということが分かった。歴史研究委員会の地方のメンバー達は、委員会の実施する諸事業の中から、各人の裁量で各自が研究協力をする事業を選択する自由を持つなど、自立性を確保していた。つまりフォルトゥール調査は、歴史研究委員会の地方委員・通信委員の立場から見れば、民謡収集に興味がある人だけが協力すればよい事業—逆に言えば、興味がなければ協力しなくてもよい事業—だった。フォルトゥール大臣は民謡収集を、歴史研究委員会の諸事業の中の最重点項目に位置付けていたが、彼の熱意と地方のメンバー達のこうした認識との間には温度差があった。フォルトゥール大臣は、地方委員・通信委員では網羅しきれない調査網の穴を埋めるべく、初等視学官や小学校教師ら学校関係者の働きに期待し、殆ど強制的に動員した。従って、中央集権的な政府が組織的に民謡収集を実行したという、これまでの研究で語られてきたフォルトゥール調査像は、学校関係者に関しては言い得ているが、歴史研究委員会の地方委員・通信委員に関しては、地方の研究者達自身が自発的に選択し、協力を買って出た結果なのだった。フォルトゥール調査は、必ずしも政府の強制の産物だった訳ではない。

では、地方の研究者達にとって、フォルトゥール調査に協力することにはいかなる意味があったか。この問いかけには、本稿で明らかにした事柄のうちの三点目が関わりを持っている。民謡収集と地方在住の研究者のアイデンティティの形成との連関を、フランス・

フランドル地方の地方委員・通信委員の二名（ベッケル、クスマケル）を取り上げて論じた。ベッケルもクスマケルも共に、政府によるフランス語浸透策への抵抗意識を持っていた。ベッケルは、19世紀の公教育省が基本的にフランス語の《浸透》を図り、初等教育でのフランス語教育を強化する政策を打ち出してきた中で、地方言語や「方言 patois/idiomes」で歌われる民謡の歌詞を、原語の発音に忠実に表記して保存するという方針で全国の民謡を収集するという事業は画期的だとして称揚した。彼は、フォルトゥール調査が地方言語を生かすための、地方言語保存政策として行なわれていると解釈した。フォルトゥール調査に協力するということは、ベッケルにとっては、地元地域の「言語 langue」がフランス政府によって保存（保護）される機会に貢献することを意味したため、彼は非常に熱心に民謡収集に協力したのだった<sup>1</sup>。クスマケルもベッケルも、言語的・文化的多様性を尊重して、緩やかに統合するようなフランスの姿を理想に掲げる国家観を共有していた。ベッケルは、フランス国内で唯一のフランドル語圏としての自負をフォルトゥール大臣や歴史研究委員会に対して強調したのに対し、クスマケルの方は、フランドル語圏唯一のフランス領であるからこそ、フランス・フランドル地方の民謡の旋律には固有な特徴があるという点を強調しながら、民謡収集の成果をまとめた。ベッケルとクスマケルの両者は地元のフランス・フランドル地方の民謡をフランスの民謡として公教育大臣に報告することを通じて、フランスとの関係だけでなく、国外の同一言語圏と地元地域との関係をも考えながら、フランス・フランドル地方の人間としてのアイデンティティを確立させていった。

第四に、フランス語圏における民謡収集の特徴を論じた。フランス語圏の地域に住む研究者達は、地方言語圏と比較して、自分達の地域には言語的固有性が乏しいと考えていた。彼らにとっては、民謡が民衆の歴史、あるいは地域の歴史（古代・中世等、地域の文化的起源）を体現するという考え方や、民謡の起源探求への関心が比較的希薄だった。代わってフランス語圏の地域の研究者達の関心を集めたのは、民謡の歌われる状況、すなわち、民謡を通して知ることのできる農村民衆の習俗だった。地域とフランスとの間の対立的な関係ではなく、パリから押し寄せる「文明」に農村民衆の「伝統」が対抗するという構図の言説が、フランス語圏の民謡報告の中に看取できた。研究者が地元の民衆のことばの一部を理解できないケースもあり、フランス語圏の地方の研究者自身のアイデンティ

---

<sup>1</sup> フォルトゥール大臣は地方言語を「国語〔フランス語〕に取って代わられた言語」と記し（本稿第1章37頁で引用）、既に過去のものとなったと見なしていたから、ベッケルのような考え方はフォルトゥール大臣側から見れば誤解に過ぎなかった。

ティが、民謡報告や民謡集に表れているとは言えない。だがフランス語圏の研究者らは農村民衆の習俗の一環として民謡を収集し、民衆のことばに特有の語彙・表現を仔細に観察することを通じて、県単位、ひいてはコミューン単位にまで細分化しながら、農村民衆の言語・習俗面での固有性を看取するに至った。地域内部の差異に敏感な態度を取り、地理的に見て狭小な地域ごとに固有性を見いだしていったことに、フランス語圏の民謡収集の特徴があった。フランス語圏で記された民謡に関する記述には、コミューンごとに細分化された地域意識のあり方が示されていた。地方在住の研究者らは、地元地域の農村民衆が、ことばや民謡や習俗の違いを根拠に、狭小な地域的なまとまりを単位とするようなアイデンティティを抱いているのではないかと考えて、これを表象していたのではないだろうか。

以上のように、フランスにおける民謡収集と地域意識の形成との関係は一様に捉えられるものではなく、フランスという国家との歴史的・言語的・文化的な距離感に応じて、地方在住の研究者達の地域意識の形成過程には異なった特徴があることが分かった。地方言語圏の場合、研究者達が地元地域の民衆が伝承してきた民謡に自らのアイデンティティを仮託しながら、民謡収集を行なっていた。これに対しフランス語圏の場合は、民謡収集が研究者自身のアイデンティティの形成と直結しているとは考え難い事例が見られた。フランス語圏の地域に住む研究者達は、農村民衆の習俗やことばには、たとえ地理的に近接する地域間であっても微妙な差異があるということに、民謡を収集することを通じて注目した。そしてそうした差異を地域的固有性と認識して、コミューン単位に細分化された形での地域意識を形成していた。

## 2 課題と展望

本稿の考察を受けた新たな課題は、次の通りである。第一に、フランス語圏の研究者達に関する課題である。第4章の章括で述べた通り、彼らの地域意識と国民意識との関係のあり方について考察するには、民謡収集に注目するという方法では、明らかにできる事柄に限界があるということが、本稿の試みの結果、分かった。こうした限界を踏まえつつ、本稿で得られた知見を生かして、次なる課題を設定していきたい。民衆の歴史の史料として民謡収集が捉えられ、研究者達自身のアイデンティティの形成と民謡収集とが大きく関連していた地方言語圏のケースとは異なった特徴が、フランス語圏の民謡収集には見られ

た。それは、フランス語圏の研究者らが、民謡収集を通じて農村民衆の習俗を観察・把握することに関心を持つ傾向にあったということ、そして、民謡を記録する研究者らが、民謡を伝承する担い手である農村民衆との間に一定の距離感を感じている事例があったということである。フランス語圏の研究者達は、地元地域の農村民衆の習俗やことばを観察したり民謡を収集したりする際に、自らの立ち位置をいかなるものと認識していたか。農村民衆を含めた地元地域を代表する者として自認し、パリでの発言力の強化を追究したベッケルのような研究者とは異なる自己認識を、フランス語圏の研究者達は抱いていたのではないか。この点を明らかにすることが、フランス語圏の諸地域に住む研究者達における地域意識と国民意識との関係のあり方をさらに明確に把握していく上で、一つの手がかりとなるだろう。そのためには、地方学術団体や歴史研究委員会で活躍する研究者としての顔だけでなく、地方在住の研究者達が地域社会の中で果たしていた役割を明らかにすることが有益と考えられる。それを踏まえた上で、地方在住の研究者達が地方学術団体等での研究（民謡収集を含めて）の成果をまとめた諸々の記述などの史料や、政府の一連の文化遺産保存政策への地方在住の研究者達の協力状況を分析することにより、フランス語圏の研究者達のアイデンティティの形成過程に迫っていくことができるのではないか。地方言語圏の研究者達の地域意識と国民意識との関係のあり方と比較することにより、フランス語圏の研究者達のケースの特徴を明瞭にできるものと思われる。

次に、地方在住の研究者らによるフォルトゥール調査の実践の様子について、分析対象とする地域を拡大することが第二の課題である。地方言語圏の例として、国境地域に位置する少数言語圏であるフランス・フランドル地方を本稿では取り上げたが、それ以外の地方言語圏でのフォルトゥール調査の実施状況を押さえ、フランス・フランドル地方の事例との比較を行なっていきたい。

第三に、本稿の問題関心からは逸れるため取り上げてこなかったが、フォルトゥール調査が第二帝政下実施されたことの意味を問うことも必要である。未刊行史料集成の枠内で民謡収集を行なうというギゾーの着想が断続的に継承されたという点や、歴史研究委員会の組織的変遷をたどっていくと、フランス政府の文化政策には、体制の変化を超えてある程度の連続性があった可能性が考えられ、本稿ではこちらの側面を重視した。とはいえ、民謡収集の計画が構想されては立ち消えた後、ようやく実現にこぎつけられたのが第二帝政下だったという点にも意味があるだろう。第二帝政政府の目指した「国民」像とはいかなるものだったのか、それは民謡収集といかなる形で整合性を持つのかといった点に



ついて、第二帝政論と合わせて論じていきたい。また、第2章で扱った歴史研究委員会の改組に関しても、第二帝政下の政治的意図について論証する必要もある。

第四に、本稿はフォルトゥール調査の行なわれた1850年代を中心に検討してきたが、フランスと地域とのあるべき関係（国家観）の捉え方について、後の時代との連関を今後検証していくことで、展望が開けてこよう。第3章で扱ったベッケルもクスマケルも、ともに地元地域がフランスの一部であることを誇る心情と、フランドル地方の言語的・文化的固有性に対する誇りとを併せ持っていた。彼らの国家観を本稿ではアンシアン・レژیームに近いものであった可能性を示唆したが、同時に、第三共和政的な「大きな祖国／小さな祖国」の論法と類似する要素もある。ベッケルやクスマケルが示したような国家観は、他の地方言語圏の地域でも見られるのか。見られるとすれば、論者達はいかなる政治的傾向を持っていたか。また、ベッケルらのような考え方が既にある程度、地方学術団体会員や初等視学官などの地方在住の学識ある層に全国的に広まっていたとすれば、これを巧みに利用しながら（「共和国」教育というファクターを入れつつ）第三共和政の初等教育の方針が組まれていった可能性はあるのか。クスマケルもベッケルも、フランス・フランドル地方という「家族」を重視しながらも、自分達がフランスに属す事実を誇っていた。「フランス」は、いかなる求心力で彼らを惹き付けたのか。19世紀フランスの国民意識のあり方について考察する上で、この点が鍵となるものと予想される。

最後に、歴史的建造物の保存、フォルトゥール調査以外の未刊行史料集成事業など、19世紀フランス政府が行なった一連の文化遺産保存政策を包括的に捉えることによって、フランス政府が形成を図った「国民」の姿とその変遷を跡づけることができると見込まれる。また、こうした政府の事業は地方の協力者との協同作業で進められたから、本稿で行なったように、政府側の意図と全国各地の協力者達（地方学術団体等に所属する研究者達）の意識のあり方との比較・対照が可能である。この課題は、本稿の試みによって緒に就いたばかりである。

【本論文の一部は「公益信託澁澤民族学振興基金 平成23年度大学院生等に対する研究活動助成」の助成を受けた研究の成果である。感謝とともにここに記す。】

## 資料

### 【資料1】歴史研究委員会の変遷

AN, F17/17130, Anon, « Tableaux présentant les modifications apportées à la dénomination, et au sectionnement du “Comité des Travaux historiques et scientifiques” de 1834-1885 », s.d. [1885?] を元に筆者作成。

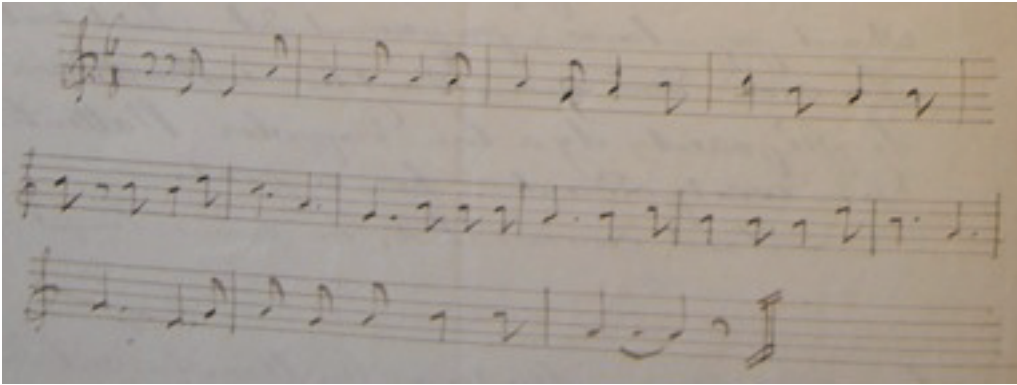
省令発布日	委員会の名称	部門	大臣名	主な活動目的
1834年7月18日	未刊行史料についての調査・出版委員会	なし	ギゾー	1: フランス史に関する史料の収集と出版 2: 全ての地方文書館での体系的分類を指導
1835年1月10日	改称せず	2部門を創設 1: 文学・哲学・科学部門 2: 美術部門	同上	
1837年12月18日	5委員会を創設 1: 言語・フランス文学委員会 2: 実証史学あるいは年代記・文書・碑文委員会（※「実証史学」は後に外される） 3: 科学委員会 4: 芸術・記念物委員会 5: 道徳科学・政治委員会（※哲学、経済学、法学が対象）		サルヴァン ディー	各委員会は学士院の各部門に付属
1840年8月30日	2委員会に再編 1: フランス史についての記述史料出版期成委員会 2: 芸術・記念物委員会		クーザン	
1852年9月14日	フランスの言語・歴史・芸術委員会	3部門を創設 1: 文献学部門 2: 歴史学部門 3: 考古学部門	フォルトゥール	フランスの民謡および民衆詩歌の収集
1858年2月22日	歴史研究および地方学術団体委員会	3部門を再編 1: 歴史・文献学部門 2: 考古学部門 3: 科学部門	ルーラン	1: 諸地域の地方学術団体の活動の指導 2: 毎年『地方学術団体雑誌』を発行
(1872年12月25日以前に改称)	歴史・科学研究委員会		シモン	
1883年3月12日	同上	5部門に再編 1: 歴史・文献学部門 2: 考古学部門 3: 経済・社会科学部門 4: 数学・物理・化学・気象学部門 5: 自然科学・地理学部門	フェリー	部門別に雑誌を発行

【資料2】 フランス・フラマン委員会による言語調査結果

Charles-Edmond-Henri de COUSSEMAKER, *Délimitation du Flamand et du Français dans le Nord de la France : avec une carte coloriée par M. Bocave : Extrait des Annales du Comité Flamand de France, tome III, Dunkerque, Typographie Benjamin Kien, 1857, p. 19* の記述に基づき筆者作成。同書巻頭の地図（頁番号なし）も参照。



【資料3】 クスマケル自筆譜のフランス・フランドル地方の民謡、“模範的採譜例”。



近代調性の規則に従えばソに＃をつけるところだが、そのように変えると平凡で魅力のない旋律となり、この歌の持つ素朴な特色を奪ってしまうとクスマケルは指摘している。

(クスマケルから公教育大臣への1853年5月6日付の書簡、AN, F17/3245、筆者撮影)

【資料4】 クスマケル『フランスのフラマン人達の民謡』目次：

1. クリスマスの歌と哀歌
2. 祭や宗教的儀式に関する歌
3. 道徳的・神秘的な歌
4. ドルイドの思い出
5. スカンジナビアの思い出
6. サーガ、バラッド、そして伝説
7. 海の歌
8. 滑稽歌と風俗歌
9. 聖アンヌの歌
10. ロンド（輪舞）と舞踏歌
11. 酒の（バッカスの）歌と愛の歌
12. 風刺歌
13. 子どもの歌



**XVI.**

**DEN MESSIAS.**

Allegro.

Wat vreugd hoor ik uyt s'hemels zae - len; 't schynt het aer - de -  
ryk is vol ge - schal. Ik hoor de en - g'len ne - der -  
dae - len, en hier lo - ven den Heer voor al. Want Mes -  
si - as, want Mes - si - as, want Mes - si - as,  
want Mes - si - as, want Mes - si - as, want Mes - si -  
as is de - zen nacht, want Mes - si - as is de - zen nacht voortge -  
bragt, tot troost van smensch ge - slacht; want Mes - si - as is  
de - zen nacht voortge-bragt, tot troost van smensch ge-slacht.

Wat vreugd hoor ik uyt shemels zaelen!  
't Schynt het aerderyk is vol geschal.  
Ik hoor de engelen nederdaelen,  
En hier loven den Heer voor al.  
Want Messias is dezen nacht  
Voortgebragt,  
Tot troost van smensch geslacht.

フランス・フランドル地方の民謡に特有の導音、変拍子が見られる例としてクスマケルは指摘する(pp.XIX-XXI)。

歌詞：「メシア（救世主）」

喜びの歌が天の穹窿（きゅうりゅう）のもとで聴こえ、あまねく大地に響き渡ると／天使達が主を褒め讃えようと降りてくる／メシアが今夜生まれたのだ／人類を慰めるために〔仏語訳より訳出〕」

この歌についてのクスマケルの解説（要旨）：このクリスマスソングはダンケルクの歌。近代調性とほとんど関係のないフレーズで、極めて古い旋律。末尾から数えて5～6小節にあるド#が特徴的。イ短調の主音に戻ることを決定づける音〔＝導音〕だが、最終小節およびその前の小節では#が外されている。ここに#を付けると旋律を歪め、変質させてしまう。この歌の民衆らしさは、作曲家の作品

ではなく、自然をおいて他には師をもたなかった者が旋律を作ったからこそ生まれた、幸運なる着想にこそあるのだ (p. 40)。

【資料6】 フォルトゥール調査の前後に出版された主なフランス民謡集

(民謡の載っていない方言研究も一部含んでいる。年代順。)

PLUQUET Frédéric, *Contes populaires, traditions, proverbes et dictons de l'arrondissement de Bayeux*, Caen, Chalopin, 1825.

J. V. (Anonyme), « Recherches sur la chanson », *Journal d'agriculture, lettres et arts du département de l'Ain*, Bourg, t. XVIII, 1834, pp. 213-224, 388-398 ; t. XIX, 1835, pp. 26-32.

NAVARROT (chansonnier populaire), *Estrées béarnèses*, Oloron, Serres, 1834.

LA VILLEMARQUÉ Théodore Hersart de, *Barzaz-Breiz*, Paris, Éditions Charpentier, 1839.

MAZURE P.-Adolphe, *Histoire du Béarn et du pays basque*, Pau, impr. de E. Vignancour, 1839.

TOMMASEO Nicolo, *Canti popolari toscani, corsi, illirici, greci*, Venezia, 1841-1842, 4 vols.

NERVAL Gérard de, « Les vieilles ballades françaises », *La sylphide*, VI, 1842, pp. 81-87.

ジェラルール・ド・ネルヴァル「ヴァロワの民謡と伝説」(『シルフィード』誌に初出後、『火の娘たち』の「シルヴィー—ヴァロワの思い出」章に再録)

『ネルヴァル全集V土地の精霊』中村真一郎・入沢康夫監修、

田村毅・丸山義編訳、筑摩書房、1997年所収。

SACAZE Gaston, « Chansons populaires de la vallée d'Ossau. Extraits d'un Recueil inédit communiqué à M. Badé », *Bulletin de la Société des sciences, lettres et arts de Pau*, t. III, 1843, pp. 219-222.

DUMERSAN et COLET, *Chants et chansons populaires de la France*, Paris, Delloye, 1843, 3 vols.

RIVARÈS Frédéric, *Chansons et airs populaires du Béarn*, Pau, Vignancour, 1844 ; 2<sup>e</sup> éd., Pau, Véronèse, 1868.

HINARD Damas (traduit par), *Romancero espagnol, ou recueil des chants populaires de l'Espagne*, Charpentier, 1844, 2 vols.

LAMARQUE DE PLAISANCE Alphonse, *Usages et chansons populaires de l'ancien Bazadais. Baptêmes, noces, moissons, enterremens*, Bordeaux, Imprimerie de Balarac jeune, 1845.

DUMERSAN et Noël SÉGUR, *Chansons nationales et populaires de France, avec notes historiques et littéraires*, Paris, Garnier Frères, 1846 ; 2<sup>e</sup> éd. 1866.

LE HÉRICHER Édouard, *Bibliographie normande*, Avranches, Imprimerie de E. Tostain, 1847.

DESROUSSEAU Alexandre-Joachim, *Chansons et pasquilles lilloises*, troisième recueil, Lille, Les principaux libraires, 1849.

FÉE, A.-L.-A., *Voceri, ou Chants populaires de la Corse précédés d'une excursion dans cette île en 1845*, Paris, Lecou, et Strasbourg, Dezivaux, 1850. (民謡集というよりも、民謡に関する考察を含んだコルシカ旅行記と言うべき内容)

LA VILLEMARQUÉ, « Sur les chants populaires de la Bretagne », *Bulletin archéologique de l'Association bretonne*, t. II, Rennes, 1850, pp. 116-125.

(地方学術団体の議事録。民謡論)

BAECKER Louis de, *Les Flamands de France. Études sur leur langue, leur littérature et leurs monuments*, Gand, Imprimerie et lithographie de L. Hebbelynck, 1850.

---

<sup>1</sup> このリストの作成に用いた参考文献は次の通り。VAN GENNEP, *Le folklore français*, t. 4 : Bibliographies, « Musique et chansons populaires ». COIRAULT, *Répertoire des chansons....* MARCEL-DUBOIS and LABORDE, « France, §II. Traditional Music », in SADIE (ed.), *The New Grove...*, vol. 9, pp. 159-165. Jérôme BUJEAUD, *Chants et chansons populaires des provinces de l'Ouest, Poitou, Saintonge, Aunis et Angoumois avec les airs originaux, recueillis et annotés*, Niort, L. Clouzot, 1866, pp. 18-20 (これらの頁に民謡集のリストが掲載されている)。他にフランス国立図書館のウェブOPAC (<http://www.bnf.fr/fr/acc/x.accueil.html>) も参照した。

TARBÉ Prosper, *Recherches sur l'histoire du langage et des patois de Champagne*, Reims, P. Regnier, 1851, 2 tomes.

---

【1852年9月、フォルトウール調査開始】

---

RATHERY Edme-Jacques-Benoît, « Des chansons populaires et historiques en France (1) », *Le moniteur universel*, n° 78, le 19 mars 1853, p. 313. (ラトゥリは歴史研究委員会正委員。フォルトウール調査の成果の編纂作業に最後まで関与した。)

MARCHAL Abbé L., « Poésie populaires de la Lorraine », *Société d'archéologie lorraine*, 1854. *Poésies populaires de la Lorraine*, Nancy, 1855. [s.l. 1854?]

COUSSEMAKER Charles-Edmond-Henri de, *Chants populaires des Flamands de France : recueillis et publiés avec les mélodies originales, une traduction française et des notes*, Gand, Imprimerie et lithographie de F. et E. Gyselynck, 1856.

CASTAIGNE Eusèbe(recueillies et annotées par), *Six chansons populaires de l'Angoumois*, Angoulême, 1856.

BEAUREPAIRE Eugène de, *Étude sur la poésie populaire en Normandie et spécialement dans l'Avranchin*, Avranches, Tostain et Anfray, Paris, Dumoulin et Aubry, 1856.

RIBAUT DE LAUGARDIÈRE Charles, *Lettres à M. le rédacteur du droit commun, sur quelques poésies populaires du Berry*, Bourges, 1856.

MICHEL Francisque, *Le pays basque : sa population, sa langue, ses mœurs, sa littérature et sa musique*, Paris, Firmin Didot Frères, 1857.

COUARAZE DE LAA, *Les chants du Béarn et de la Bigorre, ou Introduction à l'étude de la langue vulgaire et de sa littérature*. Bull. Soc. acad. Hautes-Pyrénées, t. VI, 1858-1861, Tarbes, 1862, pp. 199-300.

GUÉRAUD Armand, *En Bretagne et Poitou [texte imprimé] : chants populaires du comté nantais et du Bas-Poitou, recueillis entre 1856 et 1861 par Armand Guéraud*, Saint-Jouin-de-Milly, FAMDT, 1995, 2vols.

※同書の書評(小冊子)も。M. E. GAUTIER, *Étude sur les chants populaires. En français et en patois, de la Bretagne et du Poitou. Recueillis et annotés par Armand GUÉRAUD, Et couronnés en 1858, par la Société Académique*, Nantes, Imprimerie de M<sup>me</sup> V<sup>e</sup> Camille Mellinet, 1859.

STOEBER, *Elsässisches Volksbüchlein*, éd. de Mulhouse, 1859.

ARBAUD Damase, *Variétés religieuses ou choix de poésies provençales avec notes*, Makaire, Imprimeur-éditeur, 1860.

RIVARÈS Frédéric, *Chansons et airs populaires du Béarn, t.2 : Poésies béarnaises, avec la traduction française*, 1860.

CHAMPFLEURY et Jean-Baptiste WECKERLIN (accompagnement de piano par), *Chansons populaires des provinces de France*, Garnier Frères Libraires, 1860.

LE HÉRICHER Édouard, *Normandie scandinave, ou Glossaire des éléments scandinaves du patois normand*, Avranches, imprimerie Henri Tribouillard, 1861.

LINCY Leroux de, *Recueil de chants historiques français : depuis le XII<sup>e</sup> jusqu'au XVIII<sup>e</sup> siècle, avec des notices et une introduction*, Paris, Librairie de Charles Gosselin, 1861-1862, 2vols.

COMBES Anacharsis, *Chants populaires du pays castrais*, Castres, imprimerie de Vve Grillon, 1862.

RATHERY, « Les chants populaires de l'Italie », *Revue des deux mondes*, XXXII, 2<sup>e</sup> période, 15 mars 1862, pp. 351-358.

- ARBAUD Damase, *De la Poésie populaire en Provence*, Marseille, imprimerie de Vve M. Olive, 1862.
- BUCHON Max, *Noëls et chants populaires de la Franche-Comté*, Salins, Librairie Billet et Duvernois, 1863.
- TARBÉ Prosper, *Romancero de Champagne*, 1863, 5 vols.
- BEAUCHET-FILLEAU Henri, *Essai sur le patois poitevin ou petit glossaire de quelques-uns de mots usités dans le canton de Chef-Boutonne et les communes voisines*, Niort, L. Clouzot, Melle, Ch. Moreau, 1864.
- BOUILLIER Auguste, *Le dialecte et les chants populaires de la Sardaigne*, Paris, Dentu, 1864.
- VIDAL cadet E., *Lou Tambourin, musique, poésie*, Aix, Rémondet, et Avignon, Roumanille, 1864.
- DURIEUX Achille et Adolphe BRUYELLE, *Chants chansons populaires Cambrésis (avec les airs notés)*, Cambrai, Imprimerie de L. Carion, 1864-1867, 2 vols.
- MARCHAL Abbé L., « Poésie populaires de la Lorraine »[suite], *Mémoires de la Société d'archéologie lorraine*, 2<sup>e</sup> série, VII, 1865, pp. 43-87.
- PUYMAIGRE (le comte de), *Chants populaires recueillis dans le pays Messin*, Metz, 1865, 2 vols.
- FOUCARD Jean, *Poésies en patois limousin : édition philologique complètement refondue pour l'orthographe*, augmentée par M. Émile Ruben, Paris, Firmin Didot frères, fils, et Cie, 1866.
- BONET Prosper, « Légendes et chansons (de Besançon et de la Franche-Comté) », *Revue littéraire de la Franche-Comté*, III, 1865/66, pp. 69-74, 109-119, 156-168.
- BUJEAUD Jérôme, *Chants et chansons populaires des provinces de l'Ouest, Poitou, Saintonge, Aunis et Angoumois avec les airs originaux, recueillis et annotés*, Niort, L. Clouzot, 1866.
- NISARD Charles, *Des chansons populaires chez les anciens et chez les Français : Essai historique suivi d'une étude sur la chanson des rues contemporaine*, Paris, Dentu, 1867, 2 vols.
- LUZEL François-Marie, *Gwerziou Breiz-Izel : chants populaires de la Basse-Bretagne*, Paris, Lorient, 1868-1890, 2 vols.
- CÉNAC-MONCAUT Justin-Édouard-Mathieu, *Littérature populaire de la Gascogne*, Paris, Dentu, 1868.
- CANAT Marcel, *Vocabulaire raisonné et comparé du dialecte et du patois de la province de Bourgogne*, 1869.

---

【（参考）第三共和政下の主な民謡集など】

---

- DU CAMP Maxime, *Lettre à M. le Ministre de l'Instruction publique sur les Chants populaires de la France*, 1877.
- BUCHON Max, *Chants populaires de la Franche-comté*, Paris, Sandoz et Fischbacher, 1878.
- BLADÉ Jean François, *Poésies populaires de la Gascogne*, Paris, 1882.
- FERTIAULT François, *Histoire d'un chant populaire bourguignon*, 1883 ; deuxième édition, considérablement augmentée, Paris, Bouillon, 1900.
- LE HÉRICHER Édouard, *Littérature populaire de Normandie*, Avranches, Imprimerie Henri Gibert, 1884. (序文冒頭で『手引』を引用)
- WECKERLIN Jean-Baptiste, *La chanson populaire*, Paris, Librairie de Firmin-Didot et Cie., 1886.
- Contes populaires recueillis dans la Grande-Lande, le Born, les Petites-Landes et le Marensin*, Paris et Bordeaux, 1887.
- TIERSOT Julien, *Histoire de la chanson populaire en France*, Paris, 1889.
- VIEULES, « Vieux chants populaires [de l'Albigeois] », *Revue historique, scientifique et littéraire du département du Tarn*, t. VIII, 1890-1891, pp. 256-257. (歌詞のみ 仏語訳なし)



BOUCHOR Maurice et Julien TIERSOT, *Chants populaires pour les écoles*, Paris, 1895.

(古い民謡も掲載されているが、多くは新たに作曲された作品で、

共和国を称揚する内容の歌詞が付けられている)

ARNAUDIN Félix, *Chants populaires de la Grande-Lande et des régions voisines*, Paris, 1912.

TRÉBUCQ, *Chanson populaire Pyrénées-Vendée*, t. II, pp. 27-59 (chansons du Gers), pp. 61-83  
(Landes), Bordeaux, 1912, 2 vols.

POUEIGH Jean, *Chansons populaires des Pyrénées françaises, traditions, mœurs, usages*, Paris, 1926.

*Chansons populaires des Pyrénées françaises : traditions, mœurs, usages*, Paris, 1926.

## I. 史料

### ・ フランス国立古文書館 Archives Nationales de France 所蔵史料

LH/87/69 : « de Backer, Louis Benoit Désiré ».

- « Reconstitution des matricules des membres de la Légion d'honneur : de Backer »

LH/619/21 : « de Coussemaker, Charles Edmond Henri ».

(以上のLH史料については、フランス文化省と国立古文書館とによって運営されている、  
レジオン・ドヌール受勲者データベースLÉONORE <http://www.culture.gouv.fr/documentation/leonore/leonore.htm>で史料の画像を閲覧した。)

F17\*/3160 : Statistique de l'enseignement primaire sous le ministère Duruy [Entre 1863 et 1869].  
« États divers » ch.8, idiomes et patois.

F17/2811 : Correspondants des travaux historiques.

F17/2831 : Comité des travaux historiques et scientifiques : organisation, personnel.

F17/2834 : Comité des Travaux historiques et scientifiques: personnel. 1834-1921 env.

Membres ; dossiers individuels, H-N.

F17/2837 : Correspondants du Ministère, membres non résidents et honoraires et Comité dossiers  
individuels et communications. XIX<sup>e</sup> siècle-1921 env.

(以下、F17/2886/1まで同様の標題で分類されている。以下では省略する。)

; Aragon-Azam (y compris le dossier Arbaud).

F17/2838 : Babeau-Barckhausen (y compris Baecker).

F17/2843 : Cabaret-Cazenave de la Roche (y compris Castaigne).

F17/2846/2 : Collenot-Compayré (y compris Combes).

F17/2847 : Conny-Cudot (y compris Coussemaker).

F17/2857 : Gragnon-Lacoste à Gyss (y compris Guéraud).

F17/2866/1 : Legrand-Leroi (y compris Le Héricher).

F17/2886/1 : Taiée-Thuot (y compris Tarbé).

F17/2935A : Missions scientifiques et littéraires : dossiers individuels. 1828-1894 env.

; Babelon-Bary (y compris Baecker).

F17/3245 : PUBLICATIONS : des publications faites sous les auspices du ministère avec la  
collaboration de l'Institut, des différents sections du Comité des travaux historiques.

*Collection de Documents inédits sur l'histoire de France* : impression, vente, distribution ;  
dossiers des publications : projets de publications et de travaux. 1835-1906 env.

(以下、F17/3265まで同様の標題で分類されている。以下では省略する。)

: Poésies populaires.

(y compris les dossiers suivants ;

« Décrets, circulaires correspondance 1852-1876 »

« Poésies contemporaines envoyées par leurs auteurs »

« Poésies populaires : Envois divers »

« Poésies populaires » (Amiel)

« Recteurs, inspecteurs ... Envois et remerciements »

« Envois des Recteurs, des Inspecteurs de l'Enseignement primaires, etc. »

« Correspondants : Envois et remerciement »)

F17/3246 : Poésies populaires (mises en musique ou non) envoyées par les correspondants et déposées aux archives du comité (ordre chronologique des séances) 1852-1857.

F17/3265 : Augustin Thierry, *Histoire du Tiers États*.

F17/17130 : Archives du Comité (1834-1951) : Organisation du Comité des travaux historiques. 1834-1883.

246AP : Archives Fortoul.

15 : Papiers d'Hippolyte Fortoul, ministre de la marine 26 octobre-2 décembre 1851.

16 : Papiers d'Hippolyte Fortoul, ministre de l'instruction publique : lettres et dossiers divers, 1852-1856.

17 : Hippolyte Fortoul, ministre de l'instruction publique : Rapport sur l'instruction publique, septembre 1853.

19 : Affaire diverses du ministère et réforme de l'Institut.

27 : Correspondance reçue : ch.3 Lettres de l'Empereur

28 : Correspondance reçue : dr. 1 Membres de sa famille, dr. 4 Femmes de lettres et dames diverses

31 : Mémoires et notes diverses

33 : Œuvres littéraires : *De l'art en Allemagne* (1840-1854 et s.d.)

36 : Hippolyte Fortoul, ministre de l'instruction publique : Correspondance reçue et manuscrits divers (documents classés à part par H. Fortoul lui-même) : dr. 1

## ・史料目録

ANTOINE Marie-Elisabeth et Suzanne OLIVIER, *Inventaire des papiers de la division des sciences et lettres du ministère de l'instruction publique et des services qui en sont issus (sous-série F17)*, 2 tomes, Paris, Archives Nationales, 1975-1981.

*État général des fonds des Archives nationales (Paris). Mise à jour 2009.* « F/17 Instruction publique », [http://www.archivesnationales.culture.gouv.fr/chan/chan/fonds/F17\\_2009.pdf](http://www.archivesnationales.culture.gouv.fr/chan/chan/fonds/F17_2009.pdf). (2013年2月27日現在、リンクが有効であることを確認)

*État sommaire des versements faits aux Archives nationales par les ministères et les administrations qui en dépendent (version de 1962)*, « F<sup>17</sup>. Instruction publique », [http://www.archivesnationales.culture.gouv.fr/chan/chan/series/pdf/ESV\\_F17.pdf](http://www.archivesnationales.culture.gouv.fr/chan/chan/series/pdf/ESV_F17.pdf) (2013年2月27日現在、リンクが有効であることを確認)

LE GOFF Armelle, *Ministère de l'Instruction publique : Service des Missions : Missions scientifiques et littéraires, F/17/2935-3014, F/17/17225-17294 : Index nominatif des voyageurs et index géographique des destinations de leurs missions*, Paris, Centre historique des Archives Nationales, 2005.

## ・フランス国立図書館 Bibliothèque Nationale de France 所蔵史料

*Poésies populaires de la France*, Bibliothèque nationale de France, dép. manuscrit, fond français, nouvelle acquisition, n°s 3338-3343.

## • 刊行史料

- AMPÈRE Jean-Jacques, « Poésies populaires de la France : Instructions du Comité de la langue, de l'histoire et des arts de la France », in *Bulletin du Comité de la langue, de l'histoire, et des arts de la France*, Paris, Imprimerie impériale, t. 1, 1854, pp. 217-279.  
(官報紙上にも掲載。Id., « Poésies populaires de la France », *Moniteur universel*, 19 octobre 1853, p. 1163 ; 19 octobre 1853, pp. 1171-1172 ; 23 octobre 1853, pp. 1179-1180 ; 25 octobre 1853, pp. 1187-1188.)
- Annales du Comité Flamand de France* : 1853, Dunkerque, Mme Thery et les autres libraires, 1854.
- ARBAUD Damase (recueillis et annotés par), *Chants populaires de la Provence*, Aix, Makaire, 1862-1864 ; rééd., Nyons, Chantemerle, 2 vols., 1972.
- BAECKER Louis de, *Recherches historiques sur la ville de Bergues, en Flandre*, Bruges, Vandecastelle-Werbrouck, 1849.
- , *Les Flamands de France : Études sur leur langue, leur littérature et leurs monuments*, Gand, Imprimerie et lithographie de L. Hebbelynck, 1850.
- (recueillis par), *Chants historiques de la Flandre : 400-1650*, Lille, Ernest Vanackere, Libraire-éditeur, 1855.
- , *Grammaire comparée des langues de la France : Flamand, Allemand, Celto-breton, Basque, Provençal, Espagnol, Italien, Français comparés au Sanscrit*, Paris, Librairie Ch. Blériot, 1860.
- , *De langue néerlandaise et des premiers monuments littéraires écrits en néerlandais : leçon d'ouverture du cours de littérature néerlandaise fait à Paris, dans la salle Gerson, annexe de la Sorbonne*, Paris, Ernest Thorin, Libraire-éditeur, 1868.
- , *Histoire de la Littérature néerlandaise : depuis les temps les plus reculés jusqu'à Vondel. Cours fait à la Sorbonne en 1868-1869*, Louvain, Typographie de Vanlinthout Frères, 1871.
- Bulletin du Comité de la langue, de l'histoire, et des arts de la France*, 4 tomes (t. 1 : 1852-1853, t. 2 : 1853-1855, t. 3 : 1855-1856, t. 4 : 1857), Imprimerie impériale, 1854-1860.
- BUJEAUD Jérôme, *Chants et chansons populaires des provinces de l'Ouest, Poitou, Saintonge, Aunis et Angoumois avec les airs originaux, recueillis et annotés*, Niort, L. Clouzot, 1866.
- CASTAIGNE Eusèbe (recueillies et annotées par), *Six chansons populaires de l'Angoumois*, Angoulême, Imprimerie de J. Lefraisse et cie, 1856.
- CHAMPFLEURY (notices par) et J.-B. WECKERLIN (accompagnement de piano par), *Chansons populaires des provinces de France*, Paris, Lécivain et toubon /Garnier Frères Libraires, 1860.
- CHARMES Xavier, *Le Comité des travaux historiques et scientifiques (histoire et documents)*, Paris, Imprimerie nationale, 3 tomes, 1886.
- CHEYRONNAUD Jacques (édité et introduit par), *Instructions pour un Recueil général des poésies populaires de la France (1852-1857)*, Paris, CTHS, 1997.
- COMBES Anacharsis, *Chants populaires du pays castrais (1862)*, Castres, imprimerie de Vve Grillon, 1862 ; reprint, Kessinger Legacy Reprints, 2010.
- COUSSEMAKER Charles-Edmond-Henri de, *Délimitation du Flamand et du Français dans le Nord de la France : avec une carte coloriée par M. Bocave : Extrait des Annales du Comité Flamand de France, tome III*, Dunkerque, Typographie Benjamin Kien, 1857.
- , *Chants populaires des Flamands de France : recueillis et publiés avec les mélodies originales, une traduction française et des notes*, Gand, Imprimerie et lithographie de F. et E. Gyselynck, 1856.



- DUVERGIER J. B. (éd.), *Collection complète des lois, décrets, ordonnances, règlements et avis du Conseil d'État : Année 1852*, Directeur de l'administration, 1852 ; reprint, Bad Feilnbach, Schmidt Periodicals, 1995.
- FERTIAULT François, *Histoire d'un chant populaire bourguignon (1900 ; 2<sup>e</sup> éd.)*, Paris, Bouillon, 1900 ; reprint, Kessinger Legacy Reprints, 2010.
- FORTOUL Hippolyte, « Rapport au Prince Président de la République française », s.d., in *Bulletin du Comité de la langue...*, t. 1, pp. 21-22.
- (publié par Geneviève MASSA-GILLE), *Journal d'Hippolyte Fortoul, ministre de l'instruction publique et des cultes (1811-1856), 1<sup>er</sup> janvier 1855 - 4 juillet 1856*, Genève, Librairie Droz, 2 vols., 1979-1989.
- GUÉRAUD Armand, *En Bretagne et Poitou : chants populaires du comté nantais et du Bas-Poitou, recueillis entre 1856 et 1861 par Armand Guéraud*, Saint-Jouin-de-Milly, FAMDT, 2 vols., 1995.
- GUIZOT François, « Seconde lettre du Ministre de l'instruction publique aux correspondants historiques de son ministère », le 15 mai 1835, in *Collection des documents inédits sur l'histoire de France*, vol. 1, Imprimerie royale, 1835, pp. 67-81.
- LAMARQUE DE PLAISANCE Alphonse, *Usages et chansons populaires de l'ancien Bazadais. Baptêmes, noces, moissons, enterremens*, Bordeaux, Imprimerie de Balarac jeune, 1845.
- LE HÉRICHER Édouard, *Bibliographie normande*, Avranches, Imprimerie de E. Tostain, 1847.
- , *Philologie de la flore scientifique et populaire de Normandie et d'Angleterre*, Coutances, imprimerie de Salettes, 1883.
- MERLET Lucien, *Poètes beaucerons antérieurs au XIX<sup>e</sup> siècle*, Chartres, Durand, 2 vols., 1894.
- RIBAULT DE LAUGARDIÈRE Charles, *Lettres à M. le rédacteur du droit commun, sur quelques poésies populaires du Berry*, Bourges, Imprimerie de E. Pigelet, 1856.
- TARBÉ Prosper, *Recherches sur l'histoire du langage et des patois de Champagne*, Reims, P. Regnier, 2 tomes, 1851.
- THIERRY Augustin, *Recueil des monuments inédits de l'histoire du tiers état*, Paris, Typographie de Firmin Didot Frères, Imprimeurs de l'Institut de France (t. 1-3), Imprimerie impériale (t. 4), 4 tomes, 1850-1870.

## II. 研究文献

- ANTOINE Marie-Elisabeth, « Un service pionnier au XIX<sup>e</sup> siècle : Le bureau des travaux historiques d'après ses papiers aux Archives Nationales », *Bulletin de la Section d'histoire moderne et contemporaine*, fasc. 10 : Orientation de recherche, Paris, Bibliothèque nationale de France, 1977, pp. 5-72.
- BARRERA Caroline, *Les sociétés savantes de Toulouse au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, CTHS, 2003.
- BELMONT Nicole, *Paroles païennes : Mythe et folklore*, Paris, Imago, 1986.
- BÉNICHOU Paul, *Nerval et la chanson folklorique*, Paris, José Corti, 1970.
- BERCÉ Françoise, « Archisse de Caumont et les sociétés savantes », in Pierre NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. II : La nation*, vol. 2, pp. 532-567.
- BERTHO Catherine, « L'invention de la Bretagne. Genèse sociale d'un stéréotype », *Actes de la recherche en sciences sociales*, n°35, 1980, pp. 45-62.
- BERTHOU-BÉCAM Laurence et Didier BÉCAM, *L'enquête Fortoul (1852-1876) : chansons populaires de Haute et Basse-Bretagne*, Paris, CTHS / Rennes, Dastum, 2 vols., 2010.
- BOURGUET Marie-Noëlle, *Déchiffrer la France : La statistique départementale à l'époque napoléonienne*, Paris, Éd. des archives contemporaines, 1988 ; 1989.

- BROMBERGER Christian, « Ethnologie, patrimoine, identités : Y a-t-il une spécificité de la situation française? » in Daniel FABRE (dir.), *Europe entre cultures et nations : Actes du colloque de Tours, Décembre 1993*, Paris, MSH, 1996, pp. 9-23.
- CERTEAU Michel de, Dominique JULIA et Jacques REVEL, *Une politique de la langue : La Révolution et les patois*, Paris, Gallimard, 1975.
- CHALINE Jean-Pierre, *Sociabilité et érudition : Les sociétés savantes en France*, Paris, CTHS, 1995 ; 1998.
- CHANET Jean-François, *L'École républicaine et les petites patries*, Paris, Aubier, 1996.
- CHASTEL André, « La notion de patrimoine », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire: t. II, La Nation*, vol. 2, 1986, pp. 405-450.
- CHEYRONNAUD Jacques, *Mémoires en recueils : Jalons pour une histoire des collectes musicales en terrain français*, Montpellier, Office Départemental d'Action Culturelle, 1986.
- COIRAULT Patrice, *Répertoire des chansons françaises de tradition orale*, ouvrage révisé et complété par Georges DELARUE, Marlène BELLY et Simone WALLON, Paris, Bibliothèque nationale de France, 3 tomes, 1996-2006.
- DELARUE Paul, « Introduction », *Le conte populaire français : catalogue raisonné des versions de France*, t. I, Paris, Maisonneuve et Larose, 1976 ; rééd., 2002.  
(ポール・ドラリュ「フランスの民話について」新倉朗子編訳『フランス民話集』所収、岩波書店、1993年、313-390頁)
- DETHAN Georges, « Adolphe Chéruel et le comité des travaux historiques », *Actes du 100<sup>e</sup> congrès national des sociétés savantes*, t. I, Paris, Bibliothèque nationale de France, 1976, pp. 77-86.
- DUBUC André, « L'enquête de 1853 sur la chanson populaire en Normandie », *Annales de Normandie*, n°2, 1952, pp. 151-157.
- EMERSON John A., Jane BELLINGHAM and David HILEY, « Plainchant », in Stanley SADIE (ed.), *The New Grove Dictionary of Music and Musicians Second Edition*, vol. 12, London, Macmillan, 2001, pp. 854-855.
- FERMIGIER André, « Mérimée et l'Inspection des monuments historiques », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. II : La nation*, vol. 2, Paris, Gallimard, 1986, pp. 593-612.
- FABRE Daniel, « Proverbes, contes, et chansons », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. III : Les France*, vol. 2, Paris, Gallimard, 1992, pp. 613-639.
- FULCHER Jane, « The Popular Chanson of the Second Empire : 'Music of the Peasants' in France », *Acta Musicologica*, n°52, 1980, pp. 27-37.
- GASNIER Thierry, « Le local : une et divisible », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. III : Les France*, vol. 2, pp. 463-525.
- GERSON Stéphane, *The Pride of Place : Local Memories and Political Culture in Nineteenth-Century France*, Ithaca and London, Cornell University Press, 2003.
- , « L'État français et le culte malaisé des souvenirs locaux, 1830-1870 », *Revue d'histoire du XIX<sup>e</sup> siècle*, n°29, 2004, pp. 13-29.
- GUILLET François, « Naissance de la Normandie (1750-1850) », *Terrain* [en ligne], n° 33, 1999, mis en ligne le 09 mars 2007, URL : <http://terrain.revues.org/index2712.html> (DOI : en cours de distribution).
- , « Entre stratégie sociale et quête érudite : les notables normands et la fabrication de la Normandie au XIX<sup>e</sup> siècle », *Le Mouvement Social* [en ligne], n° 203, 2003/2, pp. 89-111, DOI : 10.3917/lms.203.0089.
- GUIOMAR Jean-Yves, « Le Barzaz-Breiz de Théodore Hersart de La Villemarqué », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. III : Les France*, vol. 2, pp. 526-565.

- HEURTEMATTE François, « Introduction : Heurs et malheurs d'Ossian », in HEURTEMATTE (éd.), *Ossian / Macpherson, Fragments de poésie ancienne : traduction de Diderot, Turgot, Suard...*, Paris, José Corti, 1990, pp. 7-65.
- HROCH Miroslav, *Social Preconditions of National Revival in Europe*, translated by Ben FOWKES, New York, Colombia University Press, 1985 ; 2000.
- LAFORTE Conrad, *La chanson de tradition orale : Une découverte des écrivains du XIX<sup>e</sup> siècle (en France et au Québec)*, Montréal, Triptyque, 1995.
- LAURENT Donatien, *Aux sources du Barzaz-Breiz : La mémoire d'un peuple*, Douarnenez, ArMen, 1989.
- LEROY Rodolphe, *Une institution de recherche au cœur de l'essor scientifique européen : Le Comité des travaux historiques et scientifiques en France et à l'étranger, de sa création en 1834 à celle du CNRS en 1939*, directeur de recherche : Jean-Michel Leniaud, Paris, École pratique des hautes études, 2000.
- MARCEL-DUBOIS Claudie and Denis LABORDE, « France, §II. Traditional Music », in Stanley SADIE (ed.), *The New Grove Dictionary of Music and Musicians Second Edition*, vol. 9, London, Macmillan, 2001, pp. 159-165.
- OZOUF Mona, « L'invention de l'ethnographie française : Le questionnaire de l'Académie celtique », *Annales ESC*, n°2, 1981, pp. 210-230 (OZOUF, *L'école de la France : Essais sur la Révolution, l'utopie et l'enseignement*, Paris, Gallimard, 1984, pp. 349-379に再録).
- PARSIS-BARUBÉ Odile, *La province antiquaire : L'invention de l'histoire locale en France (1800-1870)*, Paris, CTHS, 2011.
- PELLEGRINETTI Jean-Paul, « Langue et identité : l'exemple du corse durant la troisième république », *Cahiers de la Méditerranée* [en ligne], vol. 66, 2003, mis en ligne le 21 juillet 2005, URL : <http://cdlm.revues.org/index116.html> (DOI : en cours de distribution).
- PLÖTNER-LE LAY Bärbel, « Redécouverte et valorisation », in Hélène MILLOT, Nathalie VINCENT-MUNNIA, Marie-Claude SCHAPIRA, et Michèle FONTANA (dir.), *La poésie populaire en France au XIX<sup>e</sup> siècle : Théories, pratiques et réception*, Tusson (Charente), Du Lérot, 2005, pp. 25-66.
- PIERRARD Pierre, *La vie quotidienne dans le Nord au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Hachette, 1976.  
———, *Histoire du Nord*, Paris, Hachette, 1978 ; 1992.
- PISTONE Danièle, « Edmond de Coussemaker (1805-1876), Pionnier de la musicologie française », *Revue du Nord*, n°242, 1979, pp. 609-623.
- POMIAN Krzysztof, « Francs et Gaulois », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. III : Les France*, vol. 1, pp. 40-105. (クシトフ・ポミアン「フランク人とガリア人」上垣豊訳、ピエール・ノラ編、谷川稔監訳『記憶の場Ⅰ対立』所収、岩波書店、2002年、59-125頁。)
- , « Patrimoine et identité nationale », *Le Débat*, n°159, mars-avril 2010, pp. 45-56.
- POULOT Dominique, « Naissance du monument historique », *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, n°3, 1985, pp. 418-450.  
———, *Musée, nation, patrimoine 1789-1815*, Paris, Gallimard, 1997.  
———, *Une histoire du patrimoine en Occident, XVIII<sup>e</sup>-XXI<sup>e</sup> siècle : Du monument aux valeurs*, Paris, PUF, coll. « Le nœud gordien », 2006.
- RAPHAËL Paul et Maurice GONTARD, *Hippolyte Fortoul, 1851-1856 : Un ministre de l'instruction publique sous l'Empire autoritaire*, Paris, PUF, 1975.
- TANCHOUX Philippe, « Heurs et malheurs de l'administration chargée de la protection des monuments historiques en France ; 1830-1848 », *Culture et gouvernance locale* (Laurentian University, Sudbury, Ontario, Canada), vol. 1, n°1, 2008, pp. 28-46.

- THEIS Laurent, « Guizot et les institutions de mémoire », in NORA (dir.), *Les Lieux de mémoire, t. II : La nation*, vol. 2, pp. 569-592.
- THIESSE Anne-Marie, *Ils apprenaient la France : L'exaltation des régions dans le discours patriotique*, Paris, MSH, 1997.
- , *La création des identités nationales : Europe XVIII<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Éd. du Seuil, 1999 ; rééd. « points histoire », 2001.
- , « La construction de la culture populaire comme patrimoine national, XVIII<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècles », in Dominique POULOT (dir.), *Patrimoine et modernité*, Paris, L'Harmattan, 1998, pp. 267-278.
- VALIÈRE Michel, *Ethnographie de la France : Histoire et enjeux contemporains des approches du patrimoine ethnologique*, Paris, Armand Colin, 2002.
- VAN GENNEP Arnold, *Le folklore français*, t. 4 : Bibliographies, « Musique et chansons populaires », Robert Laffont, 1999, pp. 609-637 ; rééd. de *Manuel de folklore français contemporain*, Paris, Picard, 1937-1958.
- VIGIER Philippe, « Diffusion d'une langue nationale et résistance des patois, en France, au XIX<sup>e</sup> siècle : Quelques réflexions sur l'état présent de la recherche historique à ce propos », *Romantisme*, n°25-26, 1979, pp. 191-208.
- WANGERMÉE Robert, « Coussemaker », in Stanley SADIE (ed.), *The New Grove Dictionary of Music and Musicians Second Edition*, vol. 6, London, Macmillan, 2001, pp. 614-615.

井上さつき『パリ万博音楽案内』音楽之友社、1998年。

岩本和子『周縁の文学—ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷』松籟社、2007年。

河崎靖『ゲルマン語学への招待—ヨーロッパ言語文化史入門』現代書館、2006年。

工藤光一「国民国家と『伝統』の創出—1870-1914年、フランスの事例から」

樺山紘一ほか編『岩波講座世界歴史第18巻工業化と国民形成』岩波書店、1998年所収、187-216頁。

ゲルナー、アーネスト『民族とナショナリズム』加藤節訳、岩波書店、2000年。

斉藤綱子、佐藤弘幸ほか「IIベネルクス」、森田安一編『新版世界各国史14スイス・ベネルクス史』所収、山川出版社、1998年。

阪上孝『近代的統治の誕生—人口・世論・家族』岩波書店、1999年。

サンド、ジョルジュ『フランス田園伝説集』篠田知和基訳、岩波書店、1988年。

ジオルダン、アンリ編『虐げられた言語の復権—フランスにおける少数言語の教育運動』原聖訳、批評社、1987年。

スミス、アントニー・D『ナショナリズムの生命力』高柳先男訳、晶文社、1998年。

同『ネイションとエスニシティ—歴史社会学的考察』巢山靖司・高城和義他訳、名古屋大学出版会、1999年。

ダントン、ロバート「農民は民話をとおして告げ口する」海保真夫、鷺見洋一訳『猫の大虐殺』所収、岩波書店、1986年；2007年。



デーヴィス, ナタリー・ゼーモン『愚者の王国 異端の都市—近代初期フランスの民衆文化』第8章「諺と迷信」成瀬駒男・宮下志朗・高橋由美子訳、平凡社、1987年。

ネルヴァル, ジェラルド・ド「ヴァロワの民謡と伝説」(『火の娘たち』の内の「シルヴィー—ヴァロワの思い出」の章の一節)『ネルヴァル全集V土地の精霊』中村真一郎・入沢康夫監修、田村毅・丸山義編訳、筑摩書房、1997年所収。

野村啓介『フランス第二帝制の構造』九州大学出版会、2002年。

原聖『〈民族起源〉の精神史—ブルターニュとフランス近代』岩波書店、2003年。

福井憲彦『ヨーロッパ近代の社会史—工業化と国民形成』岩波書店、2005年。

ホブズボーム, エリック・J『ナショナリズムの歴史と現在』浜林正夫・嶋田耕也・庄司信訳、大月書店、2001年。

堀内一徳「フランドル伯領」京大西洋史辞典編纂会編『新編西洋史辞典 改訂増補』東京創元社、2000年(改訂増補第5刷)。

前川貞次郎「フランドル戦争(帰属戦争)」京大西洋史辞典編纂会編『新編西洋史辞典 改訂増補』東京創元社、2000年(改訂増補第5刷)。

梁川英俊「ブルターニュにおけるナショナリズムの誕生—『バルザズ・ブレイズ』以前のラヴィルマルケ(一)～(四)」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』、第54-57号、2001-2003年。

梁川英俊「ラヴィルマルケとリュール—いわゆる『バルザズ・ブレイズ論争』について(一)～(八)」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』57-70号、2003-2009年。

リュティ, マックス『増補ヨーロッパの昔話—その形式と本質』小澤俊夫訳、岩崎美術社、1976年。